
零獄 3 (GENESIS CRADLE)

砂上 巳水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋獄3 (GENESIS CRADLE)

【Nコード】

N0240K

【作者名】

砂上 巳水

【あらすじ】

ディエス・イレ対イミユニティー決着——！

イミユニティーへの総攻撃を行う直前、ディエス・イレの本部は突如謎の部隊の襲撃を受け壊滅した。

誰もが予想だにしなかったその事件から二日後。

黒服の総帥である白居と、イミユニティーの代表である六角に繋がりがあつたことを知つた巳名截（ノ曲直悟）は、六角が所有する屋内人工都市「常世国」へと来ていた。

ディエス・イレの壊滅。六角と白居の関係。

調査を進めるうちに、截は行方不明となっていたある人物の姿を目にする。

ディエス・イレのボス。東郷大儀だ。

そしてそれを境に、常世国のあちこちから無数の感染者があらわれ出し始める。

東郷を止めるべく奔走するうちに、截は懐かしい二人の人間と再会する。

そしてその出会いは、彼らの運命を、未来を。ひとつの方向へと導いていた。

<第一章>生物災害（前書き）

この小説は作中用語を理解するため、尋獄（BLUCK DOMA
IN） 尋獄2（SURGE GARDEN） 尋獄E1（DEG
AUSS JAIL） 尋獄E2（BLOODY STORAGE）
を御覧になつてからお読みになることをお勧め致します。

<第一章>生物災害

あちらこちらから黒い煙が立ち昇っている。

夜の空を赤く染め、白い壁を茶に焦がす。

大地の上には無数の死骸が転がり、その命の水を、肉を、所々へと飛び散らせている。

風に乗って死の臭いがしつこく広がり、今この場所が本当に地上なのかと、錯覚させられる。

それが、テログループ——ディエス・イレの隠れ家、この廃工場の現状だった。

「どっちへ行った？」

工場内、地下駐車場。真っ黒な服を纏った若い男が、周囲を見渡しながらかう聞いた。

「この先で間違いないはずだ。ここ以外は既に俺たちの仲間が制圧している」

男と行動を共にしている同じ服装の人間が答える。

「おい、あれ……扉が開いているぞ！」

若い男は駐車場の隅にある、小さな開いたままの扉を指差した。

そこには看板が掛かっており、「地下水道連結路」と書かれている。

「水路？ 不味い、逃げられるぞ」

男の同僚は慌てて走り出した。

「お、おい！ 俺たちだけで行くのか？ 援軍を呼んだ方が……」

「そんなことしてたら逃げられちまう。なに、たかがテロリストだ。俺らの敵じゃねえだろ」

男の同僚はよほどの自信があるらしく、かなり余裕そうな表情を浮かべた。

それを見た若い男も、それもそうかと納得し、あとに続く。

二人が扉を潜り抜けると、そこは先ほどまでの駐車場とは打って変わり、電灯が全て切られ一面黒一色だった。

「ち、ブリーカーを落としかがったな」

同僚は舌打ちし自分のポケットから懐中電灯を取り出すと、その光で通路を照らした。

「見る、血だ」

若い男が床に赤い水溜りを発見し神妙な顔を作る。同僚の男は屈んでそれに触れると、安堵したように呟いた。

「まだ暖かい。近くに居るぞ」

若い男は頷くと手の中にある漆黒のナイフを握り直し、同僚の照らす光を頼りに静かに前に進んだ。

階段を降り、電算室の前を通り抜け、とうとう二人は水路へと到着した。

目の前に腹を押さえた背の低い小太りの男が、驚いたようにこちらを向き立っている。

「ち、東郷じゃないな」

同僚は獲物がただの一テロメンバーだと分かり、がっかりした。

「もう逃げられないぞ。武器を捨てこっちに来い。抵抗さえしなければ害は与えない」

そんなつもりは一切ないにも関わらず、若い男は優しい言葉をかけた。

「ほ、本当ですか？ な、何もしませんか？」

若干芝居がかったような声で、小太りの男は聞き返す。

「ああ、本当だ。いいからさっさとこっちに来い」

若い男が促すと、小太りの男は二人の前まで歩き、光の下へと顔を出した。

真丸の大きな目に童顔な顔。達磨のような体型の男だ。

「さあ、後ろを向いて壁に手を付け」

若い男がそう言うとは何故かその達磨男は歪こわな笑みを浮かべた。

「その前にあなた方が後ろを見た方がいいんじゃないでしょうか？」

「はああ、なに言つてやがる？——ん、お前その腹の血……傷が無いぞ。自分の血じゃないのか」

「ああ、これですか。これはあなた方の仲間の血ですよ。ばっはは、胸をぶすつと、一突きしましてね。その返り血が突いたんです」
「ふん、ホラをこくな。お前ごときが俺らの仲間を殺した？一体どうやってだよ」

「こつやってですよ」

いきなり若い男の同僚、彼の胸から真つ赤な手が飛び出た。胸を突き破り、こちら側へその鋭い爪を覗かせている。

「なっ——！？」

崩れ落ちる同僚を男が驚愕の目で見てみると、暗闇の中から一人の人間が現われた。

長い、強めの癖毛に、鷲のように鋭い双眼。熟練の兵士を思わせる四十代ほどの男だた。

「と、東郷……！」

若い男は恐怖に引きつった顔でその男、東郷大儀とうけいだいぎを見つめると、一步後ろに退いた。

「安らかに眠れ」

東郷は胸の前で十字を切ると、静かに、それでいて一切の無駄もなく、己のその赤い腕を突き出し、若い男の胸を穿うがつた。

「あ、あがあああつ——……！」

悲鳴を上げることすら出来ない。黒い服を着ていた若い男は、そのまま静かに血を撒き散らし、

横に流れる水の中へと落ちていった。

「あゝあ、だから後ろを向けと言つたのに」

達磨男は笑顔でその水路を見下す。

「タヌキ……アジトは壊滅した。ここはもう駄目だ」

東郷は残念そうに下を向きながら達磨男に呼びかけた。

タヌキと呼ばれた達磨男は、その言葉を聞いたことで先ほどまでの笑顔を消し去った。

「東郷さん。何故……ここが、俺たちの計画がバレたんでしょうか」

「さあな。裏切り者がいたか、スパイがいたか、事実は分からんが

……だが、今考えるべきことはそんなことじゃない」

「というところ？」

「こいつらだ」

東郷は先ほど自分で殺した黒服の男を、足で蹴った。

「何故黒服が——ナグルファルがディエス・イレを襲撃する？ こいつらの立場やシステムからすれば、絶対に俺たちにこんな真似は出来ないはずだ」

「確かに。一人や二人ならイミユニティーに雇われたとも考えられますが、明らかに二十人以上は来ていましたからね。しかも、草壁くさかべ国広くにひろが指揮をしていたようです」

「どうやら黒服はとうとう『裏』を表し出したようだ。まあ、奴らの設立状況を考えれば、この結果も当然考えることが出来た。だが、まさかイミユニティーへの総攻撃を実行する直前で仕掛けられるとは……」

「仕方がありません。——本部は壊滅してしまいましたが、まだ同士たちは各地に散らばっています。紀行園で完成させた例の生物兵器もありますし、イミユニティーにはきっちりこのツケを払って貰いましょう」

「……そうだな。六角の居場所は掴んでいる。俺たちの怒りを買ったことを、死ぬまで後悔させてやる」

東郷は紅の拳を握り締めそう呟くと、腕を人間の形状へと戻し、下に置いていたスーツケースを持ち上げた。

「この、子鬼たちを使って——」

夜明けの始まり。

暗い水色の空に浮かぶ白い月の下。

見慣れた場所の、見慣れた屋上。

そこにとある光景が見えた。

巨大な魔王のような真つ赤な怪物と、漆黒の衣を纏った精悍な青年。

青年は赤い怪物の攻撃を巧みにかわし、惚れ惚れするような美しい動きでその怪物を殺そうと動いた。

だが次の瞬間。

怪物の手が青年の胸を貫き、屋上中に無数の血の雨を降らせる。

青年は地の上に倒れ込むと、目から涙を流し、空高く輝いている朝月を、白い星を見つめた。

その緩やかな癖毛の下にある、黒真珠のような真つ黒な瞳で。

「はっ！」

デスクの上で目が覚めた。

どうやら自分はまた寝てしまっていたらしい。

しかも、随分と目覚めの悪い夢を見てしまったものだ。

男はそう思いながらも、スーツを正し椅子から立ち上がった。

その動きに合わせるかのように「トントン」と扉が叩かれる。

男は広い自分のオフィスを突き進むと、禿げに禿げた頭を掻き、若干盛り上がった腹を撫で、用心深そうに小さく扉を開けた。

「あ、あの……会議のお時間ですが」

すると扉の向こう側に立っていた秘書の女性が、恐々とした様子で声をかけてきた。

「あ、ああ。悪いね。ちょっと寝てしまつて……今行くよ」

男は微笑み秘書に謝ると、急いで先ほどまで頭を伏せていたデスクへと戻り書類を掴み取った。

そしてそのままおたおたとした足取りで扉まで移動する。

男が扉から出るのを確認すると、秘書は誇りを持った声で呼びかけた。

「それでは、参りましょう。六角行成様^{ろっかくしんせい}」

「ああ、行こうか」

六角は笑顔で応じた。

廊下を歩く間の会話繋ぎの意味か、しばらく進んだ後に女性は質問をした。

「最近よくお休みになられることが多いようですが……どのような夢をいらつしやるのですか？」

「ん？ ああ、いつも同じさ。僕の望みと、希望、そして——」

六角はニヤリと口元を歪めながら秘書を振り返る。

「『感覚』による正夢^{まどうめ}さ」

ディエス・イレ壊滅から二日後。

日本最大級の屋内都市「常世国」（じょうよこく）。

現在ここは曇り空の下、土砂降りのような雨に襲われていた。

駐車場には無数の水溜りが形成され、停車してある車はそのどれもがずぶ濡れとなっている。

バイクを止め、その池溜まりの中に足を下ろしながら、巳名截（しみなせつ）は強い意志の籠った目を正面に建つ建物に向けた。

常世国。

屋内都市と言えば聞こえはいいが、その実態は巨大な繁華街。いや、ホテルを含んだショッピングモールと言った方が正しい。

外から見ればただの長方形の建物だが、中に入れば縦横に広がる無数の店や施設を目にする事が出来る。

長野県北部にあるこの巨大な人工街は、少し前まで静岡の水憐島、紀行園と並び、一大観光名所となっていた。

だが、今は日本一の娯楽施設と言っても過言ではなくなっている。それは六ヶ月前に水憐島、紀行園の両施設で大規模な災害が発生したからだ。

紀行園はテロによる細菌兵器の影響で完全封鎖され、水憐島とはいえば、中に爆発物が仕掛けられていたのか跡形もなく吹き飛んでしまった。

元々第三の都心とも名高いこの街、「浄泉橋」（せんよきょう）に建てられたというところもあり、娯楽を求める多くの人間はここを訪れるようになっていた。

截は黒いレインコートのフードを被り直すと、雨を避けるように真っ直ぐに常世国の正面入口へと進んだ。

中へ入ろうとする人々の列に紛れ、一般客を装う。

入口の左右に立っている二人の警備員を眺めながら、截は二日前、初めてディエス・イレの壊滅を知ったときのことを思い出した。

「ディエス・イレが壊滅した!？」

黒服第五支部船内の休憩室。そこに設置された椅子に座りながら、截は思わず聞き返した。

「ああ、本当だよ。さっき私も陽介さんから聞いた。つい、数時間前の出来事らしい」

長い黒髪を肩に垂らし、整った綺麗な顔をこちらに向け、透き通るような声でその女性は答える。黒服内での截の相棒、各務翠だ。

「イミユニティーか？ どうやってディエス・イレの本部を見つけ たんだ。黒服でも調べる事が出来なかった場所なのに……」

黒服はディエス・イレから直接の依頼を請け負う事が度々ある。

そのことから政府の極秘機関であるイミユニティーよりは、遥かにディエス・イレの情報を得やすいはずだ。截は何故ディエス・イレの本部が襲撃されたのか、訝しんだ。

「さあな、私も知らないよ。そんなに詳しく聞いたわけじゃないから」

「——陽介さんに聞いてくる」

截は目の前のテーブルに手を付き、椅子から立ち上がると、そのまま歩き出そうとした。

「あ、截！ 陽介さんならもう居ないぞ。さっきキツネに連れられて外に出た」

「はあ？ 何で陽介さんがキツネと……」

「知らないよ。何か最近しょっちゅう二人でつるんでいるみたいだぞ。かなり意外な組み合わせだけだな」

翠はおどけるように手を左右に開いた。

「あ、それと……もうひとつ聞いたんだけど……」
そのまま、躊躇いがちに話を続ける。

「何だよ？」

「まあ、そういう目撃情報があるってだけなんだけど……」

「翠、早く言えって」

何だか言葉を渋る翠を、截は急かした。

「……デイエス・イレの生き残りが、襲撃者は黒服だと証言しているらしいんだ」

「黒服が！？」

続けざまに知らされる衝撃的な言葉に、截は耳を疑った。

「そんなまさか……！ デイエス・イレを壊滅させるほどの戦力となるとかなりの人数がいるはずだ。そんな知らせ、何も受けてないぞ」

「だから未確認情報だって言ってるだろ。陽介さんも詳しくは知らなかったようだし」

「もし黒服が本当に襲撃の犯人なら、白居はイミュニティーと手を組んだってことになる。事実なら、日本国内の組織勢力図が大きく変わるぞ」

「ああ、間違いなく、大変革が起きるだろうな」

翠は眉を潜めた。

「……高橋博士から貰った超感覚者のデータや情報だと、イミュニティーの代表、六角行成は常世国にいる。こんな大事件が起きたんだ。キツネも居ないし、今なら会員個人個人の動きなんかにいちいち構ってる暇はないな……」

六ヶ月前の紀行園テロ事件から現在まで、截はずっと高橋博士から手に入れた情報の裏づけと、調査を行っていた。それらの仕事がよくやく終わり、そろそろ行動に移ろうかというところで、まさかタイミングよくこんな事件が起きるとは夢にも思っていなかった。それぞれの組織があたふたしている今なら、上手く立ち回れば自分

の目的である黒服、イミュニティーの解体に繋がる有力な情報を集めることが出来るはずだと、考えが過ぎる。

「まさか、常世国に行く気か？」

「黒服がイミュニティーと手を組んだのなら、常世国にいる六角行成にも当然何らかの形で接触をしているはずだ。それを確かめる意味でも、行く価値はある」

「だけどさ、ディエス・イレの残党だって六角の命を狙ってそこに行く危険があるんだ。黒服会員であるお前の侵入を向こうが黙ってるわけ無いだろ？ 絶対にディエス・イレに雇われたと思うって。」

「私たち一般会員にはディエス・イレの襲撃が伏せられているんだから」

「ああ、そうだな。……だから、俺は黒服としてではなく、已名截として行く。俺の顔を六角が知っているはずもないし、一般客に紛れれば上手くいくはずだ」

「でもな……」

截の言い分は理解できる。しかし、一歩間違えば黒服、イミュニティー、ディエス・イレそれぞれから命を狙われかねない危険な状況に身を置く事になる。それを理解しているからか、翠は彼に賛同することが出来なかった。普段冷静極まりない截が妙に興奮していることも、理由に含まれているにはいたが……。

「翠、今回はお前は外から協力してくれ。黒服内部での動きも気になるし、二人同時に潜入してもあまり意味はないからな。出来るだけ多くの情報を得れる状態の方がいい」

「それはいいけど……安形はどうする？ お前の姿がないことなんて、すぐに分かるぞ」

截は自分の行動の危険さからか、高橋志郎から得た情報の調査も、黒服やイミュニティーに対する詮索活動も、まったく安形には知らせていなかった。万が一自分が失敗すれば芋ずる式に安形まで被害をこうむると思っていたからだ。

「安形さんには俺が死ぬか、黒服やイミュニティーに対する反撃を

実行する時まで情報を伏せておくんだ。今回のことも俺が休暇を取ったことにしてくれ」

「あんまり長く誤魔化せるとは思えないぞ？」

「大丈夫だつて。そんなに時間はかけないよ。三日以内にはここに戻るさ」

あまりに翠が心配そうに言うので、截は軽く微笑んで彼女を見た。
「必ず……帰って来いよ」

「——ああ、勿論だ」

安心させるように、截は翠の細い肩へと手を置く。

「行ってくる」

それが、最後の会話だった。

列を進み、截は入口の前へと辿り着いた。

通常のショッピングモールとは違い、ここでは全ての警備をイミユニティーの者が行っている。

そのため裏の世界に順ずる者が現われたのならば彼らはすぐに見抜き、対処することが出来る。

当然截を目にした警備員も彼の持つ黒服の空気を感じ取った。まじまじと、その姿を分析する。

緩いカーブを描いた漆黒のショートヘアー。

ちよつとだけ太めの凛々しい眉。

睫の長い、黒真珠のような大きな目。
まつげ

端正な顔立ちの、一見すると何処にでもいる普通の青年だ。

警備員は截が纏っている真っ黒なレインコートに視線を移した。

「ちょっと、コートの前を開けてもらってもいいですか？」

笑顔を作りながら片手をこっそりと腰の警棒に当て、そう聞く。

截はレインコートのフードを被ったまま、ゆっくりと前を開いた。そこにあるものは、ただの灰色のワイシャツと、黒いズボンだけだった。武器や怪しいものは一切見られない。

「もういいですか？」

中々警備員の疑いの目が離れないので截はうざったそうにそう尋ねた。

通常、ここまでの確認は行わない。空港や国会でもないため、それ以上截を引き止めることは不可能だと思い、警備員は道を開けた。「どうぞ、お楽しみ下さい」

「ありがとう」

截は無表情でそういうと静かに常世国の扉を通り抜けた。

その姿を眺めながら、截を調べた方とは別の警備員が向かいに立っている男に顔を寄せる。

「今の男がどうかしたのか？」

「いや、一瞬^{たまたま}佇まいがただの人間には見えなかったから……でも、気のせいだったな」

そう言々と警備員の男は客の列へと視線を移した。新たな怪しい人間を探して。

扉を通り抜けた截はきよろきよろと周囲を見ると、手提げ鞆を持った一人の女性を見つけ、自然に見えるように背後からぶつかつた。「失礼」

申し訳なさそうに謝りつつ、こっそりと彼女の鞆から列に隠しに隠していた己の二本のナイフを抜き取る。そして怪訝そうな表情をしている彼女を残し、さっさと奥へと進んでいった。

入口を入ってすぐの場所はUの字の形をした大ホールとなっており、一階とそれを見渡せる吹き抜けになった二階とに分かれていた。東京お台場にあるビックサイトの構造とよく似た形だ。

二階の壁際に並ぶ無数の服屋や宝石店、御土産屋の前には多くの客が歩き回り、幸せそうにショッピングを楽しんでいる。

そんな状況の中、いやに物静かな二人組みの女性が、丁度入口と平行して作られた橋を渡りUの字の吹き抜けを横切るように、端から端へと移動した。

「ふう、やっぱり混んでるね……どう、何か買いたいものあった？」

ポニーテイルにした薄い茶色の髪を手で弄りながら、活発そうな女性が隣を歩く人物に声をかける。声をかけられた黒髪の女性は頷くと、携帯を開き、何やらそこに数行の文字を打ち込んだ。数秒後、活発そうな茶髪の女性の懐から着信音になる。

茶髪の女性は携帯を開くと、それが当然であるかのように黒髪の女性が送ったメールを読んだ。

「なにになに……薄いピンクのキャミソールが可愛かった？ ああ、あれね！ 確かにあれはレアなデザインだったよね、後で買いに行く？」

再び女性の携帯が鳴る。

「え？ 別にいいよ。それに、千秋さんだなんて、よそよそしい呼び方はしないで。私と亜紀ちゃんの仲じゃない」

茶髪の女性、千秋は微笑を浮かべると、隣にいる黒髪の女性の頭を撫でた。

亜紀と呼ばれた黒髪の女性は人前でそんなことをされたことが恥ずかしかったのか、頬を赤く染めながら、じとーっと千秋を睨む。

「ごめんごめん、そんなに睨まないでよ。ちょっとふざけただけで

しょ」

千秋は亜紀の頭から手を下に移動させると、恋人同士のように彼女と腕を組んだ。

「しかし、流石に広いわね……まだ中に入ってすぐの場所なのに、二時間近くうろつろつしてても全部回りきれてないわ。本気で全ての店を見ようと思ったら間違いないわ、三日はかかるわね」

その言葉に、亜紀もこくりと頷く。

口を全く開かず、このようにジャスチャーかメールでの会話しかない彼女に、千秋は優しい目を向けた。

「ごめんね、亜紀ちゃん。私、まだ手話を完全に覚え切れてないから……亜紀ちゃんにこんな面倒な会話法をとらせちゃって。ちよつと疲れちゃったでしょ」

亜紀は首を左右に振る。

「無理しなくてもいいのよ。休みたくなったらちゃんと行ってね。

私はあなたを守るために居るんだから。遠慮はしないで」

亜紀の首振りが子供っぽくて可愛かったのか、千秋は少し笑いながらそう言った。

「ねえ、夏。あの子……超可愛くない？」

肩まで伸びた黒髪。薄い化粧にも関わらず、整った顔。くりりとした大きな目。

そんな亜紀の外見を指差し、一人の女子高生が目を見開いた。学校の帰りにこの常世国に来たのか、服装は制服のままで。呼びかけられた夏という女性も、それは同様だった。

「えゝまあ、確かにいけてる方だけどね。私には勝てないな」

夏はふざけてるのか、本気なのか、自信たっぷりに答えた。

「でた、夏の自信過剰。確かに夏も美人だけどさ、あの子は異常だつて。何か、^{はかな}儚い花みたいなオーラが出てるもん。夏はどっちかと言えど、一年中咲いてるドライアイスみたいだからね」

「はあ？ どういう意味よ！」

自分の外見がけなされるのが嫌なのか、夏はその女性を睨み付けた。

「ぶっ、冗談だつて。はあ、ホント夏はからかいがあるあるわ」
「もう出口よ。あんた……これから彼氏とデートだつて言ってたじゃん。さつさと行けば？」

「あれ、夏はまだここに残るの？ もう十九時だよ」
立ち止まった夏を女性は不思議そうに振り返る。

「私のはあんたと違って大人の時間を楽しみたいの。ここは二十四時間開いているから、これからが本番なのよ」

「制服で？ 目立つよ」

「いいから早く行け」

夏は女性の背中に手を当てると、一階へと続いているエスカレータの前に押し出した。

「もう、夏は怒りっぱいんだから……はいはい、じゃあ、また明日日学校でね！」

邪険に扱われたにも関わらず、女性は明るい表情で手を振る。夏もぶすつとした顔でそれに答えると、すぐに背を向け、歩き出した。

六角行成は悠々と茶を飲みながら、部下たちの報告を聞いていた。「——とうわけで、フォルセティは確かに対象の傷を治癒することが出来るものの、同時にイグマ細胞を注入するという欠陥が生じてしまいました」

分厚いファイルを読み終わり、三十代ほどの若い男が六角を見上げた。

「そうか。ご苦労、唐沢くん。^{からさわ}引き続き研究を続けてくれ。君の研究はイミューニティーの宝だからね。今の報告内容なら、まだ資金提供を続ける価値はある」

「あ、ありがとうございます」

六角に褒められた唐沢は、深々と頭を下げながら礼を言った。

「さて、これで会議は終わりにしよう。他に何かあるかな？」

「あ、六角代表……」

円卓の丁度斜め右に座っていた女性が手をあげた。六角は「どうぞ」とばかりに右手を裏返す。

「これは……今回の会議内容とは関係ないのですが、先ほど地下水路から妙な『振動』を感知したとの報告があつたので、一応お知らせしておきます」

「妙な振動？　どのようなものかね」

「警備班が感知システムで調べて見たところ、何やら巨大な物体が今は使用されていない、古い水路の中にあることが分かりました。

現在、調査隊を送っています」

「それは、最近までは無かつたものなのか？」

「はい。あの水路は衛生面の関係上、定期的に見回ることとなっており、つい先日にも警備の者が確認をしました。そのときはそんな巨大なものなど見えなかつたとのことですよ」

「……ふむ。二日前にディエス・イレが壊滅したばかりだしな。用心することに越した事は無い。分かった、引き続き調査を続けたまえ。何か分かつたら教えてくれ」

神妙な顔で頷くと、六角は立ち上がった。

「さて、諸君。会議はこれで終わりにする。僕はこれから少し用事があるので常世国を離れるが、あとは任せた」

「どちらに行かれるのですか？」

隣に座っていた老年の男性が怪訝そうに聞く。

「何故デイエス・イレが壊滅したのか全く情報が入ってこないからね。白居にその調査を直接依頼しようと思ったんだ」

「黒服に？ 大丈夫なんですか」

「心配しなくてもいいよ。優秀な部下を連れて行くから。それに、僕と白居が会うのはこれが初めてじゃないだろ。向こうも大切な顧客に害を与えるわけが無いさ。大丈夫だよ」

六角は自然そうな笑顔でそう言っていると、男に背を向け歩き出した。すぐに秘書がその横に付く。

「ヘリの準備はどうか？」

「はい、既に離陸可能です。今すぐに向いますか？」

「いや、また資料を部屋に忘れてしまったね。ちょっと取ってくるよ。パイロットには悪いが、少しだけ待たせてくれ」

「かしこまりました」

淡々とした様子で秘書の女性はお辞儀した。

常世国に入ってから一時間。截はホールの一階。U字形通路の底の部分を歩いていた。

レインコートのフードは後ろに下ろし、その黒髪を電灯の下へと晒している。

元々はセミシュートに伸ばしていた髪も、今は僅かでも自分の外

見を変えるためにショートヘアに切っていた。

——イミユニティーの人間に怪しまれた場合に備えて、黒服も、対衝撃チョッキも着てこれなかった。もしここで戦闘になれば不利だな。なるべく目立たないように行動しないと。

唯一の装備である黒柄ナイフと白柄ナイフを服の上から撫で、截は慎重に周囲を見渡した。

非常階段。

警備員。

客。

それぞれの動きをこっそりと探る。

先ほど確認したところ、ホテル区域からの侵入は難しいと分かった。宿泊関係の職員は客の顔を覚えることに慣れているし、見ていないようで意外と客の行動を観察している。截はバレずに内部に侵入するのならこのホールからしかないと思っていた。

「問題は……監視カメラか」

流石に六角行成が潜んでいる場所だけはある。ホールのあちらこちらに無数のカメラが設置され、死角となりそうなものは見られなかった。

ここにきてやっと、截は自分が焦っていたことを理解した。

常世国の内部状態の確認も、人員配置も、内部の協力者もなしにいきなり侵入し、データ^{データ}を盗めるわけなど無い。

自分らしくない、あまりに無謀な行動に、思わず苦笑いした。

「ちよつと、逸^{はや}りすぎたな」

キツネならばこんな真似は絶対にしない。潜入するならもっと用意を踏んで、慎重に、巧みに行うはずだ。

デイエス・イレの壊滅。

黒服とイミユニティーの協力の疑い。

そのショックが、事実が、自分を暴走させていたことを知る。

截は感情的になりすぎていたことを理解し、一度翠の下へ戻るか考えた。

——この一時間で色々見たけど、怪しいものは何も無いし……黒服らしき人間が出入りするかどうかの調査、今回はそんなもんでいいか。

頭を掻きながら、入口の方へと向き直ろうとする。

だが、何かの気配を感じ、踏みとどまった。

——何だ……今一瞬、どこかで……？

ごく最近感じたことのあるような、恐ろしい脅威の感覚が頭の中に走る。

振り返ると、一階の奥——丁度今いる位置から真っ直ぐに進んだ場所。そこに、こちらを見る一人の男が居た。

長い強めの癖毛に、鷲のような鋭い目つき。全身を隠すような、大きな茶色いコート。

截は黒服内で見た資料の写真を思い出し、無意識のうちに呟いた。

「東郷……大儀……？」

「お、唐沢。会議は終わったのか？」

更衣室から外に出ようとしたところで、唐沢は白衣の男に呼び止められた。

「何だ住岡か。どうしたんだ？」

「お前、今日はもうあがりだろ？　一緒に上で飲まないか」

「別にいいが……お前は夜勤だろ。大丈夫なのか？」

唐沢は怪しむような目で、声をかけてきた住岡を見た。

「いや、例のあれが不調をきたして昼に呼ばれてたんだ。ぶっつけで十二時間近く働いてな。今日はもう帰っていいんだと」

「それは……災難だったな。原因は何だったんだ？」

「詳しくは検査の結果がでるまで分からないが、どうやらただ興奮状態になっていただけらしい。何かに反応して、警戒してるんだと」

「警戒？ 一体何に――」

「副主任は下の『ブラック・ドメイン』にいる『あいつ』のことを感じ取ったんだろうとか言ってたが、お前はと思う？ 主任としての意見はどうだ？」

住岡が意見を求めてきたため、唐沢は考え込んだ。右手の親指を自分の顎に当てる。

「――……あ、悪い。お前もこれから帰るところだったんだろ？」

仕事の話は止めよう」

今始めて唐沢の私服姿に気づいたのか、申し訳なさそうに住岡は謝った。

「そうだな。今日は……ちょっと疲れた」

「一日中会議してたようなもんだからな。俺よりお前の方が災難だったんじゃないか？ まさか、主任になってばかりでそんな会議に引っ張り出されるとは思ってもいなかっただろ」

「仕様がないうさ。俺ほどあれのことをよく知っている人間はいない。六角代表の気持ちも分かる」

盛大な溜息を吐く唐沢。

「上に新しくいい店が出来たんだ。今から連れて行ってやるよ。可愛い子がいっぱい居るぜ」

今日はもう帰りたいという唐沢を強引に引きとめ、住岡は自分の着替えを素早く終えると、その腕を引き、スキップをしそうな足取りで歩き出した。階段を昇り、一階へと進む。

「おいおい、そんなに楽しみなのか？」

あまりに住岡のテンションが高いので、若干引き気味に唐沢は尋ねる。

「当たり前だろ。実はな……その新しく出来たところで、サービスが凄いいんだ」

「サービス？」

「つまり……」

にやけながら住岡は説明する。今向っている場所がどういったものなのか理解した唐沢は、思わず呆れたように頭を抱えた。

「勘弁してくれ。俺がそういう場所苦手だって知っているだろ」

「たまにはいいじゃねえか。独身なんだし、照れんなよ」

いつのまにか結構な距離を進んでいたらしい。住岡が階段の上にある非常階段の扉を開けると、一般客が多数いる場所に出た。

「あれ、今日はパーティーか、いつもはここ使っていないのに……」

大食堂、会食場ともいえるこの場所は普段は滅多に利用されない多くの客はホールの飲食店で満足するし、職員たちが催し物を行う際も、ここではなくホールから真っ直ぐに進んだ場所にある「憩いの広場」を使用する。住岡は何故この場所が利用されているのか不思議がった。

唐沢は眉が薄く、髪もボサボサ頭と非常に特徴的な外見をしている。そのため人の印象に残り易く、会場にいた警備員もすぐに彼に気がついた。

「唐沢さん、お帰りですか？」

二人に駆け寄り、そう聞く。

「いや、その前にちよつと飲みに行こうと思ってね。ここは今何に使っているんだ？」

「——ああ、食べ放題です。営業部が一気に儲けを稼ごうと企画しましたね。ちょうどいい場所がここしかなかったんですよ」

「食べ放題か。最近はこの店も繁盛しているのに、営業部もがめついな」

立食式に飲食を楽しんでいる人々を見渡し、住岡が呟く。

「行こう」

自分たちのくたびれたスーツ姿はこの場には不釣り合いだ。唐沢は警備員に挨拶をすると、すぐにその場を離れることにした。

にやりと、東郷大儀は笑った。

截から視線を逸らすと、何かを確認するように周りを見渡す。

二階の客。

店の職員。

警備員。

東郷の視線を追う間に、截はそれらの人々の中に彼だけを見つめる男たちの姿を見つけた。

明らかに一般人とは違う雰囲気を持っている。

直感的に、悟る。

危険だと。

不味い事になると。

自分のよく知っている何か。

死と、生と、混乱の入り混じった世界。

地獄が、尋ねてくる。

彼らと頷き合い意思疎通を終えると、東郷は右腕を高く上げた。その意図を、截は理解する。

「東郷ー！」

——やめろ！

截がそう言おうとした瞬間。東郷は勢い良く腕を振り下ろした。

亜紀は一階を見つめる奇妙な男を見つけた。

二階の通路の端、手すりの前で、何かを探すように忙しく首を動かしている。

男の体軀はかなり良く、何かの訓練を受けているであろうことが見て取れた。

現在亜紀は二階の出店式カフェテリアで休んでいたのだが、その男を見たことで急に不安な気持ちが溢れ出し、とてもじゃないがリラックスすることは出来なかった。

「どうしたの？」

手に持ったコーヒーを丸いテーブルの上に置くと、千秋は亜紀の視線の先に目を合わせた。

このみやちあき
日野宮千秋。二十六歳のイミュニティメンバー。

三年前の富士事件のショックで声を失った亜紀は、他の人間よりも意思疎通に時間がかかるという理由で、戦闘員にも、事務員にも採用されなかった。

そうなると彼女の行く末は実験材料か、削除対象になるしかない。それを理解した友は、彼女を自分の恋人だと偽ることで「人質」としての保護を行っていた。

イミュニティは友を配下に留めるために亜紀を生かしておく必要がある、彼女の身を守る羽目になったのだ。

千秋はその護衛だった。

実戦経験の無い若手の隊員や、上手く仕事をこなせなかった者にはこうして保護任務が当てがわれることが多々ある。六ヶ月前の水憐島事件で大した結果も出せず、魚人に深い怪我を負わされた千秋は、退院後、リハビリの意味も込めてこうして亜紀の護衛に付かされていた。

もっとも本人は特にそれを嫌だとも思わずに、亜紀を妹のように

思い、楽しんでいたが。

だから当然デイエス・イレについての知識もあり、彼女はすぐに亜紀のしている男が「危険」だと分かった。

「……亜紀ちゃん。もう結構休んだし、そろそろ行こっか。実は、私行きたいところがあるんだ」

この席から男の居る手すりまでは通路を挟んで五メートル以上は距離がある。

男がデイエス・イレの人間だという確証は無かったものの、なるべく離れた方がいいと判断し、千秋はそう言った。

亜紀はちよつとだけ躊躇うような素振りをみせたが、特に反対するような真似もせず、それに従った。

二人して店の外に並んでいる席から立ち、通路へと出る。

そしてそのままそこから遠ざかるうとした直後、それは起きた。

「——デイエス・イレに、幸あれ……！」

手すりの前に居た男が突然注射器のようなものを取り出し、自分の腕に刺したのだ。

一階の東郷を囲むようにして立っていた二階の男たちが、次々に己の体へ注射器を打ち込んでいく。

その光景を見た截は、紀行園の事件を思い出した。

イミュニティーと面々と協力し、赤鬼と戦闘中に遭遇した男。赤鬼から逃げる截たちを食い止めるように、己の腹に注射を打ち、化物となった彼。

腹から突き出た三本の触手。

胸まで開いた大きな口。

あの、おぞましい姿。

——まさか、ここで大口人間を！？

「くそっ——！」

截は東郷を目指して一気に走り出した。

ここで紀行園の再現をさせるわけにはいかない。

また自分の目の前で多くの犠牲者を出させてたまるか。

そう、強く思っ

だが、客の流れが抵抗となり、截は中々東郷に近付くことが出来なかった。数メートル進むにも十秒近くかかってしまう。

東郷は何故か截を知っているように再びこちらを見ると、そのまま背を向け、人ごみの中に姿を消した。

——待て……！

截が彼の居た場所に手を伸ばした瞬間、二階中から絶叫が沸き起こった。

恐怖。

違和感。

混乱。

狂気。

截にとつては聞きなれた、周囲の人々にとつては初めて聞く、地獄のお尋ねを意味するベルだった。

「きやあああああつ！？」

素早く、腰のナイフに手を当て上を見る。

大口人間ならばイミユニティーの隊員でも倒せるはずだ。二階にいたデイエス・イレの男は約八人。ここがイミユニティーの拠点ということもあり、すぐに警備員の増援も期待できる。截は最小限の被害で感染を食い止められると考えた。

そして、それは正しかった。

相手が、大口人間だったのならば——

「な、何だ！？」

本屋の前に立っていたサラリーマンは、手すり付近にいた男の不審な動作を目撃し、驚いた。

その男はいきなり自分の胸に注射器を打ち込んだと思ったら、頭を押さえ、激しく体を痙攣させたのだ。

その拳動の怪しさに男の付近に居た人々は皆足を止め、彼を見た。
「——ううう……！」

男は苦しみながら狂ったような笑みを浮かべ、自分を遠巻きに取り巻いている人々を睨みつける。そして己のシャツを引きちぎると、徐々に、徐々に、その姿を変え始めた。

体は赤灰色に染まり、その髪の毛は静電気が流れたかのように逆立つ。

「は、はああ!？」

突然の男の変異が理解出来ず、サラリーマンは鞆を落とし、一歩退いた。

変異を続ける男の姿はますます人間からかけ離れていく。

体中からは網目のように緑色の血管を浮かべ、歯茎は剥き出しになり、目の周囲は陥没したように黒くへこむ。まるで頭蓋骨とその外側が逆転したかのような顔だ。

ぐちゅぐちゅ、ぼきぼきと、奇妙な音を鳴り響かせながら、それは頭だけではなく体にも続いた。

背骨、肋骨が浮き上がり、鎧のように肉の上に浮かび、膝は逆関節に折れ曲がり、手と足からは鋭い爪を伸ばした。

まるで、日本古来から伝わる妖怪、「鬼」のような外見だった。

「ザアアア……！」

波の音のような鳴き声をあげ、その鬼は呆然とこちらを見ているサラリーマンを視界に捉えると、一気に飛びかかった。

「ひ、ひiiiiiiii!？」

サラリーマンは両腕を前に突き出し、無意識のうちに鬼を遠ざけようとしたが、そんなものには毛ほどの意味も無い。あっと言う間に押し倒されたと思ったら、一気に右腕を折られた。

鈍い音が響く。

「うわああああっ!? うああああああ!」

もはや何も考えることは出来ない。サラリーマンは思考を捨て去り、ただ赤子のように泣き叫んだ。

鬼はぶらんと折れたその腕を持ち上げると、ゆっくりと楽しむように自分の口へと運んでいった。

取り巻きの中数人の子供や、気の弱い大人がそれを見て気絶する意識を保っている者も、時間を止められたかのように呆然と立ち尽くし、ただその光景を見た。

まだ生きているというにも関わらず自分の腕が食われている。男は白目をむいて絶叫を上げ続けた。

そして――……十秒ほど時間が経った頃だろうか。

突然、その鬼は男の体を弄るのを止めた。

まったく興味なさそうに、床の上に放り投げる。

鬼の視線が奥の方へと向く。呆然とした表情でこの惨状を見ていた人々の方を。

その動きで取り巻きの人々はようやく我を取り戻し、一目散に逃げ出した。

押し合い、押し合い、引っかき、殴る。

大人、子供、男、女、誰もが関係なく、ただ恐怖から、目の前の存在から逃げたく喚く。

鬼は彼らを見ると、血の滴る顔を歪め、再び鳴いた。

「ザアアアアアアアアア!」

声と同時に、先ほどのサラリーマンが起き上がる。その顔は、外見は、もはや若い男などではなく、隣で雄叫びを上げている鬼と全く同じものになっていた。

「何だあの赤い奴は……!」

阿鼻叫喚となった二階を眺めながら、截はすぐにここから離れようと思った。

大口人間が相手ならイミューニティーに捕まる前に殺す自信があっ

たが、出現したのは「悪魔」を強化したような化物だ。感覚から理解するにあれを倒すには一筋縄ではいかない。

自分の目的は黒服とイミューニティーの繋がりに関する調査。こんな東郷のテロなど、予定外因子も甚だしい。ここにはイミューニティーの隊員も多くいるはず。態々（わざわざ）正体を晒（さら）してまで介入する必要はない。そう、考えた。

「亜紀ちゃん——！」

真上から響いた、その名を聞くまでは——

<第二章>再会

男が注射器を打ち込むなりに、千秋は亜紀の手を引き、駆け出した。

いきなり引つ張られたにも関わらず亜紀は素直に彼女に従って走る。

本能的に理解したからだ。

危険だと。

あの男に近づくべきではないと。

富山樹海で受けた精神的な傷の影響か、亜紀の感覚は事件前よりも遥かに優れたものとなっている。あの男の気配が三年前に見た「悪魔」のものに近いことを、何となく察知していた。

「そんな、前にも……！」

出口を一目散に目指していた千秋は、一階へと続くエスカレーターの前に先ほどと同じような空気を纏った人間を発見し、顔を曇らせた。

しかもその男は体を変形させ始め、化物へとかなり近い姿になっていた。

——何、あの赤い奴……見たことない！？

悪魔、怪女、大口人間、魚人、狂人……千秋は大量感染の危険がある生物の情報は全て事前に学習していたが、目の前の生物の外見はそのどれもと違っていたため、警戒心を強めた。

「亜紀ちゃん、こつち！」

慌てて体を反転させ、別のエスカレーターを探す。

今の自分は何の武器も持っていない。しかも亜紀という保護対象を抱えているのだ。到底あの鬼には勝てないと判断し、千秋は逃げることを選んだ。

こちら側の二階は鬼に挟まれたような形になってしまったため、向かい側の二階へとH字型通路の上を急ぐ。背後から他の人間に押されようとも、突かれようとも、千秋は決して亜紀の手を離さなかった。

感染者は亜紀のトラウマそのものだ。彼女が自分を見失うことは死刑宣告にも等しい。そう理解していたから。

だが、亜紀は他の一般客と比べるとかなりの冷静さを保っていた。彼女が声を失った原因には悪魔に対する恐怖も勿論あったが、一番の理由は目の前で自分の仲間を殺されたからだ。いうなれば、截安形、友が抱えている心の闇と全く同じものを彼女も抱えていた。戦う能力のある彼らとは違い、亜紀はただ逃げる事しか出来ない。無様に叫ぶことしか出来ない。その悔しさが、無力感が、三年前に悟という仲間を見殺しにした責もあり、彼女に無意識のうちに己の声を封じさせたのだ。

——あつ……！

反対側に橋を渡りきった所で、亜紀は今にも鬼に襲われそうな少年を見つけた。

危険だと分かっているのか、それとも恐怖で足が竦んだのか、口を開いたまま感染者と化した男の顔を見上げている。

「亜紀ちゃん——！」

いきなり亜紀が腕を振り切り、出入口とは全く別の方向へと走り出したため、思わず千秋は大声を出した。

亜紀は一応、友の伝手^{つて}を使って護身術や感染者に関する十分な知識を持っている。しかし、立場が保護対象ということが災いし、まともな戦闘訓練は一切受けていない。あの鬼のような感染者と対峙すれば亜紀がすぐに殺されることは目に見えていた。

既に大分感染が進行したらしき鬼は、目の前にちよこんと立っている小学生低学年くらいの少年を視界に納めると、己の本能のままに腕を伸ばした。

ようやく少年も回避行動に移ったが、鬼の速度の方が圧倒的に速

い。すぐに首を掴まれ一メートル近く持ち上げられた。

「あつ…… ああああ……！」

痛みと、恐怖からか、少年はパニックに陥り、涙を流した。どれだけ頑張つて鬼の手を解こうとしても、力の差は歴然でその指はピクリとも動かない。

血管が縦横無尽に走っている鬼の顔が近付き、鼻に鉄のような、腐ったみかんのような臭いが届く。

少年の意識が飛びかけたとき、鬼の腰に強烈な力で何かが当たった。

鬼と、少年と、その腰に当たった何かは、同時に床の上に倒れ込む。少年が顔を上げると、目のくらむくらい綺麗な女性がそこに倒れていた。そう、亜紀だ。

鬼にドロップキックをかました亜紀は、自分を見つめる少年に早く逃げるようにと手振り以示す。その動きに気づいたのか、少年は服の袖で涙を拭き、慌てたように出口を目指して駆けて行った。

ほっと一安心したのもつかの間、亜紀は前の方に倒れている鬼が動いたのを感じ、素早く立ち上がり、逃げようとした。

しかし、それよりも早く鬼は跳躍し、亜紀を叩きつけるように押し倒す。

声が出ない亜紀は顔だけを歪め、痛みに耐える。

「ザアアアアア——！」

鬼は獲物を拘束したことで嬉しそうに大きな声で鳴いた。

——「十秒感染」。

その言葉が、亜紀の頭に過ぎる。

一刻も早くこの化物の下から離れなければ、自分は人間ではなくなってしまう。かつて見たことのあるその感染状況を思い出し、ぞっと身震いする。

「亜紀ちゃん！」

やっと千秋が追いついた。鬼は額に汗を浮かべ自分を睨んでいる千秋を見ると、興味がなさそうに亜紀に目を移し、その口を亜紀の

喉へと近づけていく。

もがく亜紀を強引に押さえつけ、その柔らかい白い肌に赤い筋を刻み、鬼は己の欲を満たそうとした。

もう一刻の猶予も無い。千秋は目に付いた飲食店の看板を両手で持ち上げると、それを全力で鬼の頭へと叩き落とす。

看板は風を切り鬼の後頭部へと接近した瞬間、赤灰色の腕によって防がれた。

「え、ガードした!？」

知能の低い感染者は、攻撃を避けることはあってもガードなどは絶対にすることがない。

自分の知識に反する目の前の異常な生き物に、ただ千秋は呆然とした目を向けることしか出来なかった。

——や、ヤバイ……!

もう時間が無い。鬼を自分の力で退かすことが出来ないと判断した亜紀は、千秋だけでも逃げるようにと手を前に振った。このまま自分が感染したら、いくら千秋でも逃げ切れない。そう思ったから「亜紀ちゃん……!!」

千秋も亜紀の意図を悟る。自分の實力ではこの鬼に勝てないことは分かっているし、亜紀の拘束も解けない以上、一番ベストな選択は逃走だ。鬼は別の獲物である自分が目の前に居るにも関わらず、決して亜紀の上から退こうとはしない。そのことから千秋はこの感染体が非常に賢いことを理解した。

「ごめん……亜紀ちゃん」

悔しそうに、千秋は拳を握りしめる。

自分が気分転換にとこんな場所に連れてこなければ、亜紀がこんな目に合うことは無かった。

「頼んだ」と友に言われたはずなのに、守ると誓ったのに、感染者をその場から動かすことすら出来ない。

あまりの無力さに涙が浮かぶ。

だが、それでも千秋は逃げようとはしなかった。もう間に合うわ

けがないと、再び防がれると分かっているのに、それでも看板を持ち上げる。

それは維持か、プライドか。

自分の身が危険になることにも構わず、千秋は看板を振り下ろした。

——早く逃げて……！

吹き飛ぶ看板を見ながら、亜紀は千秋の身を案じ、心の中で叫んだ。

亜紀が鬼に押し倒されてから六秒が経過した頃。

その黒いレインコートを纏った男は、ようやくエスカレーターを上がりきり、二階へと到達した。

数メートル先で争う二人の女性と、一体の赤灰色の怪物を目視し、両手を腰に当て、己の唯一の武器を引き抜く。

禍々しいデザインの刃を持った、黒い柄のナイフ。

シンプルで美しい刃を持った、白い柄のナイフ。

その二本を音も無く構える。

鳥の羽ばたきのように、猫の跳躍のように、自然で無駄の無い動きで。

鬼がその男の姿を見つけたときは、丁度千秋が一度目に看板を振り下ろした直後だった。

男の姿に気を取られた鬼は、看板をもぎ取ることも、弾くことも忘れ、得体の知れない危機を感じ、その男だけに注意を注いだ。

再び千秋が看板を振る。

——邪魔だ。

鬼はそう思った。

お前などに構っている暇はないと、迷惑な障害物だともいうように。

男に視線を合わせたまま、千秋の看板を腕の力で弾き飛ばす。

そして自分の下にいる亜紀と千秋の顔に絶望の色が浮かんだ瞬間、鬼は素早く後方へ飛んだ。

直後に鬼の頭があつた位置の空間が鋭く裂かれ、一陣の風が吹く。それは今鬼が跳躍ちようやくしなければ、首を一薙ぎに斬られていたことを意味した。

——何だこいつは——！？

「感覚」で自分の攻撃が当たらないことは分かっていたが、これほど巧みに、素早くかわされるとは思ってもいなかった。

レインコートのフードから鋭い目の光だけを覗かせ、截は背中に冷たいものを感じる。

この赤灰色の鬼は本能のままに獲物にかぶりつくこともせず、自分を警戒し、その危険度に気がついた。明らかに普通の感染者とは一線を駕している。

まともに戦えばかなりの苦勞を伴うだろうと、截は直感で理解した。

鬼に注意を向けたまま左腕に黒柄ナイフを移し、下に倒れていた女性の腕を取る。そしてその顔をはつきりと見た。

かつて共に樹海内で行動した仲間——吉田亜紀の顔を。

——……見間違いでいて欲しかった——

亜紀の姿を確認し、截は暗い、それでいて嬉しく、悲しい、複雑

な感情を抱いた。

亜紀の位置からはフードの影が邪魔をし、截の顔がよく見えない。自分を助けてくれた人間が截、曲直悟まなせみとくだということにも気づいてはいない。

ただ、どことなく懐かしいような、暖かいような、そんな気持ちを亜紀は感じた。

「早く行くんだ」

なるべく低い声を出しながら、截は亜紀を千秋の方へと押した。イミュニティーにすることも、友の人質となっていることも知っていた。

だが、まさかこんな場所で、こんな事件の最中に再会するとは夢にも思わなかった。

死んでいるはずの自分が目の前に現われれば、彼女に大きなショックを与える。

そう考えた截は敢えて正体を隠し、すぐに亜紀を遠ざけようとした。

亜紀は一瞬口を開いて「ありがとう」と言いかけたが、そこから音が出ないことに気がつき、ぺこりと小さくお辞儀をすると、黙って千秋の横に付いた。

——元氣そうで良かった。

亜紀の拳動を怪訝に思いながらも、その変わらない姿に安堵する。截の中でのイミュニティーの印象はかなり悪く、荒すさんでいる。だからこうして彼女の元気な、健康そうな姿を見ることができてほっとした。

——あのナイフ……黒服——！？

イミュニティーの正規隊員である千秋は、截が握りしめているナイフを見てすぐに彼が黒服の会員であることを見抜いた。

——何故ここに黒服が？

截の存在に、疑問の目を向ける。

彼がディエス・イレ側か、イミュニティー側で自分たちとの関係

は大きく変わる。今助けられたことを考えるとディエス・イレ側は薄いと思ったが、確証は出来ない。

千秋は截の立ち位置がはつきりするまで、自分がイミュニティーの隊員であることは伏せておくことにした。

今自分たちにとって一番大事なことは安全な場所への避難だ。截の指示通り、出入口に向って走り出そうとする。だが、そこで起きている現状を見て落胆の表情を浮かべた。

「ここからじゃ、逃げられないわ……！」

思わずそう呟く。

截がくいつと首をかしげ背後に視線を走らせると、逃げていった大多数の人々が饅頭のようにくっ付き、出入口の前に固まっていた。あれでは出入口まで無事に辿り着けても、外に出る前に鬼に殺されてしまう。

イミュニティーは水憐島事件の反省からか、テロが起きたときはまず最初に職員の安全確保、感染拡大の阻止を行うようにと方針が変わった。截たちがそこを見ていると丁度タイミングを合わせるかのように警報が鳴り響き、入口のガラスに分厚い、どう見ても鋼鉄製のシャッターが降りた。

「な、そんな！ ふざけんじゃねえよ、出せよ、出せえええ！」

「開けて、開けてえ、開けてえー」

集まっていた人々は必死に叫んでシャッターを叩くが、全く効果は無い。その苦労は、ただ自分たちの手を傷つけるだけで終わる。

——閉鎖が早すぎる……！

まだ逃げられる猶予があると思っていた千秋は、さすがに顔を青くした。これでは、鬼が大量に暴れ回る檻の中に放り込まれたエサも同然だ。

「ザアアアア……」

状況を理解でもしたのか、三人の前に立っていた鬼が嬉しそうに声をあげる。

「くそつ、こつちだ……！」

出入口付近の人波に引き付けられ、目の前に居た鬼の後ろに、さらに三体の鬼が現われる。

このままここに居たらやられる。そう思った截は、二人の手を引くと、エスカレーターの方へと走り出した。

——イミユニティーの施設にある店は災害時に備えて全て強化ガラスで出来ている。いくらか立て籠もれるはずだ……！

だが当然、鬼たちもそれを許そうとはしない。三人が逃げ出したのを見ると、四足になり、物凄い速度でそのあとを追いつめた。

地下研究所。ここは今、ディエス・イレの潜入者の手によって上と劣らぬ大パニックになっていた。

ホールでパニックが起きると同時に職員に扮していた彼らは、自分たちの身を省みることもなく制御盤に駆け寄ると、全調整槽のロックを解除した。

円柱状に並ん調整槽は一階、二階、三階と三段にわたって縦に設置され、下方に行くほど重要な生物が収容されている。

制御盤は二階の吹き抜けとなった台座の上にあり、ディエス・イレの者たちは操作を終わらせると同時に背後から職員に攻撃され、死亡した。

「おい、不味いぞ！　すぐにロックをはめ直せ」

潜入者の亡骸からナイフを引き抜き、そのイミユニティーの職員は慌ててこのエリアの中央へと視線を走らせる。三段に並んだ水槽はそれぞれ白い蒸気を吐き出し、今にも蓋がスライドしそうだった。

「急げ、急げ、急げ……！」

その男の横に立ち必死に制御盤を操作しながら、白衣を着た職員がぶつぶつと呟く。この研究所の副主任であり、唐沢の右腕、小野寺辰見だ。でらたつみ

「くそ！ 何か細工をされている。一段一段ロックをしないおすしがない」

頬から大量の汗を流し、両手の指を蜘蛛の足のように素早く動かす。

「三段目再ロック完了……二段目再ロック完了……」

「早くしろ、あいつが目覚ましたぞ！」

イミュニティーの職員が最下層、一段目にある唯一の、大きな水槽を指差して叫ぶ。それは一段目の中央に置かれ、まるでロケットの発射台のように複雑な台で囲まれていた。

「三段目際ロック完了……」

白衣の男が最後の入力を押しかけたとき、その水槽の蓋が吹き飛んだ。

ぶわつとエリア中に水槽から放出された白い煙が広がる。

「おいおい……マジかよ……！」

イミュニティーの職員は震える腕で口を押さえた。

前面が無くなった水槽から、ゆつくりと『それ』の腕が伸びる。

ゴム手袋のような質感のその大きな二本の腕は、水槽の淵を掴むとそこを支点にし、本体である体を持ち上げた。

白い煙の中央から優雅に、悠然とした動きでそれは姿をさらけ出す。

顎の下でクロスするように生えた薄茶色の長い髪。豊かな胸の横にある肩と、腰から伸びた二本の下腕部に支えられた、左右それぞれ一本の上腕部。大きなスカートを穿いたような下半身は、その裾に地面と水平に円を描くような歯が並び、ぐにぐにと蠢もぐもぐいている。

そしてそれらを含めた全身は全て、垂直に列をなした、糸のような触手がついた針で覆われていた。

「『あれ』が出てきちゃったぞっ、すぐにこのエリアを封鎖しろ。六角代表には俺が連絡する」

イミユニティーの職員は小野寺にそう指示を出すと、一目散に後ろに走り出し、台座から降りると二階の扉を開けてその場から姿を消した。

小野寺は言われた通りにしばし制御盤を弄ったが、先ほど水槽の再ロックをしたときと同様、何故かシステムが不調をきたし、思うように操作することが出来ない。

「くそっ、ウイルスを入れたのか！ これじゃあ、俺には対処の仕様が無い……！」

小野寺の専門は生物学だ。生物の調整を行うために一応のPC知識を持つてはいるが、それはあくまで一般教養程度。コンピュータウイルスとなると完全に専門外となってしまう。

そうこうしている間にも、水槽から出てきた二メートル近い怪物は二階の手すりに腕を伸ばし、上方へと向かい始めた。

「あああ……やばいぞ——……！」

小野寺はただ呆然とその一部始終を眺めることしか出来なかった。

駆け込んでいく人々の姿が見える。

一階ホール中央付近の左の壁際。目の前の洋服店を視界に納め、截は必死に二人の背を押した。

「あそこに駆け込むんだ、早く！」

背後からは三体の鬼が自分たちの数メートル後ろに迫り、今にもその黄色く濁った歯を赤い肉に食い込ませようと声をあげている。

截は「感覚」からあの鬼たちの危険度は、純粹イグマ細胞の感染者である悪魔の第二形態と同等レベルだと感じていた。自分一人でも一対一の戦いは手に余るし、こうして亜紀と千秋を庇いながら、しかも三体も相手にするのは分が悪すぎる。

だから極力戦闘は避け、逃げに徹することになっていた。

先に入り込んでいた人々が扉を閉めようとする。それを見た千秋は、必死に声を絞り出した。

「待つて、まだ居るの——！」

だが、恐怖に支配されている彼らは当然その言葉を聞こうとはしない。何せ截たちを追っている三体の鬼に加え、さらに左側からはこちらに向って逃げてくる別の集団と、それを追う二体の鬼がいるのだ。「まともな」人間ならば彼らがここに辿り着く前に扉を閉めることは、至極当然の反応だった。

——間に合わない……！

このままでは自分たちが辿り着くまえに扉を閉められる。そう思った截は、洋服店の扉を閉めようとしている店員らしき若い男の腕目掛け、近くに落ちていた缶ジュースを全力で投げつけた。

「いでえっ!？」

まだ蓋の開けられていない缶ジュースの強度はかなり硬い。店員の男は声を漏らすと咄嗟に腕を扉から放した。

その隙に截たち三人は店内へと侵入し、左方向から走ってきていた集団も雪崩れ込むようにその後が続く。

「何してんだ、閉める！」

店員が扉から手を離れたことに気づいた男性の一人が、截や他の者たちが走り込むと同時に怒鳴った。

それを聞いた店員は慌てて扉のノブを掴み、内側へと引きつける。鬼たちが飛び込もうとしていたまさにその瞬間、洋服店の扉は閉まった。

そう、一時的には――

「こ、こいつ……ノブを開けようとしてやる！」

扉をしめると同時に鬼がノブを掴み、引きあげようとしたため、店員は顔を蒼白にして必死に扉を引っ張った。だが力の差からか、当然鬼に一人の一般男性が叶うわけはなく、その隙間はどんどん開いていく。

「みんな引けー！」

先ほど店員を怒鳴ったガテン系の男が、慌てて扉に走りよりそのノブを握る。その声に最初にここに逃げ込んでいた人々は急かされ、みな一氣に扉まで走りより、店員や男の体、ノブを掴んだ。

この人数にはさすがに勝てなかったのか、扉の前にいた鬼は力負けし腕を滑らせノブを放してしまった。店員は目を血走らせ荒い息を吐きながら急いで扉の鍵を閉める。

鬼は再び扉を開けようとしたが、流石に鍵を破壊するまでの力は無かったらしく、いくら引いてもその扉が開くことは無かった。

「た、助かった……！」

ぜえ、ぜえ、と満身創痍の兵士のように、店員や集まっていた人々が安堵の溜息を吐く。

総勢五体の鬼はしばらく強化ガラスの向こうからこちらを睨みつけていたものの、他の生存者に気を取られたのか、興味が無くなったのか、数分後には目の前から離れていった。

これで取りあえずは身を守ることが出来た。

若い店員の男は、黒いカーテンを引くと、ホールから店の中が見えないように隠した。

何が起きたのかは分からないが、ここに立て籠もっていれば大丈

夫。

安全だと自分に言い聞かせる。

扉の周りにいた人々も胸を撫で下ろし、そこから離れようとした。

「きゃあああああ！」

「うおおお、何なんだよこれええ!？」

いきなり今度は店の中からそんな声が響く。

床に座り込んでいた亜紀が目を向けると、指先からその付け根にかけて手を赤灰色に染めている男がいた。清掃員だったのか、水色のジャージのような服を着ている。

男の横に立っていたOLらしき女性はその手を見た瞬間、喚き声を上げ、一気に男から離れた。

「た、頼む、誰か助けてくれ——こいつを取ってくれえよお!」

清掃員の男は感染した右腕を左腕で持ち上げ、まるで自分の手を見せびらかすかのように、周囲の人間に目を向ける。だが、誰一人男に近寄ろうとはせず、次第に侵食範囲の多くなっていくその腕を恐々とした表情で見つめた。

「あ、開ける! あいつ多分外の奴らと同じ化物になるぞ!」

「殺してつ、殺してよ!」

「た、助けてくれ……!」

それぞれが顔を引きつらせて出口や部屋の端へと恐ろしい速度で離れる。絶望した清掃員の男はその腕を抱えたまま、土下座するように座り込んだ。

ジャリッ——

耳に靴の音が届く。

今の自分に一体どこの誰か近付いたというのだろうか。

清掃員の男は潤んだ目を上に向ける。

その瞬間、黒い刃が眼前を素早く走った。

「え?」

血が弾き飛ぶ。

右に、左に、上に、下に、床と服を濡らし、男の周りを赤く染め

る。

清掃員は自分の前に立っている黒いレインコートを着た截と、彼が持っている黒柄ナイフに視線を合わせた。

そして、その流れのままに今度は自分の腕へとその向きを変える。ついさっきまで後生大事そうに握っていた右手首の上半分が、綺麗さっぱり目の前から消えていた。

数十センチ先の血溜まりの中に無造作に転がっている。

「うつ——うおおおおああああああ！」

「動くな。今止血する」

壮絶な苦しみの声をあげる清掃員とは打って変り、寒気がするほどの冷静な声で截はそう言った。

清掃員を遠巻きに見ていた人々は、突然男の手首を切り飛ばしたこの怪しいレインコートの人間を恐怖と、不安と、混乱を持った目で見つめる。

そんな彼らの視線には目もくれず、截は男の上腕部を携帯していた包帯のヒモで縛った。

「誰か、手伝って下さい」

清掃員の腕を高く持ち上げたまま後ろを向くが、誰も動くこうとはしない。

截はそんな彼らの反応にも特に表情を変えず、作業の続きを始めた。

——動脈には当たらないように斬ったが、やっぱり血が止まらない。感染を食い止めるためとはいえ、このままじゃこの人は持たない。なるべくすぐに安全な場所に移動させないと。

清掃員の男の切断面にハンカチを押し当て、包帯の残りで圧迫する。

しかしそれでも血が止まらなかったため、顔を曇らせた。

「ちよつとどいて」

いつの間に隣に来ていたのだろうか。

千秋は鞆の中から糸と針を取り出すと、そういつて截を横に退か

した。

亜紀の保護という任務についている千秋は、元々は隊員の応急治療が役目だった。その所為か、いつもこうして鞆の中に医療道具をしのばせ、例えば仕事に関係しない場所でさえも持ち歩くことが癖になっていた。

手際よく男の止血を終わらせ、傷口をライターにかけた針で縫うと、千秋は足を伸ばし、自分のストッキングを脱いだ。そして右足の部分を太股の所で切ると、足先とは反対の方向に切り込みを入れる。

スカートが捲れることも関わらず、そういった動作を手際よく終えると、千秋はその切り取ったストッキングの男の僅かに手首の残った腕へと回し、両端を引っ張って手首が頭の方に向くようにしっかりと肩に結んだ。

「これで、しばらくは大丈夫なはずですよ」

大量の汗を流している男に安心させるように微笑み、そっとその背に手を置いた。

「あ、ありがとうございます……」

処置に安心したのか、清掃員の男は青白い顔で千秋に礼を言っと、そのまま気絶した。

截は応急手当が終わったことを見届けると、千秋の顔を不思議そうに見た。

「私……看護学校の学生なの。驚いた？」

フードの置くから覗く怪しむような視線に気づき、そう教える。

それで満足したのか、截は何も言わず手に握っていた黒柄ナイフを腰に仕舞った。

ようやく冷静さを取り戻したのだろうか。一部始終を見ていた生存者たちは、截が仕舞った真っ黒なナイフを見て次々にひそひそ話を始める。

——参ったな……。

截は注目を集めてしまったことを悔いながら、そっと清掃員の男

から離れた。

「何だあいつ、フードなんか被りやがって……」

「もしかして、外にいたあの鬼になった奴らの仲間なんじゃない？」

「怖いわ……！」

洋服店の中を歩く間に、そんな声が聞こえてくる。

それは壁際まで移動し、座り込んだ後でも変わらなかった。

バイオハザード発生。

そのニュースが六角行成に届いたのは事件発生から五分後のことだった。

自分のオフィスにいた六角は内通電話からそのことを知らされた。「——分かった。すぐに僕は避難する。ここの指揮は君が取りたまえ。本部への救援要請も頼んだぞ。それと、僕が乗るはずだった機体はまだヘリポートにあるのか？ ……そうか、よし、それじゃあこれから上に向う。……ああ、頼んだよ。あとは任せた」

警備主任の部下に事件発生中の全権限を任せ、自分は脱出することとを伝える。そして電話を切ると同時に秘書に向き直った。

「恐らくディエス・イレの襲撃だろう。僕を狙ったのか地下の施設を狙ったのかは定かではないが、既にホールでかなりの犠牲者が出ているらしい。君は今すぐに重要な資料をまとめて僕についてきなさい。三分後にここを離れる」

「は、はい、直ちに……！」

秘書が小走りで部屋の中を走り回っていると、オフィスの扉が開

き、警備の男が二人中に踏み込んできた。

「六角代表。急いで下さい。時間ありません」

「時間が無い？ 敵はホールに居るんだろ。ここからヘリポートまでの道は安全なはずだ」

「それが…… 実は少々不味いことになりまして……」

警備の男は困ったように眉を寄せる。

「ホールの連中とは別に内部に潜入していた者たちが二、三人居たようで、そいつらが研究所に攻撃をかけたんです。こちらはホールのバイオハザードに気を取られていたので、完全に不意をつかれ……」

「まさか、地下施設が落ちたのか！？」

「いえ、その者たちの鎮圧は済んだのですが、その騒ぎの影響で地下の実験層にいた例のあれが……」

その先は聞かなくても分かった。

「そうか、どうやら敵はかなり念入りに計画をしていたようだ。確かに時間はなさそうだ。いつここにも攻撃が来るか分からない」

地下研究所への潜入が行われていたということは、自分のオフィスの場所も、移動範囲も全てスパイから敵に伝わっているということだ。六角は頭を抱え秘書を呼んだ。

「資料は全て集めたか、行くぞ」

秘書は機密に関わる重要なファイルを自分の鞆の中にわんさかと詰め、なんとか頷く。それを見た六角は警備員と共に歩き出した。

出来るだけ早く上へ行くために。

地獄と化したこの場所から離れるために。

だが、先頭を歩いていた警備員が廊下を曲がった途端、突然赤灰色の化物に押し掛かれ、床の上に倒れた。

「ザアアアアアア！」

うあああああつ、な、何だこいつは！？」

警備員の男は喚きながら腕を振るが、鬼の力は彼の筋力よりも遙かに強く、簡単に組み伏せられてしまった。

「ここはもう駄目だつ——六角代表、こちらへ！」

ヘリポートへの階段がすでに感染者の手に落ちたことを知ったもう一人の警備員は、自分の同僚の首が挟えくまれ、血柱を立ち上らせているというにも関わらず、六角の身だけを案じて来た道を戻る。それは別に非常でも、感情が無いからでもなく、それが彼の任務であり、役目だったからだ。

「何て早い感染速度だ。この管理区域まで既に入り込んでいるとは……！」

背後で響く断末魔を聞きながら、六角は冷や汗を流した。

「先ほど研究所で起きた騒動と同様、ホールの騒ぎの際にあちらこちらでイグマ細胞が撒かれているようですね。恐らく、ヘリポートまでの道は全て連中に狙われているはずです」

「——仕方が無い。ならば隊員の詰め所だ。あそこならばイミューンティの仲間も多くいるし、装備や食料もある。しばらく救助がくるまであそこに立て籠るしかないな」

普段は物静かなこの管理区画のあちらこちらから悲鳴が轟とんく。六角はそんな声を聞きながら、どうやって敵がここまでの侵入を可能にしたのか理解に苦しんだ。

——ディエス・イレの壊滅から僅か二日。奴らの強襲計画の内容は全て手に入れたし、こんなテロの情報は無かった。まさか……あの情報が囷くもだったとでも言うのか？

いくら考えても答えは出ない。今はとにかく生き残る。無事にこの常世国から脱出することの方が重要だ。六角行成はそう考え直し、頭に浮かんだ疑問を掻き消した。

ホールから裏町街を目指し、憩いの広場へと足を踏み入れた直後、唐沢は押し寄せるように後方から現われた人の波に吞まれた。

「うがあっ——な、何だ!？」

血相を変えてここから遙か数エリア先、北東の第二出口を目指す彼らを見つめ、ただなすがままに流される。

「唐沢さん!」

一緒に行動していた住岡はこの騒ぎで大きく離れ、いつの間にか遙か前方に姿が見えた。

——何か起きたのか!？」

嫌な予感がした唐沢は何とか左へ、左へと進み、広場の端に移動する。

そしてやつとのことで人波から抜け出ると、事態を把握するために携帯電話を取り出し、信頼する部下である小野寺へと通信を繋いだ。

「あ、小野寺か! 上は凄い騒ぎになっているんだが、これはどういうことだ?」

ぎゃーぎゃーと周囲がうるさいため、怒鳴り散らすようにそう言う。

小野寺の声も良くは聞こえなかったが、ディエス・イレという単語だけは聞き取れた。

「テロか——ってことは今頃ホールは血の海だな。分かったすぐに地下に戻る。下は大丈夫なのか?」

今頃研究所ではイミューニティーの隊員たちが対策本部を作り、緊急事態の解決法を練っているはずだと、そう考える。

だが、唐沢の耳に飛び込んできた言葉はそんな明るいものではなかった。

「なっ、フォルセティが脱走した!？」

自分の研究の集大成。

地下研究所の要。

数時間前に研究資金の続投を認められたばかりの研究成果の脱走にわが耳を疑う。

「そうか、あいつはこっちに向っているんだな！？ あそこから一階に出るにはパーティー会場の非常階段を通るしかない。——分かった。俺はこれから近くの警備員をまとめ上げ奴の進行を食い止める。あいつは『怪我人』さえいなければ人に害を与えることは無い。奴がホールに辿り着く前に何とかして捕獲する。そっちはお前に任せた」

長年の研究を、自分の集大成を、こんな場所で、こんなテロで無駄にして堪るか。唐沢はそう決意した。

「住岡、ここらの警備員をできるだけ集める！ パーティー会場に向う」

ようやく数メートル先まで戻ってきた住岡に、そう叫ぶ。

「はあ？ さっきの場所に？ 何だよ」

まだ何が起きているのかさっぱり理解していない住岡は混乱しきつた表情で唐沢に叫び返す。

だが、既に唐沢は走り出しており、そこにはもう姿が見えなかった。

< 第三章 > 闇體鬼

清掃員の手首を切り落としてから、截の立場は悪くなっていた。

この洋服店の中に避難している人間の多くは、あの鬼が感染増殖するということも、イグマ細胞による産物だということも、何も知らない。

だから真っ黒なレインコートを被り、あからさまに銃刀法違反である大きな刃物を所持していた、しかも自分たちの一人を傷つけた、そんな截に恐怖の視線を向けることは当然の反応だった。

それらの視線から逃れるように店内の奥、職員用の控え室に入ると、截は残った包帯を取り出し、それを自分の顔へと巻いた。

——フードを被っている理由は、鬼から受けたこの頭の怪我を見られたくなかったからってことにして、問題はここからの脱出だな。いくらなんでもこれ以上行動を共にすれば、流石に亜紀も怪訝に思うだろう。

非常用の救急箱でもあったのか、店内には自分のように包帯を頭や顔に巻いている人が二、三人居た。決して不自然ではないはずだ。再びフードを被り、生存者たちがいる商品部屋へと戻る。

截の黒い姿が見えるなりに、部屋にいた面々の顔に緊張の色が走った。

打ち合わせでもしていたのか、扉を閉める時に活躍していた店員と、ガテン系の中年の男が互いに視線を混じらわせながら截へと近付く。

截は彼らの茶色の長髪と、短い短髪を視界に納めながら、何気なく視線を移した。

「おい、お前。一体何者なんだ？ あんな物騒な真似しやがって」

物騒とは清掃員の手を切り落としたことを言っているのだろう。截はガンを飛ばすようなそのガテン系の男の目を真っ直ぐ見つめ、素直に答えた。

「僕はこの常世国と関わりのある会社の人間です。さっきあの人の腕を斬ったのは感染を止めるためですよ。あしなければ彼は外を歩き回っている鬼と同じような化物になっていた」

「か、感染？ 何を言ってるやがる」

感染という言葉に一瞬驚いたような顔をしたものの、それが嘘だとも思っただのか、男は引き続き責めの言葉を続けた。

「とにかくさっきのナイフをこっちに渡せ。お前が持っているとした誰かが傷つくかも分からん」

「無理ですよ。これは僕のナイフだ。ちゃんと国に正式な許可も取っている」

截は財布を取り出すと、そこから一枚のカードを取り出した。

このカードはイミユニティーの隊員が銃刀法違反から逃れるために作られたもので、国が正式に認めている証明書だ。截は黒服として活動するうちにイミユニティー側の恩恵でこれを手に入れ、自由に利用していた。

「僕が所属しているのは派遣警備員のような会社でして、刃物の所持が認められているんです。あなたがこのカードを無しにナイフを持つことは犯罪になる」

「はあ？ …… そんなもの知るかよ。いいからそのナイフを渡させて」

だが、そんな証明書の存在を何も知らない男はカードを一瞥すると、すぐに視線を逸らし、截の前に手の平を突き出した。

その顔を截は無表情で見つめる。

「何睨んでんだよ、さっさと寄せ」

男は凄みのある声を出し、截の腰に手を伸ばした。

そしてその瞬間、截は男の膝裏をかかとで蹴り、同時にその胸を押した。

「おごつ!？」

男は仰向けにひっくり返るように倒れる。

「この野郎!」

一部始終を見ていた店員が殴りかかってきたが、截は彼の腕を首を僅かに傾けかわすと、そのまま足を引っ掛け横転させた。傍から見ていた人々はその一連の動きに驚嘆の声を漏らす。

激しく動いた影響で截のフードは捲れ、その奥に隠してあった包帯だらけの顔を表に出した。

「僕はさっきこの目で人が感染するところを見たんです。この傷はそのときに受けたものだ。信じてもらえますか」

猫のように鋭い目を倒れている二人に向け、フードを被りなおす。それを見た男は簡単に床に這い蹲らされたこともあり、何も言葉を返すことが出来なかった。

——不安で感情を爆発させられる対象を探している。不味いな……ここに立て籠もる時間が長くなれば、なるほどまたこういった争いが起きるかもしれない。

訓練を受けている自分とは違い、ここに集まった多くの人間はこんな異常な状況、世界に慣れてはいない。一刻も早く脱出しなければ殺し合いが起きるかもしれないと截は思った。

皆の緊張を高めないように静かに壁際へと移動すると、そこに居た亜紀と目が合う。

亜紀は不安そうな、怖がるような、不審そうな目でこちらを見ていた。

その顔を複雑な心境で見つめると、截は座り込んだ。

顔を下に向け、出来るだけ早くこの悪夢が終わることを願う。

イミユニティーの救援が現われ、無事に亜紀が脱出する。

それだけが、今の望みだった。

截たちが駆け込むと同時に洋服店内へ入った集団に、姉宮夏は居た。あねみやなつ

截や感染者、そして店員とガテン系の男が起こした一騒動が過ぎ去った頃。彼女は体育座りの姿勢でぶるぶると震えていた。

必死に逃げた性で所々着崩れし、無数の皺を刻んだセーラー服。上の一部を小さくツインテールに結んだ黒っぽい茶色の長髪。

どこからどう見ても、そこら辺にいる普通の女子高生だ。

他の人々が畏怖の籠った視線を截に向ける中、彼女だけは別の意味で彼を見つめていた。

あの男は普通の人間とは違う。

この異常極まりない状況の中でも冷静に行動し、自分を見失わずに過ごしている。

先ほど二階でサラリーマンの男が感染する現場を目撃した夏は、千秋や亜紀を省き、唯一截の言葉を理解していた。

あの時截が手首を切り落とさなければ、この密閉された場所で「鬼」が出現するという最悪の事態を招いていたはずだと。

恐怖に震える自分の体を腕に抱き、夏は思った。

あの男についていけば自分は死なない。

助かるかもしれない。

外に出れるかもしれない。

何とかしてあの男に近付く必要がある。

あの男に守って貰う必要がある。

どんな手を使っても。

他の何を犠牲にしようとも。

自分の不安を、恐怖を紛らわせるように、夏はそればかり考えていた。

——送信完了つと。

亜紀はメールを送り終わると、携帯の画面を見た。

そこには国鳥友と宛先が表示され、本文には自分の身に起きたことや、助けを求めていることなどが簡潔に書かれている。

これでここに立て籠もってさえいれば、後は彼が助けに来てくれるはずだ。亜紀はそう確信していた。

携帯を閉じてズボンのポケットにしまう。

そのまましばらく考え込んでいたが、ふと気になり、隣に座っている截を見た。

半時前、僅かだけ見えた彼の顔にどこかで見たことがあるような違和感を感じていた亜紀は、もう一度そのフードの奥を見たいと思った。

包帯の奥から覗いているあの目には懐かしい感じがする。

まるで自分のことを知っているような、守ろうとしているような、そんな目だった。

「……ん？」

何やら肩に圧力を感じ、截は顔を上げた。横を向くと、躊躇いがちに亜紀がこちらを見ていた。

——バレたわけじゃないよな……？

僅かに躊躇した後に、截は低い声で亜紀に声をかけた。
「何ですか？」

動揺を隠すように、機械的な言い方で尋ねる。すぐに答えが返って来ると思ったが、亜紀は困ったように微笑み、その細い指でフードを指差した。

——何で喋らないんだ？ そういえば、まだ会ってから一度も声

を聞いていないな。

再会したときと同様の彼女の様子に流石に疑問を持つ。

「フードを外せってことですか？ 悪いですけど、あまりあの包帯だらけの顔を見られたくは無いです。勘弁して下さい」

そう断ってみたが、どうやら亜紀の目的は違うらしい。彼女は自分の頭に手を置くと、治療するようなジャスチャーをして見せた。

——ああ、頭の怪我は自分では対処し難いから、ちゃんと見てあげることか？

そう彼女の動きを介錯したあとに、截の頭に不安な影が走った。

亜紀の行動とこれまでの動きを思い出す。

「まさか……」という思いが浮かんた。

「話せ……ないんですか？」

恐る恐るそう聞くと、亜紀は困ったように頷いた。思い出したくない何かに耐えるような瞳で。

「何で？」、「どうして？」、頭の奥を金槌で打たれたような衝撃と共に、截はすぐにその原因を理解する。

決まっている。

三年前のあの事件だと。

一女子高生だった彼女にとって、あの事件の恐怖や精神的な不安は到底耐えられるものではなかったはずだ。

いや、もしかしたら、自分の死も関係しているのかもしれない。

——そんな……！

截は後悔と亜紀に対する懺悔の気持ち、そして再びそんな彼女をこんな事件に合わせてしまった運命に、呪いの言葉を吐いた。

「いつから、ですか？」

震える声で聞く。

亜紀は何故截がそんなことを聞くのか、不思議に思いながらも、指を三本上にあげた。

それを見て、截は確信する。

やはりあの事件の所為だと、あの時の悪夢が、自分の死が、彼女

をこんな状態へと追い込んでしまった。

泣きたくなるような申し訳のない気持ちを中心に抱き、截は顔を伏せた。

絶対に彼女をここから出さなければならぬ。

なるべく早く。

この悪夢から。

自分と彼女の運命を狂わせたこの地獄の領域から。

何がなんでも、必ず――……！

亜紀の視線を感じる。

截はゆつくりと顔を上げる。

「……頭の傷はこう見えても大したことはないんです。気にしないで下さい」

そして辛うじて、その言葉を搾り出した。

「何あれ……？」

黒いカーテンの隙間から外の様子を見ていた千秋は、鬼たちが奇妙な動きをし始めたことに気がついた。前に掛かった邪魔な自分の前髪を押しのけ耳にかける。そして片目を扉に押し付けるように、ガラスに近づけた。

既にホールに人の気配はなく、殆どの人間はどこかに隠れたか、逃げたか、殺されたか、感染したかの道筋を辿っている。二十匹あまりになった感染者――鬼たちは自由気ままにホールの中を徘徊していたが、その内の一部が呻き声をあげ、頭を上に向けていた。

「ザアアア……！」

千秋がそのままこつそりと様子を伺っていると、その鬼たちの体に変化が見られた。

赤灰色に染まっていた肌は人体模型のように筋肉がむき出しとなり、白い筋を全面に表出させる。

浮き出ていた体中の骨は完全にその姿を体外に出し、禍々しい形となり外骨格のフレームのように、全身を網目に覆いつくした。

さらに、もつとも特徴的だったその頭部は顔の前面が完全に髑髏どくろにしか見えなくなり、まるで中に肉の詰まった骸骨から毛が生えているようだった。

> i 4 7 4 2 — 2 2 4 <

膨れ上がったその禍々しい髑髏鬼は、一回り小さい元の鬼たちを押しつけ、より攻撃的に周囲の探索を始めた。

——第二形態？ それにしても早すぎる……！

通常イグマ細胞の感染者が第二形態へと進行するには、二日か三日の時間を要する。だが、目の前にいるこの化物は災害発生から僅か一時間足らずで体を変化させてしまった。あまりに恐るべき成長速度だ。千秋は戦慄し、自分の体が震えるのを感じた。

「みんな大丈夫か？」

隊員たちの詰め所に辿り着き、用意されていた椅子に腰を下ろすなりに、六角行成はそう聞いた。

普段は休憩室として使用されるこの部屋は、今では完全に様変わりしていた。

置かれていた全ての長机は一つにまとめて中央に設置され、その周囲を囲むように椅子がある。そしてそのそれぞれに紺色の隊服や

警備員の服を着たイミューニティーの面々が座り、正面に居る六角と臨時で用意されたモニターの映像を見ていた。

「六角代表、警備の者が事件発生直前に東郷大儀の姿を目撃したそうです。やはり、これはディエス・イレのテロかと」

警備主任であり、この詰め所を任された男、中崎が言う。

「やはりそうか。二日前の復讐のつもりだろうな。——脱出が可能なルートはいくつある？」

「管理区画から外に出る道は全て感染者に塞がれています。商業区画の方も、感染拡大措置のためにシャッターを下ろしていますし、正規のルートからの脱出は困難かと」

「君らは化物退治のプロだろ。あの感染者たちを殲滅することは出来ないのか？」

「それが……今回の感染者たちは——我々は鬼と呼んでいます、彼らの性能は凄まじく高く、既にルートを確保しようと送った隊員に死者や怪我人が出てしまいました」

「何人だ？ 倒した鬼の数は？」

「死者が九人。倒した鬼の数はゼロです」

「ゼロだと!？」

六角は我が耳を疑った。イミューニティーの隊員は黒服の者たちには劣るとはいえ、考えられる全ての事態に対する完璧な訓練を受けている。それが、そんな彼らが、まさか上級感染体でもない、ただの感染者にいい様に殺されるとは思ってもいなかった。

「いったいあれはなんなんだ？」

それは当然の疑問だった。

「分かりません。全く情報がないので……今のところはなんとも……」

中崎は恐縮するように肩を落とした。それを見た六角はあからさまな溜息を吐く。

「このままではジリ貧だ。どうにかならないのか？」

「増援の要請を出しましたので、数時間以内には実績を持った隊員

たちが駆けつけるはずです」

中崎の左に座っていた女性の隊員が全員の不安を慰めるように言った。だが、その言葉で六角の不機嫌さは上昇してしまった。

「増援？ 君たちも正規の隊員だろ。何故君たちだけで解決する事が出来ない。一体普段君らは何をやっているんだ？」

「す、すいません」

釣りあがった目で睨まれた女性隊員はそのまま顔を伏せ、落ち込んだように席に座りなおしてしまった。

「——こうなったら……仕方がない。黒服を雇うか。彼らは一人でイミュニティー部隊ほどの実力があるからな」

「で、ですが、既に増援部隊の編成が始まっているのですよ」

「ああ、それはそのまま続けさせてくれ。ただ僕は、自分の生存率を上げたいだけなんだ。君らやイミュニティーの間では実力に心もとない。分かってくれ」

デイエス・イレの崩壊に黒服が関わっていたという噂は当然ここにいる幹部たちはみな知っている。この時期に黒服を雇う事の危険性を、誰もが一考した。

部下たちの考えていることを悟ったのだろうか。六角は急に表情を崩しながら彼らを見渡した。

「心配ない。雇うのは僕がもっとも信頼している人間だ。あの男なら、何も危険はないさ。そもそも、黒服が僕に危害を与えて一体なんの得がある？」

六角は自然な笑みを浮かべ、そう言った。

「……分かりました。代表がそうおっしゃるのなら、私は何も言いません」

六角が救助を頼もうとしている相手が誰か予測がついた中崎は、諦めたようにそう答える。

「取り合えずはここで待機ということになりそうだ。黒服にしろ、増援組にしろ、脱出ルートが確保出来ない限りはどうしようもない」
そう言うと、六角は席を離れた。

「何処に行かれるの？」

慌てて会議に参加していた一人の隊員が聞く。

「何、このところずっと働き詰めだね。少し休むよ。今後のためにも十分に体力を作っておいた方がいい」

「この状況で寝るのか？」といったような表情を浮かべている彼らを背に、六角は歩き出した。

何故ならばそれが六角自身の生存力をあげるもつとも確実な方法だったのだから。

睡眠を取ることによって、彼の「感覚」は力を発揮する。

全てを見通し、先読みする正夢、予知夢として――

截はこの洋服店にいる他の人間の不穏な動きを感じ取った。

先ほど自分と争ったガテン系の男や長髪の店員を中心に、数人の男たちが何やら部屋の隅でひそひそと話し合っている姿が見える。

外に蔓延^{はびこ}る鬼の軍団。そして中に紛れている怪しすぎる男。

まるで板ばさみのように襲い掛かった不安が、彼らの心を狂わせていた。

「あいつ、今は大人しくしているが、いつ何をするか分からない。俺たちが寝ている間に首を斬るかもしれないぞ。今のうちに動けないようにとつちめた方がいい」

「そうだな。でも本気でやるのか？ あいつなんか荒事になれてそうだったぞ」

ガテン系の男の物騒な言葉に、店員は躊躇う素振りを見せた。

「何言ってるんですか。ただでさえ店の外があんな状態なのに、これ以上ヒヤヒヤする要素を抱えるなんてごめんですよ。わ、私はやりますよ」

メガネをかけた買い物客らしき中年の男がチラチラ截の方を向きながらそう言った。それに対し、店員が疑問をぶつける。

「でも、あのデカイナイフはどうする？ 刺されたらもともこうもないだろ」

「おう、だからいきなり殴りかかるんじゃないで、最初に会話に持っていくんだよ。一人があいつの気を引いている間に、残りの数人が後ろから腕を拘束する。いくら何でもあいつだって会話してきている相手に斬りつけたりはしないだろ」

「そ、そうか……それならなんとかなりそうだな……！」

ガテン系の男のセリフによりやく安心したのか、長髪の店員は自分の手の平を合わせ、不安を紛らわせるようにぎゅっと握りしめた。怪しげな目つきで時たま自分の方を振り返る男たちを見て、截はすぐにその狙いを理解した。

彼らは自分の存在を許すことが出来ない。

自分が平然と同じこの空間にいることが不安で堪らない。

極限状態の精神が、彼らの心のベクトルをそう一つの考えへと結論づけたのだ。

――まずいな……五人か。さすがに同時に相手にするのは厳しい。出来れば揉め事になるような真似はしなくなかったが、唯一の武器を取り上げられるのも、自分の身を拘束されるのも、何が起きるか分からない現状では命取りとなる。仕方がなく、截は臨戦態勢を取った。

壁につけていた背を離し、僅かに腰を曲げる。

「行くぞ」という掛け声と共に部屋の奥で男たちが立ち上がったとき、それは起きた。

「え、まさか……！」

千秋は口元を押さえ、扉からさがった。

第二形態へと変貌した髑髏鬼がその体中の筋肉を膨れさせ、スタート前のマラソン選手のように前傾姿勢を取る。カーテンの隙間から覗く千秋の目と視線が合うと、髑髏鬼はほくそえむように、自慢するように高らかに鳴いた。

「ザアアアアアッー！」

「みんなさがって！」

後ろに飛ぶようにその場から離れる千秋。今にも一色即発の状態だった男たちと截は、その声に動きを止めた。

「ドンッ」という激しい音と共に、扉のガラスにヒビが入る。

「なっ……」

——特殊強化ガラスだぞ！

波紋状に広がってゆくその割れ目を見て、截はカーテンの隙間から見える髑髏鬼の姿に恐怖心を抱いた。

再び髑髏鬼が突撃し、大きな音と共にヒビの範囲が増える。

——ヤバイ、入ってくる！

截は立ち上がり、亜紀の腕を引いて一緒に壁際にくっ付くと、その瞬間に備えた。

刹那、銀色に輝くガラスが飛び散り、部屋の中にきらきらと反射による光の花火が生じると同時に、髑髏鬼がその赤灰色の体を、筋肉繊維がむき出しとなった禍々しい体を、無力な獲物が無数に潜むこの最後の安息地へと投げ入れた。

「う——あああああああああ！」

「あああああああつー！？」

「ザアアアアアアアアアアアアア！」

髑髏鬼に連れられて続々と鬼たちが入ってくる。

洋服店内に隠れていた人々はみな飛び上がんばかりに絶叫をあげ、顔を醜く歪めた。

「亜紀ちゃん！」

千秋は入口から見て右斜め前にいた截と亜紀に近寄ると、彼女を守るようにその頭を胸に抱いた。

——…一点突破するしかない！

鬼たちが店の中にいる人々に気を取られている今なら、まだ助かる望みはある。

ここにいる全員を無事に救うことなんて不可能だし、自分の命を守るかすら怪しい。

截はただ、亜紀だけは助けたい、亜紀だけは殺させてなるものと、二本のナイフを抜き、彼女たちを背に隠すように立ちながら、そう強く心に念じた。

「俺から離れるな！」

背後にいる二人にそう叫び、冷や汗の滴る顔を向ける。イミユニティー隊員である千秋はすぐに截の意図を察し、頷いた。

感覚が知らせる。

あの部屋の中央にいる髑髏のような鬼には手を出すべきではないと。

あいつが自分たちに目をつければ全てが終わる。

ただの鬼しかこちらを向いていない今しかチャンスはない。

久しぶりに感じる身を包むような死の気配に耐えながら、截はナイフを握りしめ、床を蹴った。

この場所から店の出口まではやく四メートル。外には二体の鬼が待機していたが、扉までの間にいる鬼は一体のみ。截はその鬼に体当たりするように突っ込むと、ナイフを勢い良く繰り出した。だが、鬼は截の存在に気がつくとすぐに後方へと飛び、その攻撃を避ける。空振りしたことに軽い苛立ちを覚えつつも、截はそのまま足を進め割れたガラスの前にいる鬼に二撃目を打ち出す。後ろにある扉の淵に足を取られ、鬼は截のナイフをかわすと同時に仰向けに倒れた。

「行けっ！」

今しかチャンスは無い。截はそう叫ぶと倒れた鬼に止めを刺すため、飛び掛るようにナイフを振り下ろした。勢い良く風を切ったため、被っていたフードが後ろに落ちる。鬼は背中に突き刺さったガラスの破片に痛みの声をあげながらも、截のナイフを咄嗟に自分の

腕の側面で防ぐ。ギリギリと黒い血が流れるその腕を截が押している間に、背後を亜紀と千秋、そして付近にいた数人の者たちが駆け抜けた。

店の目の前には二体の鬼が居る。

截は真下にいる鬼に止めを刺すことを諦め、その鬼の体をマットのようにして前方へと転がった。顔を上げると同時に店の中に居た髑髏鬼と目が合う。

——不味い！

そう思ったが、髑髏鬼は截よりも目の前にいる店員の方が狩り易いと感じたらしく、あっさりと視線を逸らすとその店員にのしのと近付いていく。店員は截に気がつき、助けを求めるような視線を送ってきたが、二体の鬼から今すぐにも亜紀たちを守らなければならぬ以上、彼を助けるわけにはいかない。

截は歯を噛み締め、心の中で彼に対する謝罪の言葉を述べながら、視線を外し亜紀たちと、それに引き付けられた鬼の後を追った。

ホールを走り出してすぐに店員のものと思われる絶叫が響き、その声が強く自分の心を締め付ける。

一階ホールを歩き回っていた鬼や髑髏鬼たちは、目の前を走りぬける亜紀たちや截に気がつく、嬉々としてその後を追いかけて始めた。

生存者たちの中で一番後ろを走っていた夏に狙いを定め、一体の鬼が跳躍する。が、横を走り抜けられたあとに夏に気づき彼女を襲おうとした別の鬼が右から飛び出したため、その鬼は飛び出した鬼とぶつかり地面に転がった。その際、店の前から亜紀たちを追っていたもう一匹の鬼も巻き込まれ速度を落とす。

截は彼らの間を何とか走り抜けると、最後尾にいた夏の横へと辿り着いた。

「頑張れ！」

そういつて青い顔で前の集団から僅かに遅れていた彼女の背を押す。それに励まされたのか、夏は自分に気合を入れなおすと、力を

振り絞るように足を動かした。

この逃走集団の先頭を走っていた亜紀と千秋はホールを抜け「憩いの広場」へと到達した。

一時間前までは多くの客が弁当やペットボトルなどを手に握りこの広場で休んでいたのだが、今は尋常ではない量の血が広がるだけで死体の姿しか見ることが出来ない。

亜紀は強すぎる血の臭いに吐き気を催しながらも、必死にそれらの凄惨な亡骸から目を逸らし、走り続けた。

このまま真つ直ぐに行けば第二出入口へと繋がる長い廊下と、その前にあるスポーツ良品店区域に入るのだが、亜紀たちが憩いの広場を抜ける前に向かいから数体の鬼が物凄い勢いで駆けて来たため、その逃走ルートはいきなり消えた。

「亜紀ちゃん、あそこ！」

憩いの広場の側面にある窓ガラスは全て高い位置にあり、広場の隅にある梯子を昇ることでの開け閉めやカーテンの操作を行える。千秋は前後に現われた鬼から逃げるために、その梯子を指差し、進むようにと支持を出した。

広場の両端から無数の鬼と髑髏鬼が迫ってくる。それを見て截は舌打ちした。前にはまだ多くの生存者がおり、とても自分が梯子に辿り着くころまで鬼が待っていてくれるとは思えない。

「——こっちだ！」

梯子は第二出入口側の通路口を挟んで二つある。截は前を走っていた数人に声をかけると、亜紀たちが昇ったものとは逆の方へと走り出した。僅か一メートル付近まで迫った鬼の合間をぎりぎり駆け抜け梯子に手を付く。昇りながら後ろを振り返ると、自分に付いてきた人間はたった二人であり、ついてこなかった者たち、先に向こうの梯子を昇りきった二三人以外の生存者は全て鬼に捕まってしまうていた。

「助けてっ！」

足先を無数の鬼の腕が霞め、夏は目に涙を浮かべて叫ぶ。截とも

う一人の生存者が彼女を持ち上げた途端、その足があつた位置を髑
髑鬼の腕が通過した。

「梯子を外すぞ——！」

鬼は梯子を昇るといふ行動を理解しているのか、夏が上に上がる
と同時にその手すりへと手を伸ばす。それを見た截ともう一人の男
は、壁際に背を付くと、仰向けに寝るような格好で梯子の上を蹴つ
た。

「ザアアアアアッ！」

その間もゴキブリのような物音を立て鬼が梯子を昇ってくる。截
たちはいつのまにか自分が蹴っているものが梯子なのか鬼の頭なの
か分からなくなっていた。

もう梯子を外す事は無理だと諦めかけたとき、下にいた数体の髑
髑鬼の一匹が梯子に手を付き、引つ張った。昇ろうとしたのかは分
からないが、その強烈な力で留め金が大きく歪み、梯子が揺れる。

——取れる！

最後に截が渾身の蹴りを突き出すと、ぶら下がっていた鬼の重み
が助けとなり、梯子は外れた。

「やったー！」

一緒に蹴りの雨を繰り出していた男が嬉しそうに大きな声を出す。
亜紀たちのことが気になった截は素早く目を反対側の梯子の上に向
けたが、幸いなことにその梯子もしっかりと外れていた。どうや
らこちらと同様、無理に昇ろうとした髑髑鬼の力でネジが外れたよ
うだ。随分綺麗に分解されていた。

熱狂している格闘技ファンのような鬼の熱い吐息と声が真下から
響く中、店から出てきてやっと呼吸することが出来たように、截は
深く息を吐いた。

「——危なかったな。あんたがこっちの梯子を見つけなきゃ、今頃
どうなってたか分からなかったよ。助かった」

横に寝ていた生存者の男が苦笑いとも微笑みとも取れない奇妙な
笑顔で礼を言う。どこにでもいそうな普通の、気のよさそうな中年

の男性だった。

「いえ、こちらこそ助かりました。手伝ってくれてありがとうございます」

自分一人の力で昇ってきた鬼を全て蹴落とすことなど出来なかっただろう。お互いに命を救いあったようなものだ。截は本心からそう言った。

「俺は長島春道。ながしまはるみち孫の誕生日のプレゼントを買おうと思ってここに来たんだけどな。参ったよ」

長島は手を出しながらそう言った。

「已名截です。僕のことは……先ほど説明しましたね」

「ああ、あんときは正直俺もあんたのこと怖かったんだが……まあ、今はそんなこと思っていないから安心してくれ。命の恩人だしな」

握手を交しながら、躊躇いがちに笑う。ほんの僅かな時間彼と会話すると、截は立ち上がり、向かいの生存者たち、といっても亜紀と千秋と見知らぬ男の三人だけなのだが、彼らの方に向き直った。

「そっちは大丈夫ですか？」

片手を口の横に当て、声が良く響くように導きながら尋ねる。

亜紀は何も話す事が出来ず、男は截を怖がっているようだったのだ、千秋がそれに応じた。

「大丈夫です。——これから、どうします？」

良く通った声でそう聞く。截はしばらく考えた後に、こう答えた。「この様子だと、警備員やこの関係者は僕たちの救助をする気は無いみたいです。だから、こちらから彼らがいる場所に出向いて保護してもらおうと思うのですが、どうですか？」

イミユニティー隊員である千秋には願ってもない答えた。もう截がデイエス・イレ側だという考えは殆ど薄れていた彼女はすぐにそれに同意した。

「分かりました。それじゃあ、まずはこっちに来て下さい。詳細を話し合いますよ」

そう、大声で言う。

この窓の前にある通路は丁度カタカナの「コ」の字に設置されており、足伝いに千秋たちの場所まで移動する事が出来る。それに今初めて気がついた截は、ここから大声で話し合いをしようとしていたことが恥ずかしくなり、僅かに顔を伏せた。もつとも、その表情は包帯が邪魔し誰にも見えないのだが。今更被る意味もないかとフードをそのままにし、截は歩き出した。

長島と、僅かに狂気を持った目を向ける夏を連れて。

<第四章>かくれんぼ

目を瞑り意識を深い闇の中に沈ませると、六角行成の瞼の裏におぼろげな映像が浮かんだ。

暗い暗い通路。見た目からしてこの常世国の地下にある古い水路だろうか。得体の知れない物体があるということで調査隊が送られたという話を聞いた記憶がある。

不意に足音が聞こえた。

カメラのレンズを移動させるようにそちらを向くと、紺色の服を着た数人の男たちが走ってきたところだった。

しばらく進むと、彼らは水路の通路と、中心に流れる水の中に数体の人間の死体を見つけた。残念そうに顔を伏せる。

六角はその死体たちが調査隊のものであることをすぐに見抜いた。どうやらこの隊員たちは戻らぬ調査隊の安否と、脱出ルートの確認をかねてここにやってきたようだ。無線機で連絡を終えた彼らはそのまま先へと歩みを続けた。

地震というのだろうか。急に大地が、周囲の万物全てが震えた。

足元をふらつかせどよめく彼らを他所よそに、水中が大きく盛り上がる。その水の山は咆哮のような声をあげると、水路を覆い尽くすような巨体となり彼らを飲み込んだ。

波が収まった後、紺色の服を着た男たちの姿は完全に消え、残ったのはただ赤く染まった水路の水だけだった。

六角は目を開けた。

「あ、もうお目覚めになられたのですか？」

部屋で待機していた秘書の女性が椅子に座ったまま声をかける。だが、六角は彼女の言葉を見無視し、ぶつきらばうに尋ねた。

「地下水路の調査隊とやらはどうなっている？」

いきなり「クワツ！」と目を見開いたと思ったら、場違いな質問をされ、秘書はたじろいだ。

「え……調査隊ですか？」

「そうだ。もう戻ったのか？」

「いえ、派遣したつきり帰ってきていません。こちらで騒動でごたごたしていましたから、彼らのことを気にしている暇ありませんでしたし……万が一のために先ほど警備主任の中崎が救援部隊を送ろうかと話していましたが……」

「止めさせる。送るだけ無駄だ。どうせ全滅する」

「え、どういうことですか？」

「地下に巨大な感染生物が居る。ディエス・イレが放ったのだろう。万が一僕たちがあそこから逃げれば、奴のエサになってしまう」

六角が超感覚者であることを知っている人間はごく僅かだったが、この女性には秘書ということもあり、そのことを理解していた。

「——分かりました。中崎に中止するように指示してきます」

そう言って部屋から立ち去ろうとする。

「あ、待ちたまえ」

「何でしょう？」

「例の増援部隊の方はどうなっている？ もうこの常世国に向っているのか」

「はい。先ほど編成を終え、出発したそうです」

「どんな奴らなんだ？ 頼りになるのか」

「心配ありません。多くの実績を持った者や、六ヶ月前の水憐島事件で生き残り、横谷晶子の暴走を食い止めた隊員が居ます」

「横谷晶子……ああ、あのお嬢さんを殺したという男か。名前は何だったかな？」

自分の元腹心であり、先代代表の娘。水憐島事件の犯人。そんな彼女を倒した男ということで、六角は興味を引いた。秘書は淡々とした口調で答えた。

「国鳥友こくどりゆうという男です」

目の前の死体が、いや、正確には怪我人でありまだ生きているのだが、とにかく殆ど死んだといっても違いの無いほどの大怪我をしていた男が、立ち上がった。

テーブルや椅子、移動式のキャビンで形作られたバリケードの裏。そこから彼の様子を見た唐沢は舌打ちした。

「くそ、また一人『治療』されたか」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、頭を抱える。

「唐沢、もう駄目だ。対策本部に助けを求めるべきだ」

同じようにバリケードの裏に隠れていた住岡が諦めたようにそう言った。

「呼んでどうする？ さっきの二の舞になるだけだ」

地下から脱走した研究体を捕獲するためにこのパーティー会場へと集めた殆どの警備員は、既に死亡していた。バリケードを作り、いざ研究体を迎え撃とうとしたとき、鬼の襲撃を受けたのだ。パーティー会場の出入口は封鎖していたにも関わらず、髑髏のような姿をした鬼が扉を引き千切り侵入し、それをきっかけに多くの鬼が入ってきた。研究体がここに到着したときにはもう殆どの警備員が大怪我を負い、とても戦えるような状態ではなかった。

今はその鬼たちも研究体の発する強烈な気配に気圧され、とつくに姿を消しているのだが、鬼たちに「怪我」を負わされたという事

実が最大の危機を招いていた。何故ならば、その研究体は怪我の「治療」をすることで力を発揮するのだから。

唐沢は言葉を続ける。

「それに、下の連中も脱出のことで頭がいっぱいのはずだ。俺たちや「彼女」に構っている暇なんて無いだろ」

「だ、だけど……俺たちだけでどうやってあれを止めるんだよ。もうどうしようもないだろ？ いっそ俺たちも下に逃げようぜ」

「それは不味い。彼女が出てきた穴をつたって多くの鬼が下に行つた。ここから降りればその鬼たちに食い殺されることは目に見えているし、何よりも彼女をこのまま放っておけば『感染者』が増える。常世国の中にはまだ無数の怪我人がいるだろうからな」

「でもよ……」

「彼女の近くにいることで俺たちは鬼の襲撃から逃れているんだぞ？ 離れれば鬼は喜んで襲つてくるはずだ」

「じゃあ、ずっとこうしているのかよ。どっちにしろあれは『治療』するために怪我人を探してここから出るはずだ。いちいちその後に着いていくのか？」

かなり混乱しているようだ。住岡は自分の頭を血が出そうなくらい強く掻き^{むし}つた。

「一番良いのは鬼がこの会場へ来る事を食い止めた上で、彼女を閉じ込めることだ。最悪の場合は殺すという選択肢もある。まあ、その場合は俺らの身も鬼の危険に侵されることになるだろうけどな」

「殺す？ 俺たちのこれまでの研究を無駄にする気かよ！」

「良く考える。実験のデータは全て残っているんだ。被験者さえいれば何度でも彼女を作り出すことが出来る。大体このまま彼女による感染者が増えれば、研究事態が出来なくなる危険があるんだぞ」

それこそが自分たちの全てを無駄にする。これまでの研究も、献体となってくれた彼女の意味も。

唐沢は六角や上の人間が彼女を「危険物」だと判断する前にこの状況を終わらせる必要があつた。

「誰か……彼女を倒せるくらい強力な人間が居ればいいんだが……」

集めた警備員や増援に駆けつけたイミューニティーの隊員の多くは死亡したか、既に彼女によって「治療」を受け感染してしまっている。生き残った者たちも自分のように隠れているか、下に逃げているってしまった。これ以上被害を出さないためにも、研究を無駄にしないためにも、唐沢は怪物退治のスペシャリストが必要だと感じていた。

「お、俺は反対だ……！ あいつを殺せるわけねえし、ここに鬼が来ないようにするのがだって不可能だろ？ 殺した瞬間、外や下から鬼が現われる……」

「そうだな……でも、俺たちには彼女を作った責任がある。彼女の存在を後世に残すためなら、俺は鬼に食い殺されることになっても構わない。ここの封鎖が無理なようだったら、潔く彼女を殺して俺も死ぬさ」

迷いの無い目で唐沢は言った。

「い、嫌だ……俺は死にたくない。そんなのごめんだ。絶対にやらせないぞ……！」

住岡は下に転がっていた隊員の死体からナイフを奪い取った。

「おいおい、何をする気だ？」

あまりにも馬鹿な彼の行動に唐沢は呆れた表情を浮かべる。

「お、お前を傷つければあいつはここにやってくる。そうすれば、お前ももう隠れるなんて真似は出来なくなるはずだ」

「それで俺が下に逃げるとでも思っているのか？ 確かに俺に引かれて彼女も着いてくるし、それで鬼は近付かないだろうが……例えばどんな怪我を負わされようと、俺は研究を無駄にするような真似はしないよ」

「だ、黙れ！」

住岡はナイフを両手で握りしめた。

「やりたければ勝手にしろ。どっちみち俺は死ぬ気でこの事態を収めるつもりだったんだ。俺を傷つけて気が済むのならどうぞご自由

に」

両手を左右に広げ、唐沢は挑発する。

住岡は混乱しているのか、パニックに陥っているのか、奇声をあげると真っ直ぐにナイフを突き出してきた。

「うあああああああ！」

唐沢はそれを半身にかわすと住岡の背を強く押し、壁に叩き付けた。「ドン」という音と共に、住岡の胸が壁に密着する。

「俺が元タイミユニティーの隊員だったことは知っているだろ。アホな真似はするな」

耳元で唐沢が呟く。住岡は悔しそうにギリギリと齒軋りしていたが、不意に何かに気がつき、絶叫をあげた。

「あつ——ああああつ、そんな！ 待ってくれよ、なんだよおお！」

唐沢が彼の体から腕を放すと、壁に押し付けられた時に刺さったのか、住岡の太股からはどくどくと血が流れ、そこにナイフが垂直に立っていた。

「——やっちまったな……！」

冷や汗を流し、唐沢がそう呟いたとき、二人の隠れていたバリケードの前に大きな影が刺した。

それは優しい微笑みを浮かべながら住岡を見つめると、盛大な、オーケストラのような響く声で高らかに鳴いた。

「ホロオオオオー！」

「うつ——!？」

強い脅威の存在を感じ、截は額ひたいを抑えた。
今この瞬間、何かが物凄く喜んだような感じを覚える。

「どうした？」

長島が急に足を止めた截に不思議そうな目を向ける。截は手を離し、顔を上げるとなんでもなさそうに答えた。

「ちよつと……眩暈がしただけです。大丈夫」

「そうか、気分が悪かったら言ってくれよ。このオッサンが優しく介抱してやるぞ」

「それなら彼女たちにしてもらいたいですね」

軽く笑いながら、截は前を歩く三人の女性の方を見た。

亜紀、千秋、夏は楽しそうには言わないまでも、同じ境遇にあったためかなり心を開いたように仲良くしている。

「オッサンの懐の暖かさを舐めるなよ。俺の胸は安心するって女の子たちに評判なんだ」

「男に評判があるんだつたら今すぐにここから離れさせてもらいますよ」

目を前に戻すと溜息混じりに截はそう言った。長島はがっははと笑いながら歩き出す。この天井通路の真下では無数の鬼たちが呻き声を上げ物欲しそうにこちらを見上げているというのに、随分元気なものだと截は内心彼の図太さを褒めた。

自分が始めてこういった事件に巻き込まれたときはあんなに余裕がなかったなどと思いながら、先ほど感じた感覚について考える。

——鬼とは違う感じだった。また大きな何かがいるのか……。あいつらと戦うとろくなことが無い。出来るだけ会いたくはないな。

普通の人間は声や視界に感染者を入れなければ、それ程の恐怖を感じることはない。だが、超感覚者である截は例え聞かなくても、見なくてもその脅威を常に認知し続けるのだ。感じる危機感と圧力に精神力を削がれながら、截はなるべく今感じた感覚の主に会わずに済む事を祈った。

「しかし、すごい数ね。もう生きている人は私たちだけなんじゃない？」

UFOキャッチャーの景品のように五メートルほど下に^{ひし}轟く鬼たちを眺め、千秋はそう呟いた。

「憩いの広場」から天井裏にある作業用の通路を渡り非常用扉を潜る事で、こうして鬼たちの攻撃を受けることなく隣の区域、食品売り場へと移動することが出来た。だが、ここには飲食に係る商品が無数にあるということでもかなりの数の鬼が集まってしまっていた。

「それで、どうやってその警備員たちが居る場所に行けるの？」

千秋は先ほど自分がイミューティーの人間であることをばらしていた。截と亜紀以外はそれを国務に係る何らかの職員なんだろうと判断し、彼女が居れば無事に警備員の詰め所に保護してもらえるのだと受け止めていた。だから夏は当然彼女ならこの構造も知り尽くしていると思い、そう聞いた。

千秋自身は常世国に来るのは初めてではなかったものの、ここに駐在しているわけでも、ここで働いているわけでもないため、内部に関する知識は一般客に毛が生えた程度しかない。夏の頼り切ったような視線に困ったような顔をし、おぼろげな記憶の中から出来るだけの情報を引き出し、答えた。

「このまま食品区域を通り過ぎれば生活用品区域に出て、そこを進めば第三出口に着くはず。でも出口は塞がっているだろうから、警備の人たちと合流するにはこの区域の端にあるパーティー会場に出るしかないわね。確か、会場から地下へ続く非常階段があるの」

「パーティー会場？」

何故そんなものが食品区域にあるというのだろうか。夏は怪訝そうな表情を浮かべた。

「新製品の試食会や、マスコミに対する会見を開くのに使用するらしいわ。出入口からも近いし、けっこう立地としては良いみたい。まあ、そういった場合以外には滅多に使用されないらしいんだけど

ね」

千秋は前にイミユニティーの関係で来た時に受けた話をそのまま伝えた。本人としてはそんな人目につく場所に地下研究所への道を堂々と作ってもいいのかと思っていたが、実際は直に研究所に繋がっているわけではなく、職員たちの管理区画へと続いているだけだった。研究所へ行くにはそのまま管理区画からさらに別の隠し通路を通る必要があり、セキュリティーは万全なのだが、下まで降りてはいない千秋にそのことは分からなかった。

道の先に折り畳み式の梯子が見える。

亜紀たちと一緒にこの天井通路まで逃げた男、麻生雄二あそうゆうじは重大な事実に気がついたようにそれを指差した。

「通路が終わっているぞ！　こ、これじゃあ、これから先は下に降りるしかない……！」

「静かに、鬼に気づかれるわ」

騒ぎかけた麻生を後ろに引つ張り千秋は身を屈める。その直後、梯子の先、生肉が並ぶ陳列棚の奥から赤灰色の塊が頭を覗かせた。声を聞きつけたのか、探るようにしばらくそこから周囲を見渡す。千秋たちは床の上ではなく天井真近の非常用通路の上にいるため、場所までは特定されていないようだ。しばらくうつろつくとその姿は奥に消えた。

自分の白いズボンをぎゅっと掴み、亜紀は不安そうな目を截に向ける。無言の視線が来る度に「バレたのか？」とヒヤヒヤしつつ、截は亜紀と千秋の隣に並んだ。

「どうする？」

截の顔を見て千秋がすぐに尋ねる。信用したからか敬語をやめ、かなり親しげだった。

「あの鬼だらけのホールに戻るわけにもいかないし、ここを進むしかないと思いますよ」

「でも、鬼たちはどうするの？　下に降りて歩けばあつと言う間に囲まれるわよ」

鬼の危険度は尋常ではない。一体何体の鬼がいるのかも分からない以上、千秋はあまり降りることに乗る気にはなれなかった。

降りるという言葉聞き、背後に伏せていた麻生がヒステリックに叫ぶ。

「はぁ、降りる！？　ざけんなよ、俺はごめんだ！」

截はそれを完全に無視し、話を続けた。

「奴らの数は大体五匹つてところですね。うまく立ち回れば一匹とも会わずに向こうの両扉まで行けるはずですよ」

「五匹？　何でそんなことが分かるの」

「黒服で培った勘つちかですよ。信用して下さい」

それ以上聞いても教えてくれそうにはない。千秋は截が鬼の数を見極めた理由の詮索を諦め、話を続けた。

「確かに戻っても行き止まりだし、他に道もないけど……到底上手く行くとは思えないわよ。どうやって五匹の鬼をかわす気？」

折角パーティー会場につけても鬼に追われていては意味が無い。走る速度も圧倒的に向こうの方が速いし、何よりパーティー会場から地下へ続く道に鍵が掛かっているれば、出入口を鬼に塞がれる格好となってしまう。安全に、確実にイミニティーの詰め所に辿り着きその保護を受けるためには、鬼の注意が自分たちに向いていないことが必要不可欠だった。

「そうですね……考えられるとすれば、要所要所で鬼の注意を逸らすってことですか。物音や囃子を使って」

「それってかなり難しいと思うけど」

千秋は顔をしかめた。困難な行動に困っているというよりは鬼が居る場所の中に入りたくないようだ。その躊躇ぶりから截は何故彼女が亜紀の護衛をやらされているのか理解した。

バイオハザード時においてもっとも重要となる力は生存力。細かく分ければ、判断力、決断力、分析力、対処力、応用力などのことだ。危機迫る場所でじつくりと物事を考えている暇なんて無い以上出来るだけ短時間で正しい、有効性のある判断を下せる者が長く生

き残ることが出来る。千秋は今咄嗟に答えを出すことが出来なかった。もし感染者を目の前にした状態でこんな行動をとれば、彼女はすぐに大怪我を負うか死ぬ事になるだろう。事実、水憐島事件で起こした判断ミスにより彼女は任務続行不可能になるほどの傷を受けていたのだが、截はそんなことは知らない。

「とにかく、進むしかないんだ。あなた方が賛同しないなら俺は一人でもやる。さがって下さい」

勿論截にそんな気はない。亜紀を助けるためにここに残り、こうして行動を共にしているのだから。イミユニティーの隊員なら黒服の実力も知っているはずだ。自分の判断力と戦力を失う事の損を千秋なら分かると思い、截はそう言った。

「わ、分かったわよ。ちよつとまって——！」

案の定、千秋は截の腕を掴み引き止めた。

「本当に出来るんでしょうね」

「出来る出来ないじゃなくて、やらないと死ぬんです。あなたもイミユニティーの隊員なら甘えたこと言っていないで、自分の力でここから出ることを考えてください」

——まるで俺が昔キツネに言われた言葉そのままだな。

思い出したくない顔が浮かび、陰鬱な気持ちになりながらも截は千秋から目を逸らした。当然、その横に居た亜紀の方へと顔が向く。今の言葉を聞いたからだろうか。亜紀は眉を寄せ、何かを怪しむような、疑問に思っているような、そんな顔を截に向けた。少し茶色っぽい目を大きく開いて、まじまじと見つめてくる。

——この人……よく見ると悟くんに似てる？

ようやく気がついたのか心の中でそう呟き、不審者を見るように怪訝そうな表情を浮かべる。

見つめられていることと後ろめたさから動揺し、截は梯子の方へと体ごと向きを変えた。

そんな截に後ろの方に居た長島が声をかける。

「降りるならさっさと降りよう。こんな狭いところに六人もいちゃ、

暑苦しくて堪らない。俺としてはこうしてじっとしている方が何だか怖くて落ち着かないぞ」

逃げていれば逃げているという実感がある。長島は一定位置に留まっている事で、いつ鬼が自分たちに襲い掛かってくるかも分からないといった恐怖を感じていた。

「そうですね……それじゃ、行きましょう」

気を持ち直し、截は真剣な表情を浮かべる。

今は動揺なんかしている時ではない。亜紀の命が、ここにいる五人の命がかかっている。まともに感染者と戦えるのが自分しかない以上、心の乱れはすぐに死に繋がる。そう、自分に言い聞かせた。感覚を活かし鬼の存在を確かめながら、一步一步慎重に梯子を降りる。かなり古い梯子なのか、足を乗せる度にギシギシと地味にうるさい音を響かせた。

截が降りると順に、千秋、亜紀、夏、麻生、長島と続く。全員が完全に床の上に足を着けたのを確認し、截は腰を落として歩き出した。

ここからパーティー会場へと続いている両面扉までは、丁度食品売り場を横断し左斜め前に直進する必要がある。だが、中央付近からは二体の鬼の気配を感じていたため、敢えて截は右側から壁沿いに進むことを選んだ。

心細かったからか、不安だからか。小走りで移動すると、夏は截のレインコートの腕の部分を掴み、強く握りしめた。截は最初こそ躊躇ったが、それで気が紛れるならばと何も言わずそれを認める。何となく亜紀の視線を気にしつつも、慎重に歩行を続けた。

緊張からか、恐怖からか。どくどくと心臓の音が耳に伝わる。

これほどの恐怖を感じたのはいつ以来だろうか。

とつくに自分の中から消えていたと思っていた気持ちの再来に戸惑う。

何故これほど怖いのか分からない。

これまでも危険な目には何度も遭った。何度も死に掛けたし、

大怪我も負った。でも、こんな気分になったことはない。

仲間が居ないからだろうか。

自分の責任が大きいからだろうか。

いや、そんなことは関係ない。理由は一つしかない。

亜紀だ。

彼女が居ること、彼女の身が危険にさらされていることで、それを失うことに対する恐怖が沸き起こる。

幸せとは言わないまでも、彼女の身は保障されていた。安全だと分かっていた。

だから、既に手を血に染め、いつ死んでも構わないとまで己の運命を覚悟していたのに、それが彼女がこの場所に出現したことで揺らいでしまった。

このメンバーで自分が死ねば、ほぼ確実に他の人間も死ぬことになる。鬼に食われる、感染することになる。

だから死ぬわけにはいかない、守らなければならないと、その責任が、自分の身と亜紀の身に対する役目が、まるで一般人だったときのように大きな恐怖を感じさせていた。

鬼の気配を北西の方角に感じ、截は足を止めた。合わせるように後ろの面々もじっとする。

「左斜め前に鬼が一体居ます。僕が注意を引いて右に移動させるので、その隙に進んで下さい」

「分かった」

千秋は小さく頷くと、様子を伺うように身を屈めた。

今彼らが居る場所は丁度生鮮食品が並ぶ陳列棚の前。截が鬼の存在を察知した場所はこの食品売り場の北の右端、その一歩手前に位置する。鬼を右に動かせば北の左端にある両面扉まで一気にいけるはずだ。

——問題は、気づかれたら終わりということか。

追ってこられても、逃げ先である両面扉を特定されてもこちらの負けだ。もし見つければ全滅するしかない。無事にパーティー会場

まで行くには「認知」されずに鬼の注意を引きつける必要があった。正確に言えば気づかれずに、かつ追われずにことを成し遂げる方法はもう一つある。鬼を物音を立てないで各個撃破すればいいのだ。だが、それは無理な手だと截には分かっていた。

あの鬼の知能は人間ほどとは言わないまでも、純イグマ細胞感染者よりは遥かに高い。戦闘可能な仲間が居るのならまだしも、たった一人で手際よく鬼を殺せる自信など截には無かった。

千秋たちを左へ移動させ飲料水が収納された棚と棚の間に隠す。そして自分だけはそのままその場所に留まり、手に付近に設置されていた台から取ったキャベツを握った。

——上手く引っかけよう。

そう願いながら滑らせるようにキャベツを転がす。それは歪な回転を描きながら食品振り場の最北端の壁に当たると、「コッソ」という音を僅かに鳴らした。

この場所からでは鬼の様子は分からない。音に気がついていればこの先に姿を見せるはずだ。

截はキャベツ台の裏に伏せながら鬼が現われることを願った。

「ザアアアア……」

波のような声が聞こえる。どうやら注意を引きつけることに成功したらしい。その声は段々と近づいてきた。

何故か千秋たちの方へと。

——何でこっちに来る！？

千秋は下唇を噛んだ。

どういつわけか真っ直ぐに右に移動するはずだった鬼がカーブを描き、食品売り場の南方向、自分たちが潜んでいる場所へと向ってきたのだ。

「くそっ……！」

身振りで後ろの四人に下がるように指示を出し、自分も一步一步その場から離れようとする。だが、それを後ろから亜紀が止めた。

「待って」と言うように肩を押さえる。

鬼は千秋たちが隠れているワンスペース前、十字路のようになっている別の棚の間を曲がると、截が居るキャベツ台の方へと進んだ。
——転がったキャベツじゃなくて、転がった元である台の方が気になったのか。何てうざったい……！

中途半端に頭がいい鬼の動きに怒りを覚えながらも、千秋は後ろを振り返った。

「行くわよ」

辛うじて聞こえるような声でそう言う。

まるで鼠のように、斜めに歩行する蟹のように、千秋たちは左へと歩き出した。

「ザアアアアア——」

鬼の吐息が真後ろで聞こえる。

截は鬼の存在を感じてすぐに北に進み、キャベツ台から離れ先ほど鬼を誘導する予定だった位置へと逃げていた。

「あ、あぶねえ……」

危機一発のタイミングで姿を隠したため、ほっと自分の胸を撫で下ろす。

誰かが転がしたというまでの考えには至らないのか、鬼は不思議そうにキャベツを手の中で転がした。

その隙に截は千秋たちと合流するため左へと進む。もう両面扉まではずぐだ。自分の直線上に鬼の姿は無いし、残り四体の鬼も左端に二体と、中央に二体いるだけ。無事にここから出れる。そう思ったときだった。

「あつ——！」

一つの不安が頭を過ぎる。

確かに元々の予定通りなら、千秋たちは両面扉まで簡単に行けた。だが、鬼がキャベツ台へと向ったため、本来ならばその鬼が通ってきた道を進むはずだった千秋たちは、鬼を避けるために真っ直ぐに中央付近へと進んでしまった可能性が高い。もしそうなら二体の鬼と鉢合わせすることになる。

事前にある程度の鬼の位置は感覚で知り、千秋に教えているものの、まだ未熟な彼女のことだ。恐怖でそれを忘れてしまっているということも十分にありえる。

截は肌寒いものを感じ、音が響かない出来る限りの速度で走った。自分に向って列をなすように横に広がった棚々の隙間に、焦りの色が浮かんだ目を走らせる。しかし亜紀や千秋たちの姿は見えない。――どこに行ったんだ？

截は嫌な予感をヒシヒシと感じながら、機械的な作業のように次から次へと棚の合間を覗いた。

もし鬼に襲われたのなら悲鳴や物音が聞こえるはず。それが無い間は無事である証拠だ。鬼よりも先に彼女たちを見つける必要がある。

前方に両面扉が見えてくる。とうとう食品売り場の左端まで来てしまったらしい。截は足の速度を落とした。再び左斜め前の方向、丁度食品売り場の中央から見て真西の方角に鬼の存在を感じる。二体いるはずだったそれは、何故か一体だけに減っていた。

もう一体が別の場所へと移動したことを知った截は、さらに焦りを募らせた。

付近にから感じる鬼はこの左斜め前の一体のみ、ということは先ほどやり過ごした鬼も含めて最悪中央には四体もの鬼が集まる可能性がある。そうなければいくら千秋だろうと身を隠し続けることは不可能だ。

「仕方が無い――か……」

こうなれば一刻の猶予も無い。截は亜紀や他の生存者を守るために、鬼に自らの身を晒し注意を引きつける覚悟を決めた。

正直とても生き残れる気はしなかったが、それで亜紀たちに向く鬼が居なくなるのなら上々だろう。どっち道このままでは彼女たちは見つかる。この先はパーティー会場、イミュニティーの施設へと繋がる道。運がよければそのまま助かる可能性も無くはない。

腰に納めていた二本のナイフを引き抜いた。「ギーン」という

行くぞ……！

後方、南西から微かな足音が聞こえた。鬼にしては数が多い。截がそちらに目を馳せると、緊張しきつたような顔をした千秋たちが駆けて来るところだった。

「ザアアアアアアー！」

だが、こうなると自分たちの取れる選択肢は僅かしか無くなってしまった。もはやパーティー会場から研究所へと続く道が開いていくことにはかけるしかない。

一メートルほど背後を鬼の爪が掠める。^{かす}

そう確かに、「危機をもたらす状況」ならば――

88

<第四章>かくれんぼ（後書き）

截が包帯で自分の正体を隠すことは、何か無理やり感が強いような気がします。もしかしたら、今後書き直すかもしれません。

<第五章>死の治療

両面扉の先は細い通路となっていた。そのまま扉から出て左にある道と、真っ直ぐに続いている道に分かれている。

——こっちは確か第三出入口へと続いているから、行き止まりのはず。

千秋は記憶を頼りに正面に進むことを選んだ。走っているとすぐに別の両面扉が見えてくる。

「あそこを潜ればパーティー会場よ、みんな急いで！」

追って来ている三体の鬼の位置はほぼ真後ろと言ってもいい。まさに最後の賭けだった。

先頭を走っていた麻生と亜紀が体当たりするように扉を開ける。

そしてその直後に千秋たちが続いた。

「うわ、すげ……！」

入ってすぐに麻生が驚きの声をあげる。

会場の中には何故か大きな穴が二つ作られていた。中央の床と右側の壁が盛大に吹き飛び、灰色の煙がもくもくと上がっている。

「あそこ！」

部屋のかい側にある非常用扉を指差して夏が叫ぶ。地下施設へと通じている道だ。あの扉が開けば安全な場所まで逃げることが出来る。

千秋はすぐにそこに向って駆け出したが、あと少しというところで邪魔をされた。四足になって走っていた鬼の一匹が、海を割るようにして生存者たちの間を飛び抜けたのだ。

「ザアアアアア……！」

その鬼は扉の前に着地すると、舌なめずりをしながら振り返った。

——くそ、どうすればいいんだ？

このままでは万事休すだ。二本のナイフで鬼たちを牽制しながら
截は打開策を必死に考えた。

「んあ？ な、何だあいつ！？」

きよろきよろと周囲を見回していた麻生が大きな声をあげる。截
がその視線の先を見ると、会場左側から数体の影がこちらに向つて
いた。

薄茶色に染まった肌。全身から生えた棘とその先から伸びた糸。

何かしらの感染者なのは明白だ。

「こんな時に……！」

これ以上の敵はカバーしきれない。截はごくりと息を呑みながら
亜紀を背に隠した。その様子を目ざとく夏が見ていたが、感染者た
ちに注視している截は気づかなかった。

「ホロロロオオオ……」

梟ふくろうのような声で鳴くと、彼らは散らばっている丸いテーブルを押
しのけ、真っ直ぐにこちらに向つて来た。

「何だよ、あのサボテン人間は！？」

頬を引きつらせながら長島が呟く。

彼らが近付いてくることに截は奇妙な感覚を覚えた。

——何だ？ 鬼の存在ははつきりと感覚で分かるのに、こいつら
は……認識しているのに何も感じない……！？

よく見るとそのサボテン軍団は自分たちではなく鬼の方へと向つ
ているようだ。距離が狭まるに連れて鬼たちは壁際にさがっていつ
た。

理由は分からないがこのチャンスを逃す手は無い。千秋は素早く
非常用扉まで駆け寄ると、ノブを掴んだ。だが、いくら引いてもそ
れが下に降りることは無かった。

「開かない！ 鍵が掛かつてる」

「そこから行けないのか？」

麻生が会場の中央に開いている大穴を指差す。截はその下から無

数の鬼の気配を感じ取りつた。

「駄目だ、鬼が居る！ それに床までの距離が遠すぎます。無理に降りれば骨折しかねない」

「じゃあ、こっちなかないな——！」

他に手が無いと思ったのだろう。長島が一直線に会場右の壁に開けられた大穴を目指し、走り出した。

「ちょ、長島さん！」

状況から考えれば床から出た「何か」がその壁の穴を作り先へ進んだこととなる。千秋は進むことを躊躇った。

「行くしかない——！ 大丈夫です。あっちの方からは鬼の気配はしない」

感覚を頼りに截が言う。

黒服の言うことだ。仕方が無く千秋はそれを信じることにした。

「ザアアアア！」

ふらふらと歩いてくるサボテン人間に痺れを切らしたのか、鬼たちは自分の方から彼らに飛び掛った。首を引き裂き、肉を抉り、齒を突きたてる。

しかし、サボテン人間たちはただ突っ立っているだけで何もしようとはしない。人形のように鬼の攻撃を受けている。

その光景を不気味に思いながらも、亜紀は駆け出した。前方から千秋の声が届く。

「亜紀ちゃん、早く！」

穴の中を通り抜け反対側の場所に出ると、そこは最初のホールと瓜二つの場所だった。丁度二階が一階、一階が地下一階になったような間取りだ。奥の方にはシャッターが降りている。店のようなものは無かったが、代わりに全く同じ構造を持った部屋が各階の壁際に並んでいた。

「倉庫街？」

横で千秋が呟く。

どうやらあの奥に見えるシャッターは外の駐車場に続いているよ

うだ。トラックを横付けするためのものなのかもしれない。そんなことを考えていると、亜紀は地下一階に見える大きな扉、正確には扉自体は吹き飛んでいる場所から、何かが飛び出たのを見た。人間のようだ。自分の片腕を抑えて何かから逃げるように走り出てくる。「みんな、伏せろ」

それを見た瞬間、反射的に截がしゃがんだ。亜紀たちも釣られるように身を屈ませる。背後を警戒してか良く見える場所を確保するためか、截は皆を連れてそのまま右へ移動した。丁度端まで来ると同時に声が聞こえる。

「く、来るなあああ！」

転がっていた死体に足を取られ、男は転倒した。鼻を強く床に打ちつけたらしく、そこからは血の雫が垂れている。服装から判断するに警備員のようだ。

——何かから逃げている？ 何の存在も感じない。……人間か——？

截が観察するように視線を向けていると、それに答えるかのようには先ほど男が出てきた場所から無数のサボテン人間が現われた。皆一様に男を見つめ、腕を伸ばしている。

「何をする気なの？」

手すりにしがみつくようにして夏が呟く。

サボテン人間たちは腕を伸ばし男を拘束しつつも、それ以上の暴力を振るうことはなく、ただずっとそれを維持していた。

このままでは感染するのではないか。亜紀は彼を助けたいと思い、截の腕を引いた。男を指差して拳を前に突き出す動作をする。

だが、截は首を横に振りそれを否定した。

「あれが感染して広がるものならそれを確かめる必要があります。どっち道ここからではもう間に合いません。彼には申し訳ありませんが、犠牲になって貰います」

それを聞いた亜紀は目を見開いて截を睨んだ。

「助けられないなら、彼の死を無駄にしないためにもそうすること

がベストなんです。我慢して下さい」

あまり感情を感じさせない声でそう言う。亜紀は怒ったように目を細めたが、それ以上截に口論する気は無かった。

——似ていると思ってたけど、性格は正反対ね……

冷たい截の横顔を見て亜紀はそんな感想を漏らす。まさか自分が似ていると思った「悟」本人だとは思ってもせず、彼の背にかつて見た黒服の男の姿を被らせた。

この截はあの時の男に良く似ている。雰囲気も、考え方も。自分たちを見捨てて居ない分いくらかマシだろうが、それでも好きになれそうには無かった。

「また何か出てきたぞ」

長島が扉の在った位置を見て小さく叫んだ。

全員の注意が向く中、それは現われた。まるで貴族女性のように優雅な動きで一步一步進む。

大きなスカートを穿いたような下半身。漢字の「円」のような形の胴体と腕。長い薄茶色の髪。そして全身から生えた棘と糸。

どう考えてもサボテン人間の親玉だ。

「何だあの貴婦人みたいのは？」

目の前にいる巨大な存在が理解出来ず、長島の声は震えていた。

「来るなって言っただろおお！」

サボテン人間の輪に囲まれ身動きの取れない男は必死に声を張り上げたが、そんなものをこの怪物が聞くはずも無い。あつと言う間に目の前まで来ると、彼女は優しく微笑みながら両手を伸ばした。

「おおあああつ、ああああつ！」

恐怖に歪んだ男の声が虚しく響く。

長島が貴婦人と呼んだそれは、男が怪我をしている部分。腕と鼻の位置にそつと自分の手の平を乗せた。するとまるでゼリーが溶けるかのように男の体にその手が染み込む。

「あぐごがあがが……！」

鼻を塞がれ息をすることが叶わなくなっただからか、男の絶叫は鈍

い音に変わった。

「ポオオオオオオー！」

貴婦人が高らかに奇声を上げる。同時に、男の体を拘束していたサボテン人間たちが一斉にその手を離れた。

「な、何してんだよお……」

歯をがちがちと鳴らす麻生。

全員が身動き一つせず見つめていると、貴婦人はやっと男の体から腕を抜き取った。

截は男が死んだのかと思ったが、その予想に反して彼は生きていた。

「あああつ！ 畜生おお！」

叫んでいる男の体を見ると、どういうわけか全身の傷が消えており、流れていた血も綺麗にふき取られている。まるで治療されたようだ。

絶望したような表情を浮かべる男をそこに残すと、貴婦人は元の場所、扉が倒れている部屋の中へと戻った。

「どうなってるんだ……？」

感染させるわけでも、殺すわけでもない。ただ治療を施しただけだ。貴婦人の行動理由が分からず、截は首をかしげた。

「ザアアアアアッ！」

壁の穴を飛び越え鬼たちが出現した。サボテン人間たちを殺し終えたらしい。

「まずい……！ みんなこっちに——」

截は一階の中央側、二階を見渡せる位置にある手すりとそこに括り付けられている看板を盾に、皆を奥へと誘導した。鬼はまだこちらの位置を特定出来ないのか、鼻をくくんくと言わせている。

第三出入口は封鎖され、パーティー会場は鬼だらけ。完全に切羽詰まった状況になってしまった。

「——ちよつと待って？」

何かに気がついたのだろうか。千秋が足を止めた。

振り向くと、截はその理由をすぐに理解した。

鬼たちは穴の前に出たきり進んでこないのだ。どうやら貴婦人や無数のサボテン人間の存在を警戒しているらしい。唸り声をあげるだけでその場に留まっていた。

——三本腕のときと同じだな。

一般感染体は本能的に上位感染体を恐れる。そのことを思い出した截は、とりあえずほっと息を吐いた。

「誰だ！？ 一般人か」

突然吹き抜けの空間を挟んだ向かい側から声が響いた。そちらを向くと三十代前半程の男が睨むようにこちらを見ていた。

「他の生存者？」

男のボロスーツを見て夏が目細める。

截たちが何も答えないことを勝手に肯定の意思表示だと判断したのか、男はさらに大きな声でこちらに呼びかけた。

「怪我人は居るか？」

随分と親切な質たちなのか心配そうにこちらを見る。

南側にある吹き飛んだ大穴の前にはまだ鬼が居る。それなのにあれほどの大声を出すということは、奴等がここへ来ないということを知っている証拠だ。「一般人か」と聞いている以上、イミユニテイーの人間なのだろう。その髪形から服装まで全てボロボロの男との対話を、截は千秋に任せることにした。

「大した怪我をしている人間は居ないわ。大丈夫」

「小さな怪我でもいい！ 居るのか、居ないのか！？ 居たら絶対に下へは近付くな」

小さな怪我でもいいとは思議な話だ。よほど治療したくてうずうずしているのだろうか。千秋は多少躊躇いながらも答えた。

「全員打撲程度ならしているわよ。それがどうかしたの？」

「血を流している奴は居ないんだな？」

「居ないって言っているでしょ！」

意味不明な質問の連続で流石に頭にきたようだ。千秋の声に怒気

が籠る。

「そうか、そっちに行く。待ってる」

男は勝手にそう決めると、どこかと足音を立て走り出した。そつとナイフを服の下に隠し截は思考を巡らせる。

下の男の服装はどう見ても警備員のもの。つまりイミューニティーの人間ということになる。ディエス・イレが敵の治療を施すなんて意味のない兵器を撒くとは考えられない以上、あれがイミューニティーの実験物なのは確実だ。男が逃げていたことを考えれば、やはり何かしらの危険があるのかもしれない。一応の用心を心に留め、截は目の前に到着した男を眺めた。

「唐沢だ。——本当に怪我人は居ないんだな？」

「だからそう言ってるでしょ。さっきから一体何なの？」

「ちよつと待ってくれ」

自分から振ったにも拘わらず話^{かかわ}を切ると、唐沢は下に座り込んでいた警備員に声をかけた。

「山田くん、大丈夫か？」

山田と呼ばれた男は空ろな目を上に向けた。

「奴の巣の中の状態を教えてください。時間が無い」

巣とはどうやら貴婦人たちが入っていった部屋のことを言っているらしい。山田は感情の籠らない声で淡々と答えた。

「い、生き残りがあと一人います。残り二人は既に治療されました。あ、あいつ……」

そこでいきなり山田の声が裏返る。

「あいつ信じられませんよ。あ、あなたは怪我さえしなければ大丈夫だと言った。だ、ただあの怪物は怪我人が居ないと思ったら、ワザと俺たちに傷を作ったんだ。おかげで俺ももう……」

「ワザと傷を作った？ 攻撃してきたということか？」

「そうですよ！ あのサボテン野郎たちを使ってる。どうしてくれるんですか。あなたの所為で俺は、俺は……」

山田の瞳からは涙が流れる。唐沢はそれを無視すると、独り言の

ように口を動かした。

「怪我人が居ないと自らそれを作る……そんな本能があつたとは……
……まだまだ実験が必要みたいだな……」

「あ、あなた大丈夫？」

一人あらん方向を向いてブツブツと言っている唐沢が怖くなつたのか、千秋は彼から一歩足を引いた。

「治療と言いましたね。どういうことですか」

怪我、そして治療。これまでの会話から考えると、どうやら治療されることは人間にとって不味いことに繋がるようだ。截は二人の会話の合間を縫うように聞いた。

唐沢がこちらを見る。

「さっきの女性を見たか？」

——女性？ あの怪物のことか？

唐沢のいやに丁寧な呼び方に引つ掛かりを覚えつつも、截はすぐに答える。

「見ました。貴婦人みたいな奴のことですよ」

「そうだ。彼女はここの地下で研究されていた生き物だね。人の怪我を治療する細胞の開発を目的として作られた。怪我をしたり流血して彼女に近付けば、あつと言う間にサボテン人間たちに拘束されてしまう」

「治療しについてことですか？ でも、それだとかっちにとつては何のリスクも無い気がするんですが」

「ただの治療じゃ無いんだ。彼女は対象の傷を自身の細胞で塞ぎ修復する。それで確かに傷は言えるだろうが、怪我人は変わりに体内に彼女の細胞を持つことになる。さっきのサボテン人間を見ただろあれがその末路さ」

「感染ってこと？ でも下にいる人は……」

千秋が口を挟んだ。

「元が医療用として作られた生き物だからな。感染能力はそれほど高くない。潜伏期間が通常の……そうだな。君たちに分かりやす

く言えば、この常世国中に現れた鬼よりも僅かに長い。下にいる山田もあと数分で奴らの仲間入りだ」

「何でそんなものがここに居るの？ 一体イミユニティーの隊員は何をしているのよ」

「君は……『こつち』の関係者か？」

千秋は軽く頷いた。

「そうか。なら話は早い。俺はこの研究員だ。実は、ホールで騒ぎが起きた時と同時に地下でもテロがあった。純イグマ細胞の流出こそ食い止めたものの、その影響で彼女が水槽を脱出してしまった。制御装置にウイルスが流されたらしくてね。担当にはどうしようも無かったそうだ」

「そう……じゃあ、研究所はもう安全な場所ではないのね」

肩を落とす千秋。それを見た唐沢は明るい声を出した。

「いや、確かに一部には鬼の手が及んでいるが、隊員の詰め所は安全なはずだ。先ほど連絡した際に六角代表が指揮を取っていると聞いている」

——六角行成……やっぱりあいつはここに……

截はピクリと耳を立てた。

「安全な場所があるのね。じゃあ、そこまで案内して。お願い！」

一部始終を聞いていた夏が顔を明るくして^{すが}縋る。だが、唐沢は残念そうな顔を作りそれを拒否した。

「申し訳ないが、俺には彼女を食い止めるという役目がある。この人もイミユニティーの隊員のようにだし、そつちに案内してもらってくれ」

「でも、私は詳しくは構造を知らないわよ。パーティー会場の非常階段から出れるの？」

千秋は常世国の職員では無い。当然、詰め所の正確な位置など分かるはずも無かった。

「床に開いた穴を見たか？ 階段の先はあの穴の奥に出るだけだ。確かに管理区画へは繋がっているが、あそこはもう鬼の住家といっ

てもいい状態だ。別のルートから行くしかない」

「別のルートって？」

「生存した隊員たちの收容が終わった以上、各非常階段は全て封鎖されている。詰め所を目指すのなら直接あそこの出入口に行くしかないだろう。連絡で聞いた情報だと、詰め所から一階に伸びている直通階段は封鎖していないそうだ。そこまで行ければきっと保護してくれる。確か、西部エリアにあったはずだ」

「西部エリアって言えば、宿泊関連の区域ね。ここからだとうやうや行けばいいの？」

「どうって……普通に憩いの広場まで戻って西側に移動すればいいんじゃないのか」

「無理よ。食品売り場も憩いの広場も、全て鬼に塞がれてる。他に行き様がないの？」

唐沢は困ったように頭を掻いた。

「俺と一緒に行けるのなら一階の職員用通路を案内することも出来るが、そういうわけにもいかないな。彼女の対処をしなければならぬから」

「案内が必要なほど複雑な構造なのか？」

ずっと黙っていた長島が始めて口を開いた。唐沢がイミュニティの研究を。つまりこのテロや感染者に関係する人間だと分かり、警戒していたようだ。

「別に大したものじゃない。ただ、今は鬼が徘徊しているし、テロの影響で職員用エリアの大部分の電灯がおじやんになったと聞いている。構造や間取りを完全に把握している人間がいなければ、間違えなく迷って食い殺されるだろう」

職員用通路とはこの倉庫街の右上端にある通路のことらしい。截がそこを向くと、電灯が切れ闇が空間を支配していた。この巨大な常世国の中を、しかも電気が消え道筋も分からない区域の中を、案内もなしに鬼を避けながら進むことは確かに至難の技だ。無事に詰め所まで辿り着くために唐沢の存在が必要不可欠なのは間違いない

った。

「あ、おおがああつ——……！」

喚き声が響く。ぎよっとして全員がその方向を見ると、地下一階の床の上で先ほどの警備員がのた打ち回っていた。

「時間か……彼が完全にサボテン人間化すれば、恐らく彼女は新たな怪我人を求めて探索を始めるはずだ。さっき彼から聞いた話だと、怪我人が居ない場合でも自ら攻撃してそれを強制的に作るらしい。行くなら今だぞ」

唐沢の言葉を背景に男の体から無数の棘が突き出る。それが完全に全身を取り巻くと、倉庫街に静寂が戻った。

「あの貴婦人みたいなのを殺せば、あなたも協力してくれるのね？」
ゆっくりと貴婦人の巣に戻っていく元山田、ボテン人間を眺めながら千秋が尋ねる。唐沢は何かを考えるような顔で千秋を見た。

「私もイミユニティーの人間よ。感染者との戦闘経験もある。それに、どう考えてもいつ鬼と遭遇するか分からないあそこの暗い道を進むより、怪我人しか襲わない貴婦人と戦う方が楽だわ。いいでしょ？」

「手伝うつてことか？」

唐沢は確認するように聞き返した。その様子を見ていた截は、何か唐沢が最初から話をこの方向に持ってこようとしていたような気がした。山田の話が正しければ、現在戦闘可能な人間は唐沢ただ一人だ。いくらイミユニティーの隊員だろうと一人で貴婦人を殺すことには無理がある。怪我人を優先的に襲うと言う事実も、それは貴婦人自身に何の危害も加えていない場合での話だ。もし唐沢が既に貴婦人に何かしらの危害を加えた後ならば、きっと彼女は唐沢を優先的に攻撃するだろう。それを紛らわすために、新たな壁を用意するため自分たちを巻き込んだ。截はそんな予感を感じていた。

「何故今のような状況になったんです？」

突発的にそんな質問をぶつける。

「今の状況……というと？」

横からいきなり発せられた質問に戸惑ったのか、唐沢はこちらの意図が分からないというような目を向けた。

「あの怪物が怪我人だけを襲うのなら、警備員たちにここまでの被害は出なかったはずです。それが何故あなた一人だけになるまで追い詰められたのですか？」

「……同僚の一人がへましてね。自分の太股にナイフを付きたててしまったんだ。パーティー会場の壁の穴を見ただろ。あれはその同僚が彼女の体当たりを食らった時に出来たものだ。こちら側に吹き飛んだ彼を救おうとして多くの仲間が傷を負い、彼女の配下となつてしまった」

「あなたも傷を？」

唐沢が怪我をしているのなら、自分たちを利用する必要性に拍車がかかる。截は問い詰めるように聞いた。

「俺に怪我はないよ。運が良かったらしくてね。——どうやら君は俺に疑いを持っているようだな。君もこちら側の人間なのか？」

今度は唐沢が鋭い視線を截に飛ばす。

どうせこれから行動を共にするのなら、自分の正体を隠し切ることは不可能だ。截は今後のことや戦闘時の協力を安易にするためにも所属を明かした。

「僕は黒服です。六角代表の保護のためにここに侵入しました。あなたとは個人的な関係がありまして、直接の依頼を受けたんです」それを聞いた唐沢は驚いたような顔をした。

「ナグルファルか。随分と早いな。どうやってこの常世国に入った？」

「事件後に入ったわけではありませんよ。別件で呼ばれていたところ、偶々（たまたま）この事件に遭遇したんです。尽いていないことにね」

六角が黒服を雇ったかどうかなんて全く知らないが、そういう可能性もありえるはずだ。まして今は二日前に黒服がディエス・イレを壊滅させているという情報があるのだから。

この言葉に亜紀や千秋も表情を変えた。千秋は安堵するような顔を、亜紀は怖がるような顔を、それぞれ浮かべる。亜紀にとって六角行成は悟を、庄平を、小宮を、自分の友人である優子を殺した元凶と言つても過言ではない。そんな人間と親しいという截に親しみを持つことなど出来なかった。先ほど彼が見捨てた山田のこともあり敵意のある目を向ける。無意識のうちに片手を自分の喉に当てていた。

唐沢は完全には信じていなかったようだが、取り合えず納得の素振りを見せた。

「そうか。道理で立ち振る舞いに余裕があるわけだ。君がキツネか？」

「え？」

何故ここでキツネの名が出てくるのか分からない。截は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

それを訝しげに唐沢が見る。

「——まあいい。黒服ならばかなりの戦力になる。俺と取引しないか？」

「取引？」

「そうだ。俺は君の任務にも目的にも興味は無い。ただ彼女を止めることさえ出来ればそれでいい。もし君が協力してくれるのなら、無事に君たちを詰め所まで案内してやろう。勿論望むならその後もな。どうだ？」

願つてもない話だ。元々それ以外に方法はない。唐沢が貴婦人を殺したいのは本当のようだし、自分を黒服と分かっている上で協力を申し立てるのなら、盾や囷として利用される可能性も低いだろう。それに上手く行けば、生存者の一人として地下に潜入することにも繋がる。彼の物言いが多少引っ掛かるものの、截は素直にそれに応じた。

「分かりました。それでいいです。ただし、彼女たちの安全を第一優先事項として下さい」

亜紀たちの方向を指差す。

唐沢は六角を助けに来たはずの截が何故そんなことを言うのか分からないうだったが、口には出さずそれを了承した。

「黒服のわりに随分と優しいんだな。まあ、いいだろう。取引成立だ」

ニツと笑い前歯を覗かせる。

截は無表情でそれを見ると、視線を下へ、貴婦人の巣へと向けた。

腕に刺さる針が痛い。

うじゃうじやと充満しているサボテン人間たちの真っ只中で、住岡は震える体を縮込まらせていた。

ダンボールや金属製の棚が並ぶ部屋は、本来ならば真っ白に塗装されているはずだった。だが、今はどこを見てもサボテン人間の皮膚が目につき茶色にしか見えない。

あの時、唐沢を攻撃しようとして自らの足にナイフを突き立てた直後。

貴婦人が血の臭いに引き付けられ目の前に現われた。

気がついた時には強烈な痛みが腹に生じ、背中を壁にめり込ませながら倉庫街の中へと吹き飛んでいた。自分を助けようとしてこちら側にきた警備員たちがやられている隙について逃げたものの、結局は感染した彼らの手によって拘束され、こうしてこの一室に連れてこられてしまった。

先ほど自分と同様にここに捕まっていた男の一人が逃げ出したが、

どうやらあつさりやられてしまったようだ。丁度今、彼は扉の方から変わり果てた姿で戻ってきている。

「ポオオオオオ……」

その背後には貴婦人が立ち、白衣の天使のような笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「つ、次は俺かよ……！」

体に力を入れるも、左右にいるサボテン人間が腕を掴んでいるため動くことが出来ない。貴婦人の視線に合わせるように、部屋の中に密集していたサボテン人間たちが一斉にこちらを向いた。

「くそおお！」

膝で強く隣の一体を蹴るも、殆ど効果は無い。ただ足元をふらつかせるだけで終わる。

目の前に影が差し彼女が足を止めた。ゆっくりと顔を上げると、頬と腹に手の当たる柔らかい感触がした。

彼女の優しい目と視線が交差する。

住岡は自分の体が熱く火照っていくのを感じた。内側から熱を持った根が蔓延るような、体の中で別の血管が生まれたようなそんな感覚。

いつの間にか腹部の痛みは消え、口元に垂れていた血もなくなっていた。

彼女が手を離す。住岡は自分が「治療」されたのだと理解した。

これでもう終わり。もうどうにもならない。

物凄い恐怖が沸き起こってくる。

いきなり殺されるのとは違う、数分間の執行猶予がある恐怖。

サボテン人間たちからの拘束が解けた住岡は、震える手で自分のナイフを抜き取った。

頭の中を一つの感情が満たす。

怖い。

怖い。

怖い。

一人は嫌だ。

このまま自分だけで死ぬことが怖くて堪らない。

——唐沢……

同僚がまだ外に居たことを思い出す。自分や警備員たちがやられていく中、たった一人上手く立ち回り貴婦人の攻撃を回避していた男。

住岡は彼を巻き込もうと思った。彼が貴婦人に治療されれば、自分是一人じゃない。同じ運命を辿るである彼を残して、勇気を持って死ぬことが出来る。

いや、別に唐沢である必要はない。

警備員でも、生存者でも……誰かが居てさえくれればこの恐怖から逃れることが出来る。

ふらふらと歩き出した住岡は扉の前まで来ると、上方、一階に立っている女性を見つけた。

艶やかな黒髪。くつきりとした大きな目。か弱そうな細い体。

——あの子なら、俺の手でも傷を与えられるかもしれない。

血走った目でその女性を眺めると、視線を彼女に固定し、真っ直ぐに走り出した。

その顔に迷いはなく、寧ろ喜びに溢れたものだった。

<第五章>死の治療（後書き）

この章は展開が気に食わないため、五回ほど書き直しました。
疲れた……。

<第六章>予期せぬ怪我人

無数のサボテン人間が見える。

貴婦人の巣と化している部屋から数メートル離れた位置で、唐沢と截、長島はダンボールを積んだカートンの後ろに腰を屈めていた。その様子を心配そうに上、一階から亜紀たちが見ている。

三人だけが下に降りたのには理由がいくつかあった。

一つはサボテン人間の中を進むための機動性の確保。

もう一つは自分たちがやられた場合に対する、亜紀たちの逃走配慮。

そして最後の一つは彼らが戦闘に向かないという事実だ。

麻生と夏は恐怖心が高いためにまともに動けるとは思えず、千秋は彼らを守る必要がある。亜紀は感染者にも慣れ戦闘経験もあるが、それを截が知っているものおかししいし、千秋が許さなかったため待機となった。

「いいか。俺たちの優位性は怪我をしていないことだ。怪我さえなければ彼女の注意がこちらに向くことはない」

「でも、怪我人が一人も居ないと襲って来るんだろ？」

唐沢の言葉を遮るように長島が言った。

「そうだ。その場合は人為的に怪我人を作ればいい。この三人のうち誰か一人が適当に血を流せば、彼女はそいつを追う。その隙に残りの二人で攻撃すればいい」

三人のうちと言っているが、そうなれば間違いなく自分がやらなければならぬ。截は唐沢がそれを知っているにも拘わらず、こういった言い方をしていることに苦笑した。

「そうか。まあ、後はなるようになれとしか言いようが無いな」

腰を上げ自分の頬を叩く長島。気合を入れているらしい。

「さあ、行こう。どうやって攻撃する？」

そのまま金属棒を握りしめ、意を決したように顔を上げた。この棒は一階の部屋の一つから取ってきたもので、商品を溜めておくための棚を分解して手に入れた。正面から見ればただの棒だが、水平に見るとL字の形に曲がっており、所々にボルトを嵌めるための穴が開いている。唐沢は警備員の死体から抜き取ったナイフを渡そうとしたのだが、長島はこっちの方がいいとそれを拒否したのだ。普段自分で料理を作ることが多いらしく、刃物で仮にも元人間である存在を傷つけたくないとのことだった。

「じゃあ……」

唐沢が何か言いかけたとき、目の前の巣から住岡が飛び出してきた。大型カーボンの背後に居る三人には気づいていないようで、じつと一階の方を見上げている。

巣から出てきたということは傷を負って連れ込まれていたということ。截は彼が感染しているということをしずくに察した。

「住岡……！」

同僚の姿を見て一瞬唐沢は声を出しかけたが、彼が感染するきっかけになった理由が己にあると思いつたのか、開きかけた口を閉じたままにした。

「あの人は？ いいんですか」

ふらふらと階段の方へと歩いていく住岡を観察しながら截が聞く自分に対する脅威以外は感じる事が出来ないため、彼のやろうとしていることには気がついていない。

「同僚だ。もう感染しているだろう。すぐに奴らの仲間になる。気にするな」

その冷酷な判断に何の感情も抱くことなく、截は次の言葉を吐いた。

「あの人が感染するまでの間は貴婦人が活動しないんですね。だつたら今がチャンスだ」

「正確には『近くに怪我人が居ない場合は』のことだがな。まあ、

概ね間違いは無い」

「僕は普段前衛を勤めています。囷をやるのなら僕が一番適していますが、その前に確認させてもらってもいいですか？」

疑いの籠った目を横へ向けた。

「何だ？」

「あなたは貴婦人に対して何らかの攻撃を与えましたか？ もしそうなら彼女の攻撃対象が優先的にあなたに向くことになります。僕よりあなたが囷をした方がいい」

「残念ながら俺は逃げ惑っていただけだ。他の警備員の方が戦闘に關してはプロだし、彼らの動きと彼女の応対を観察して対策を打ち出すつもりだった。だから……君が囷をするのがベストだろう」

本当かどうかは分からない。だが、戦いが始まれば真実はすぐに明らかになる。この男にしても、今ここで自分の敵意を買うのは望んではないはずだ。截は彼の言葉を信じることにした。

「……そうですか」

「サボテンたちは彼女本体の意思が無い限り殺意を持って動く事は無い。君が囷として血を流すのは奴らを除去してからだ」

「なるほど、だからさつき鬼に何の抵抗もなかったのか」

パーティー会場のことを思い出したのか、長島がそう言った。

「彼女の腕のような物だからな。体の一部と言っても過言じゃない。減らせば減らすほどこちらが有利になる。まずは彼女から遠い位置にいる奴らをおびき出し、適当に倒していこう」

唐沢は立ち上がると長島の横に並んだ。その手にはナイフが握られている。

「上手くいくといいんですけどね」

傷が無い間は自分の感覚は役に立たない。感染者と戦うようになってから初めての無感覚、超感覚が無い人間としての戦闘に、截は妙な不安感を感じていた。

倉庫街の端。そこにある階段をゆつくりと上がってくる住岡を見て、亜紀は背中にぞわつとした悪寒が走った。

舐めまわす様な、纏わりつくような、ぬるぬるとしたそんな視線を感じる。

——……何？

何となく千秋の肩に腕を寄せ、体を半身に構えた。

「あなた……警備の人？ 大丈夫」

どこか壊れたような表情を浮かべてこちらに歩いてくる住岡を見て、千秋は不審感を顔の全面に押し出す。

巢から出てきたところから考えるに感染しているのは明白だったが、何故こっちに來たのかが分からない。片腕を背中の方に隠していることが二人の警戒心を一層強めた。

周囲の雰囲気が変わったからか、夏と麻生も住岡に目を移した。それらの視線を全身で受け止めながら、住岡は口元を横に広げる。

「い、いっぱい居る……！ お、俺は一人じゃない」

「な、何言ってるの？」

よほど不気味だったのだろう。夏が声を僅かに裏返らせた。

「一人は嫌だ……頼む……助けてくれ。こ、怖くて堪らないんだ」

「ちょ、ちょっとこいつヤバくねえか？」

「はあ、はあ」と荒い息を吐き、変質者のように上気した顔で自分の方を見てくる住岡に、麻生は頬を引きつらせた。

そしてその言葉を合図に住岡が速度を速める。

「も、もうみんな助からない。も、もう駄目だ。なあ、い、一緒に死のう？」

そこで背中に隠していたナイフを右腕ごと前に出す。目の前まで

来てようやく亜紀は彼の危険性を理解した。

住岡が亜紀に向かって荒くナイフを突き出す。

千秋は亜紀を横に推すと、左手でそのナイフを逸らした。腕を前に伸ばしたままの住岡は、勢い余つて直線上に居た麻生に衝突する。「はああ？」

違和感を感じ麻生が下を向くと、見事にナイフが腰に刺さっていた。じわーっと赤いシミが服に浮かぶ。傷自体は大して深くは無かったものの、その瞬間麻生の精神は完全な興奮状態へと陥った。

住岡を弾き飛ばし、両手を腰に当てる。そして手についた血液を見て絶叫をあげた。

夏の悲鳴がそれと演奏を奏でる。

「いや、こ、来ないで！」

ぶつぶつとそれを何度も呟き、ナイフを掲げる。

涙目になっている夏を両手で後ろに引っ張ると、亜紀はそのまま逃げようとする。だが、ぐわっと立ち上がった住岡が素早くナイフを振り抜いた。咄嗟に片腕を頭の前に伸ばした亜紀は、そこにじんとした痛みを感じた。刃の軌道を逸らすことは出来たものの、腕の皮が切られてしまったらしい。腕を斜めに横切るように赤い線が描かれていた。

痛みにピンク色の唇を歪め、瞼を細める。

今がチャンスと言わんばかりに住岡は第二撃目を繰り出した。亜紀の無用心な白い喉を目掛けて切っ先を伸ばす。体勢を崩した亜紀がそれを避けることは出来ない。住岡は嬉しそうに高い声を響かせた。

「うひひひいいいー！——げふっ！？」

ナイフが亜紀の柔らかい肉を貫く前に、千秋の足がその顎を蹴り上げる。住岡は自分の舌を噛んだらしく、意味不明な奇声をあげながら再び倒れた。

「何なのこいつ？ 狂ってるの？」

不気味極まりないといった顔で住岡を見下しながら、千秋は亜紀と夏を背後に隠す。

住岡はしばらく舌の痛みに転げ回っていたが、突然動きを止めた。驚いたように目を見開き、自分の体を両手で抱きしめる。

亜紀は感覚的に彼が発症してしまったということを理解した。

「あがぁっ！？ あがががぁっ、がががっ！」

ビクンビクンと体を震わし、住岡の皮膚が薄茶色に染まっていく。四人が見ている前でその全身から無数の針が突き出た。肉を突き破り、血のシャワーを吐き出す。

最後に顔を天に向ってあげ両手を伸ばすと、口元から血を流しながら住岡の動きは止まった。

サボテン人間になったのだ。

——あっ——

亜紀が唐沢の言葉を思い出し自分の腕の傷を見たのと同時に、住

岡の目がこちらを向く。
そしてその直後、地下一階にある貴婦人の巣から、無数のサボテン人間たちが噴出した。

巣のある扉の前まで移動し中の様子を伺っていると、截たちの耳に悲鳴が聞こえた。

慌てて背後を見ると、先ほど唐沢が住岡と呼んだ男が一階でナイフを振り回している姿が見えた。

「な、あいつ何してんだよ！」

長島が血相を変え、唐沢が疲れたように頭に手を置く。

——亜紀……！

截はすぐに戻ろうとした。別に彼氏彼女として付き合っているわけでもない。告白したわけでもない。ただ三年前の惨事を共有した、お互いの命をかばい合っただけの相手。自分が彼女を守らなければならぬと思うのは実に勝手な考えなのだろう。だがそれでも、彼女に好意を持つ人間として截は亜紀を助けずにはいられなかった。
「待て」

走り出すより前に唐沢が腕で行く手を塞いだ。截は一瞬一階の面々を窺にする気なのかと思ったが、すぐにその真意に気がついた。
巣の中で体を揺らしていたサボテン人間たちが、エネルギーを注ぎ込まれたロボットのように動き出したのだ。白く濁った目をこちら、部屋の外へと向け、前進を開始する。

悲鳴をあげたのは麻生と夏だ。恐らくはあのどちらかが怪我を受けたのだろう。截はサボテンたちが彼らの捕獲のために動き出した

のだと踏んだ。

「住岡がナイフを振り回している今、まともに逃げれるとは思えない。こいつらを上に行かせればあいつらは全滅だ。傷を負っていない俺たちがここでこいつらを殺すしかない。彼女が動き出すのはサボテンが獲物を拘束してから。今のうちに数を減らすぞ」

研究員というよりは熟練の兵士のような分析力で唐沢が指示する。截にもその言葉の意味は理解できたが、このままここで戦っている間に亜紀が死んでは元もこうも無い。自分は彼女を脱出させるために常世国に踏みとどまっているのだから。

「僕は上の援護に行きます」

冷たい声でそういうと唐沢の横を強引に走り抜けようとする。しかし唐沢は截の腕先を掴んだ。

イラッときた截は腕を引き肘を自分の腰に当てると、手の平を大きく開き、腰を回転させ唐沢の手首の前で水平に円を描くように腕を動かした。間接的に負荷がかかった唐沢の手はその動きで外れる。截はそれで拘束が解けたかと思ったが、唐沢は間を置くことなく前に踏み出し、逆の手で截の肩を掴んだ。

——しつこい！

截は今度は唐沢の腕の外側から内側に、自分の腕を上から腰を回転させながら下ろす。再び唐沢の腕は外れたものの、完全に階段への道は塞がれてしまった。

——こいつ、隊員用の訓練を受けているのか？

自分の対処に動じることなく、すぐに次の手を打って来る唐沢に疑問を持つ。僅か数秒の睨み合いを続けていると、截は斜め左上から奇妙な声を聞いた。

「あがあっ！？ あがががあっ、がががっ！」

「——発症したな。これで取り合えず、あの女の子たちがすぐに死ぬことは無くなった。もうサボテンたちと戦うしかないだろ」

同じようにそちらを向いた唐沢が呟く。

上のサボテン人間一体程度なら、千秋でも倒せる。だが、もし亜

紀がさつきの住岡の暴走で傷を負っていれば不味いことになる。確かにこれでは道は一つしかない。

「……今度邪魔をしたら、ただじゃすみませんよ」

截は怒りの籠った溜息を吐き、唐沢から離れた。

おぼろげな視線を上方の生存者たちのみに向け、真っ直ぐに行進する針塗れの感染者たち。

薄く唐沢を睨むと、截は迎え撃つように扉の前へ体を投入した。

「おい、真正面から……！」

背後から長島の驚く声が聞こえたが、そんなものは無視して二本のナイフを振るう。

この者たちは悪魔や鬼とは違う。自由意志を持たないただの遠隔四肢だ。鬼の攻撃を受けて何の反応もしなかった以上、自分の攻撃をかわすはずも無い。手当たり次第に腕を振ると、予想通り次々にサボテン人間たちは血を噴出し倒れていった。

「うお、すごいな。あいつ」

截の行動を勇気から来るのもだと受け取ったのだろう。長島は尊敬するような目で切り込む漆黒の背中を見つめたが、彼の行為がどのような結果をもたらすか知っている唐沢は、より緊張感を高めた。「あれだけ堂々と『彼女の腕』を傷つければ、流石に怒りを買う。そろそろ来るぞ」

「え、何が？」

「決まってるだろ？——彼女だ」

その言葉が長島の鼓膜を振るわせた直後、激しい叫び声が扉の奥から爆発した。

<第七章>貴婦人（フォルセティ）

亜紀たちが感染するには貴婦人との接触が必要不可欠。サボテンに捕まってもすぐに化物にされることはない。だからその「声」が聞こえたと同時に、截は攻撃の優先対象を目の前の怪物へと変えた。彼女の討伐こそが皆の生存率を上げる最大の要因なのだから。

「ポオオウウウウ——」

扉の奥から茶色の巨体がその全様を電灯の元へと晒す。イグマ細胞は遺伝子の関係から男性とは結びつき難い。大型感染体に女性の姿が多いのもそれが理由だ。截は僅かに生前の形を残した彼女の整った顔を見上げると、その不幸な死体の行進を終わらせるために刃を視線の先へと沿えた。

——こうして間近に立っているのにまだ『感覚』に反応が無い。こいつの興味対象が俺に向いていない証拠か。

普通、殺意や敵意を向けられれば、截はすぐにそれを感じ回避行動へと移ることが出来る。正当な殺し合いではない、日常の訓練でも反応することから、截はその感覚無しでの戦闘というものをこれまでに経験したことは無かった。亜紀の身に対する心配と合い重なり、不安は益々強まっていく。

貴婦人が截に対して持っている認識はそこら辺に転がる石と同じものだ。邪魔だから退かす。

死のうが、生きようがその結果には興味が無い。ただ怪我人という、自分の役目を果たす存在を得るための路線上から消えさえすればいいのだ。

そんな意思で繰り出される攻撃に截の感覚が反応することはありえない。いや、正確には命を直接奪える程の攻撃なら反応するのだが、ただ目の前のものを退かすだけの動作に殺傷能力などあるわけ

がない。截にとつてはある意味、これは突然「盲目」にされたのと同然の状態だった。

「何している、来てるぞ！」

唐沢の怒声が真横から衝突する。反射的に後方へ跳ね退くと、目の前の空間を貴婦人の腕が横薙ぎにしていた。まるで障害物を払いのけるような動きだ。あれでは直撃しても殆どダメージは受けないだろう。

——くそ、なんてやりにくい……！

いつそあのぶにぶにした手の先に刃でも付いていればよかった。そうすれば自分の感覚は反応することができるのに。

目、耳、肌、第六感以外の全ての感覚器官を総動員して貴婦人の猛威から逃れる。どれも直撃する目と鼻の先で、囷として攻撃する暇など全く無かった。これでは唐沢も動くに動けないなどと内心思いながらも、それでもただギリギリで回避を続けることしか叶わない。時間だけが無駄に過ぎて行った。

自分がやらなければならないことは囷。貴婦人とサボテン人間たちの注意を引きつけること。出血を意図的に作り出せば簡単にその役目を担うことは出来るだろうが、そうなれば距離的に考えて全サボテン人間と貴婦人の注目を一身に集める事となる。感覚が発揮されても、その状態を脱することは極めて難しいだろう。だからサボテンの数が多数残っている今は、まだ傷を作るわけにはいかなかった。

「おい、後ろ！」

長島が姿を隠すことも忘れ叫んだ。何事かと思った途端、強制的に動きが止められる。

亜紀たちに近付かせないようにと貴婦人に意識を集中させすぎていたようだ。突然真後ろから伸びた針塗れの手には肩や腕を押さえつけられた。

その隙に貴婦人は階段の方向へと進んでいく。

「離せ——」

危機感を感じた截は肘でサボテンの腹を何度も打ったが、その効果は殆ど無く、拘束は緩まなかった。相手が人間なら、正面から押さえつけられているのなら、まだ対処の方法もいくらかあった。しかし今の相手はイグマ細胞に感染した人外の化物であり、内臓を食いちぎられても平然としているような生き物だ。こちらの抵抗など全く意に介さないように、忠実に自身の本体の命を実行する。

——亜紀……！

背中に突き刺さる数多の針の痛みを感じながら、截は声無き女性の身を案じた。

サボテン人間と化した瞬間、住岡はすぐに亜紀へと飛び掛った。彼女の腕から流れる奇麗な血液を指針に、その本能のまま膝を伸ばす。

「下がって！」

両手を前に突き出しながら激走してくる住岡を嫌悪感タップリの表情で見ると、千秋は長島と同時に手に入れた鉄柱でその頭を横薙ぎに殴り飛ばした。数本の前歯を撒き散らしながら吹き飛んでいく住岡。彼がよろけるのに合わせ、渾身の蹴りを浴びせる。威力自体は大したことは無いのだが、体勢を崩していたことと押し出すような蹴りだったため、住岡の体は階段まで戻りそのままそこから転げ落ちていった。

鈍い音が弾ける。下を覗くと、住岡は首の骨を折り、絶命しているようだった。

「し、死んだのか！？」

こちらの背中を防波堤のようにし、麻生が青い顔を覗かせる。千

秋はそんな彼の情けない姿を呆れたように見ると、すぐに階段から離れようとした。

多数の足音を響かせ自分たち目掛けて迫ってくるサボテン人間たちの姿が眼下に移る。

亜紀と麻生が傷を受けてしまったのだ。もはやこの場所も安全地帯ではなくなっていた。

「みんな、移動しないと捕まるわ。逃げるわよ！」

「逃げるって、どこへ？」

左右の先を見据えながら夏が聞いた。

地下からこの一階へと通じる道は左右の階段のみ。二つともサボテン人間たちが駆け上がったっている真つ最中であるため、事実上逃亡は不可能だ。突然訪れた危機的状況に千秋は打開策を思いつくことが出来なかった。

悩んでいると亜紀の姿が目に入った。震える拳を握り締め、左側の階段へと顔を向けている。

長い付き合いとは言えないが、千秋は彼女の性格は熟知している。当然その考えている内容もすぐに分かった。

「駄目、亜紀ちゃん。麻生も傷を受けているし、この状況じゃ例えばあなたが囷になっても意味はないよ」

引きとめるようにそう言ったのだが、亜紀は躊躇ったような表情を浮かべた。優しい彼女のことだ。自分たちの身を案じてくれているのだろう。

「貴婦人にさえ触れなければ感染することはないはず。今はもう、下で戦っている截さんたちを信じるしかない。何とか決着がつくまでここで持ちこたえよう？ 大丈夫、私だってイミユニティーの一員なんだから」

鉄パイプを前に掲げ、出来るだけ力強く微笑む。

それを見て亜紀も覚悟を決めたのか、走り出そうとしていた構えを解いた。

針がコンクリートに擦れる「キン」、「キン」という音があちこ

ちから聞こえる。それは瞬く間に大きくなっていき、とうとう階段の上へと音源を移した。

「うあああ、も、もう終わりだあ……！」

泣き叫ぶ麻生。絶句する夏。そして鋭い視線を飛ばす亜紀。

こちらを虚無感タツプリの目つきで見つめると、サボテン人間たちは波のように押し寄せた。

右手に持った白柄ナイフを逆手に変え、背後のサボテン人間の心臓を穿った直後。截は自分が逃したサボテンたちが階段を駆け上がっていく様子を見た。

このままでは上に居る生存者たちが、亜紀の身が危ない。あれほどの数のサボテンが相手では四人が捕まってしまうことはもはや不可避の現象だ。そして捕まれば、貴婦人は簡単に彼女たちを感染させることが出来る。

截の決断は早かった。

——どっち道このままじゃ戦えないんだ。ならいつそ——
「な、おい！」

長島と唐沢が正気を疑うような視線をこちらへ向ける。

だが、そんなものになど一切の抵抗も感じず、截は己の腕へとナイフを振り下ろした。

裂かれるレインコート、灰色のシャツ。飛び散る真紅の雫。

——さあ、これで……——

額に脂汗を流しながら左斜め先へ視線を向ける。

同時に、行進を始めていた貴婦人の足が止まった。

「まだ無数のサボテンが残ってるのに——あいつ、本気で自分を傷つけやがった……！」

彼の考えは分かる。理解出来る。だが、果たして自分がその立場にいたとしたら、同じような判断を下すことが出来るだろうか。

截の決断の早さ、その覚悟の強さ、自分には到底真似の出来ない彼の行動に、唐沢は「ゾクツ」とした奇妙な畏敬を抱いた。

「巢」の前であるこの場所だからこそ分かる。一階に残っていた生存者たちへ向っていたサボテン人間たちの半数が、截の自虐的な策に反応し、その体を反転させた。これで截は貴婦人の「治療」の対象になり、もっとも優先されるべき近い場所にいる獲物となった。総勢十数名のサボテン人間に加え、貴婦人という巨大な怪物の矛盾が全て彼へと向けられる。

普通なら生き残ることは出来ない。

普通なら生き残れるとは思えない。

圧倒的な脅威を前にした絶望。

心の底から感じる生命の危機。

その渦の中で彼はどんな苦悩を、どんな恐怖を味わっているのだろうか。

科学者としての観察と純粋な興味から唐沢が目を向ける。だが、飛び込んで着たのは全く予想外の表情だった。

それは間違う事無き「笑み」。

怯えていないわけでもない。

尻込みしていないわけでもない。

だがこの破滅的な状況の中で、彼は確かに笑っていた。

突然重力が倍化したかのように押し掛かる「危機の感覚」。

物心ついた時からずっと共に過ごしてきた自分の第六感、生存力の要。

それが、己の腕を傷つけたことで甦った。

背後から、左右から、己の身を拘束しようと狙うサボテン人間たちの脅威。

真正面に立ち新たな怪我人を治癒しようと本能のままに鳴き唸る貴婦人。

改めて感じる危険という名の雨の中、全身に鳥肌を立てながらも截は薄く笑った。

これこそが自分の居るべき世界。

これこそが自分の過ごしてきた次元。

これでやつとまともに戦うことが出来る。

これで役目を果たすことが出来る。

所詮自分は死んだ人間。感染者と戦うために作られた刃。

恐怖を感じない戦いなど、不自然極まりないものだ。

唐沢や長島とは違い、この状態こそが、もつとも截にとって戦い易い環境。

何故ならば黒服は、截は、”死者の船”ナグルファルの船員なのだから。

「ポウウウウオオオオオ！」

優しいようで不自然なほど冷たい貴婦人の声が、こちらに向って波紋を広げる。

上階を目指していたサボテン人間たちが、我先にと階段を駆け下

りる。

截は反時計周りに倉庫街の中を移動すると、向かい側にある階段を指した。あの場所ならば敵の攻撃を正面のみに固定することが出来そうだ。

追いつかれるのが早いか、自分が辿り着くのが早いか、一対多数の戦いが始まった。

全感染者の視線が截へと集中している。これなら頑張れば貴婦人の背後をつけるかもしれない。

横で呆けたように口を開けている長島の肩を叩くと、唐沢はようやく行動を開始した。

いくら截が黒服のメンバーとはいえ、このあまりに多勢に無勢の状況では、彼が死を迎えるまでの時間はそう長くは無い。貴婦人はサボテン人間を手足のように扱うという特性上、必ずその本体は一番後方に待機される。その隙をつくことが出来れば、彼女を倒すことは可能なはずだ。ナイフを持った手に溜まる汗の又メリを感じながら、截と同様時計回りの方向へ、慎重に進み出す。自分たちは何の怪我也負っていない以上、堂々と歩いても攻撃を受けることは無いのだが、それでも認識されているとされていらないとは作戦の結果は大きく変わる。出来るだけ貴婦人の視界に入らないように気をつけ、亜紀たちが待機している場所の下へとこっそりと立ち位置を変えた。

「どこを狙うんだ？」

鉄柱を握りしめた長島が気迫に満ちた表情で聞いてくる。

「感染体といえども、有機生命体であることにはかわらない。脊髄

や脳に大きな損傷を与えることが出来れば、彼女を止められる。近くまでいったら、長島さんはあいつの横に飛び出して意識を逸らしてくれ。俺は逆方向から止めを刺す。まあ、截と合わせて二重囷と呼ばれる戦法だな」

かつて実践部隊に配属されていた時の経験を思い出し、自然に形式化されている戦い方の呼称を口に出した。当然長島にはその言葉の知識は無いが、大体の内容は理解出来たようだ。質問もなく唐沢の後に続いてくる。

「あともう少しサボテンたちが離れば傷害も無く貴婦人の真後ろまで迫れる。あの男がそれまで何とかもってくるといいんだが」

『ベイト・トラップ』の役目をしている截が死ねば、実質上この場にいる面子の仲で、貴婦人たち注意を引きつけたまま時間を稼げる人間は居なくなる。後のことも考えれば彼を失うのは痛い。唐沢はこの機会に全てを終わらせようと決意を固めていた。

階段の三段目に飛び乗ると同時に、肩へサボテン人間の手が掛かる。

截は膝を屈めその手を外すと、振り返えざまに相手の腹を蹴った。一直線に並んでいたサボテン人間たちは、ドミノのように倒れ込む。

——ここなら瞬間的に一対一へと持ち込める。こいつら程度なら

自分の意思で行動していない彼らには「避ける」、「防御」するという概念が存在しない。ただ貴婦人の命のままに対象を捕獲しようとしているだけ。今の状態ならば、数の差があっても何とかかなりそうだと截は思ったが、それはすぐに幻想だと気づかされた。

十体以上ものサボテン人間が集まれば、その重量も押す力も数に比例して増加する。個別意識を持つ人間ならばともかく、彼らは貴婦人という絶対唯一の精神によって統制された肉の槍。全ての動きが連携しているのだ。兵隊蟻のごとく階段に群がると、仲間に押し掛けられることも吹き飛ばされることにも構わず、一心にその段を駆け上がっていく。

「まるで歩く壁だな」

こうなると当然截もさがるしか術がない。半強制的に一階へと体が近付いた。

間に空間を挟んでいるとはいえここは一方通行だ。向かい側には亜紀たちがいる。逃げ続ければ間違はなく彼女たちの場所へ到達してしまう。他の場所へ行こうにもパーティー会場は塞がっているし、この倉庫街から出ることは出来ない。残された道は二つしかなかった。

サボテンたちを殲滅するか、特攻して貴婦人を殺す。

どちらも実現不可能に近い選択だったが、生存者たちに被害を出さないでこの場を収める手段はそれ以外に皆無だ。一歩づつ上へと近付きながら、截は指針の矛先を揺らす。

答えを出そうと意を決したとき、視界の隅に貴婦人へと近づく二人の姿が見えた。

「唐沢——……！」

——もうあそこまで接近したのか。ここで俺が攻め入れればあいつらの行動を邪魔することになる。幸い貴婦人の注意は俺に向いているし、こうなったら、一か八か罠に徹するべきか——！？

截は己の腕を傷つけた瞬間、生存率の低さから自分の命を唐沢が諦めるだろうと予測していた。だが、意外にも彼は当初の作戦通り後衛としての役目をしっかりとこなしている。ならば、それに乗らない手はないだろう。

がしつと階段の手すりを掴み、左の空間へ向けて跳躍する。頭から落ちたが、空中で身体を回転し宙返りのような動きで見事に床の

上に着地した。

——もう後には引けない。頼むぞ、唐沢。

一筋の汗が頬を伝わりキメ細かい首筋の上を滑る。キツと顔を上げると、弁慶のように仁王立ちし、截は己の四肢へ力を込めた。

<第七章>貴婦人（フォルセティ）（後書き）

この貴婦人戦に対するモチベーションが物凄く低いので、次でこの戦いは終わらせます。友が出てくるところまでいければきつと執筆速度が早くなる……はず。

<第八章>キツネの系譜

階段から飛び降りた截を狙い、正面から、真上から、サボテン人間たちが襲いかかる。

生存者たちへ彼らの注意が向かないように、かつ唐沢らの行動を阻害されないように、截は一定距離以上、貴婦人との間を空けるわけには行かなかった。

自分の役目を再認識した今、出来る事は逃げ続けることだけだ。生死の基本にして生存競争では一般的な行動、「逃走」。

自らの命を守るため、そして敵者を壊滅させるために、截は走った。

階段でのことから、例えば相手取る敵を減らしても「肉の壁」によってそれが無効化されることは分かっている。ならばやることは一つだ。逃げ続ける、そののみ。

貴婦人から付かず離れず相手を翻弄することこそが、亜紀の命を、自分の命を救うのだから。

背後から腐臭の漂う息を感じる。

截は右足を前に踏み出し突然のバックステップを行うと、同時に両手に持った白黒のナイフで二体の感染者の首を刈った。黒い血が腕に掛かるが構わず腕を振り切る。どうせレインコートだ。染み込んでいはいない。

こちらが足を止めたことで追跡者の一体が飛び掛る。それを押し出すような蹴りで跳ね除けると、勢いを利用して前へと体を投げた。止まれば彼らに飲まれてしまう。動き続ける事こそが命を繋ぐ。既に息は荒くなっていたが、こんなことで弱音は吐けない。甘えたところで誰かが助けてくれるわけは無い。他人にも、自分にも冷酷に対処する。それが黒服で学んだ生存するためのセオリーだ。

——あと九体か。

受身を取りながら振り返ると、残りの感染者の数が確認出来た。貴婦人が登場する前に倒したサボテン人間の数が三体。たった今倒したものが二体。既に三分の一近くは相手の戦力を減らせたことになる。

楽観的観測を抱くのが危険なことは分かっている。しかしこれならば何とかなるかもしれない。

自然と希望が宿り、腕に力が籠る。

——やってやるさ。こんなことも乗り越えられないんじゃ、キツネを——黒服を出し抜くなんて夢のまた夢だ。絶対に生きて帰ってやる。

自分の目的である憎らしい男の顔が浮かぶ。

武者震いするかのように体を震わせると、截は強く床を蹴り立ち上がった。

完全フリーな状態であった唐沢と長島は大量のサボテンたちが前方へと消えた隙をつき、見事に貴婦人の背後まで迫っていた。無防備な彼女の背中を見つめ、それぞれ左右に分かれる。

——やるぞ、やるぞ、やるぞ、俺なら出来る……——！

恐怖心を押し殺すように、長島は雄叫びを上げた。

「うおおああああああつ！」

両手で鉄パイプを振りかぶり、貴婦人の背中に叩きつける。本当は頭を狙いたかったのだが、高すぎて届かなかった。

——家族の所へ帰るんだ。

明後日は孫の誕生日だった。子宝に恵まれなかった自分の最愛の

娘が、ようやく生んだ初めての子供。その四歳の誕生日を前にして、記念すべき大切な日を前にして、この命を奪われるつもりは無い。孫の誕生日の日を自分の通夜にすることなどごめんだ。

学生時代に励んだ野球部、毎日握り振るっていた包丁、それらの影響で膨らんだ腕の筋肉を極限まで膨らませ、まさに渾身の、出せうる全ての力を使い、何度もその背中を殴打した。

一体どれほどのダメージを与えられたのだろうか。

うるさいハエを見るような動きで貴婦人が振り返った。その目には怒りの色が浮かび、治癒の対象ではない存在を、長島を己の「敵」と認めたように間に皺が寄っている。

「ううっ……！」

生きるか死ぬか。人間が長いこと忘れていた、自然の摂理にそった恐怖が引き起こされる。長島は反射的に後ろへと一歩さがった。

貴婦人は角の方へと追い詰められている截に向けていた体を、優雅に反転させる。

—— 攻撃する気なのか？

彼女の腕は怪我の治療を目的として生み出されたもの。殺傷能力など無い。怯えながらも、長島は自分が大した手傷を受ける事はないと、心のどこかでそう思っていた。

ぷくりと、貴婦人の腕が膨れ上がる。普通の人間とは違う、二つの上腕部を持った独特の腕が。

確かに拳自体の強度は低いだろう。だがもしそれに猛烈な勢いが付いたのなら？

水風船だろうが、スライムだろうが、猛烈な速度で打ち出されればその攻撃力は遥かに強力になる。速さは質量。質量は力。

襲い来るその塊を目にし、長島は頭の血が一気に下へと下がったような錯覚を覚えた。

「ぐおおおおっ！」

無理に避けようとしたため左足が右足に絡まり無様に転ぶ。しかしそれが逆に吉となり、彼女の拳は横へと逸れた。全身の体重を拳

ひとつへと集約したようなその重い一撃は、よくしなる鞭のように地面を削り取り、短い直線を床の上に刻んだ。

「ポオオオオオオオオオ」

貴婦人の整った唇が開き、天へ向って開けられる。

何かの命令や指示だったのか、響き渡ったその声で数体のサボテン人間が截の下から離れた。どうやらこちらへ援軍として来るらしい。

今でさえ一杯一杯なのに彼らが来ては完全にお手上げた。長島は立ち上がり逃げようとしたが、目の前に貴婦人の下半身が飛び込んできたため、考えを断念せざる終えなくなった。

大きなスカートのような彼女の下半身の端には、地面と垂直に円を描くように口が形成され、無数の歯が並んでいる。その歯が自分をかみ殺そうと蠢きながら迫った。

坂の上に置かれた丸太よろしく、長島は我が身を転がし必死にそこから離れよとする。しかし速度差は明らかだったようで、すぐに追いつかれ彼女の歯が服を引きちぎった。

パニックを起こし長島が悲鳴をあげようとした刹那、彼女の背後に唐沢の姿が浮かぶ。

——こ、殺せ、早く——！

生への渴望から黒い叫びを心の中で解き放つ。同時に唐沢の手に握られた刃が彼女の背中を貫き、視界に映り込んだ。飛び散った黒い血液が服や顔にかかる。だが彼女はその傷になど構わず拳を振り下ろした。

どんつと、足に鈍痛が鳴り響く。

痛みに苦しみ回るよりも早く、長島は自分の足の骨が砕かれたのだと理解した。

「くそつ、外した」

唐沢は舌打ちした。

ナイフは心臓を貫くことはなく右にずれ肺を穿った。踏み込みが浅かったようだ。

生物がもつとも隙を見せるのは獲物を襲う瞬間。長島を襲う貴婦人のその瞬間を狙い攻撃を繰り出したのだが、長い間実践を退いていたことと、恐怖心から無意識の内に足が竦^{すく}んでいたらしい。最大のチャンスを見事にふいにしてしまった。

長島の痛む声が目の前から溢れる。先ほどの様子では骨が折れたのかもしれない。唐沢はもう彼が使い物にならないだろうと考えた。――残念だが長島さんは見捨てるしかない。どうする？ ああ黒服の若者はとてもこの場にこれる状態じゃないし、俺一人でここから彼女を殺せるか？

三体のサボテン人間が主人の身を守ろうと今もこちらへ向っている。残り六体の相手は截がしているとはいえ、貴婦人に加えあの三体が相手では自分の勝利は厳しい。かといって今このチャンスを逃せばもう二度と彼女を倒せる機会はないだろう。悲しそうなあの表情が自然と瞼の裏に浮かぶ。

実験用素材として送られてきた彼女。最初にその姿を目にしたときはそのあまりの不憫さに同情したものだ。水憐島という地獄を生き延びることが出来たのに、家を持たないという理由で存在を抹消され、ここへ連れてこられた哀れな少女。まだ二十代前だというのは無残にもその命を捨てることとなり、恐らくは怖くて仕方が無かつたはずだ。

調整水槽に入れられる直前まで自分に向かい「助けて」と懇願していた。その顔が、あの悲しそうな目が、いつまでも心に残留している。

唐沢は冷酷だが鬼ではない。

元タイグマ細胞によって起こされる被害を最小限に抑えるために、

化学系の大学を卒業したのにもかかわらず戦闘部隊へと所属した。そして自分のやっていることが人々を助けることではなく、人手を、実験材料を確保するためだけのものだと気がつき、現場を離れたのだ。

彼女を殺す事は唐沢が自分に科した咎^{とが}だった。せめてその命を無駄にしないようにと、人の命を救うための生物として改造したのに、その彼女が感染者を生み出し、ただの化物のように扱われることは我慢がならない。それは彼女の、自分のやってきたことの全てを否定することを意味する。

だから唐沢は今ここで、己の手で彼女に止めを刺す必要があった。彼女を殺す必要があった。その命を無駄にしないためにも、その成果を後の世に残すためにも。これ以上彼女による被害を出すわけにはいかないから。

——あの時言われたじゃないか。「助けて」って。ここでその願いを叶えなければ一体いつどこで叶えるというんだ。

ナイフを力いっぱい抜きその背から離れる。まだ彼女は長島の足を折った体勢のままだ。今二撃目を放てば避けられはしない。唐沢は雄叫びをあげるとダークシュートをかますように激しく跳躍し、ナイフを降り下ろした。

大分息が荒れている。体中も汗だくだ。

流石に相手の数が多かったらしい。截は倉庫街の角へと追い詰められていた。

三体のサボテン人間が離れ、一体を殺した現状、残りの相手は五体しかない。しかしそれら全てを倒せるだけの、彼らから逃げれ

るだけの燃料が尽きかけていた。

——この常世国に入ってからずっと動き続けていたからな。さすがに体力も限界か。

脂汗の吹き出る顔で目の前のサボテンたちを睨みつける。負ける気はしないが、正直勝てる気もしなかった。

三体のサボテン人間が向こうへ行つてしまつた以上、唐沢らも厳しい状況にあるだろう。いくら彼が訓練を受けているようだとはいえ、所詮はイミューニティーだ。単身で悪魔と渡り合える黒服の隊員には及ばない。このままでは負けるだろうと、截は確信していた。

目の前のサボテン人間たちには貴婦人ほど感覚が効かないため、少しも意識を逸らすことが出来ない。こんな状態で唐沢たちの援護に行く事はかなり厳しかった。

——どうすればいい？ 俺一人なら生き延びることも出来るけど、そうすれば亜紀は助からない。唐沢が居なければ生存者たちを引き連れて詰め所に行く事は無理だ。

ギリギリと後ろにさがりながら思考を巡らせる。背中に冷たい感触を感じ、もう後がないのだと理解した。

——くそ、翠が居てくれたら。あいつが居ればサボテン人間くらいなら簡単に倒せるのに。

後衛を負かされている相棒の姿が過ぎる。だが、彼女の同行を否定したのは自分だ。今更いくら望んだって、それが実現することはありえない。しかめっ面をしている彼女の整った顔を頭の中から追い出すと、自然にある男の憎らしい笑みが浮かんだ。

キツネならばどうするだろうか。截は考えた。

いつもそうだ。どうしようもない危機に、ピンチになると必ずあの男の顔が浮かぶ。あの男ならどうするか、どう考えるかと推測する。それは既に癖のようなものとなり、截の体に染み付いている行動だった。その影響か思考パターンが大分キツネに近い物になっていると、安形からは心配されているが。

『己を主人公にするから真理が見えない。自分という殻に籠れば物事を全て主観というフィルター越しに眺めることになる。あるのは”事実”のみ。自分を含んだ全てを上から見下ろせば自ずと答えは見つかる。まるでチェスの盤上のようにさ。お前はいつまでも自分”っていう我にこだわっているから見えるものも見えないんだよ』

初任務の時に彼に言われたセリフ。思い出せばこの言葉を聞いていたからあの時自分と翠は生き延びたのかもしれない。この言葉が無ければ大怪我ではなく間違いなく死んでいただろう。

「主観か……」

今の状況で自分が囚われている物が何かといえば、それは亜紀の命だ。それを無視して勝利のみを目的に定めれば、何か見えていなかったものが見えるというのだろうか。

截に亜紀を見捨てる気持ちは毛ほどもなかったが、現状打破の手がかりになればいいと、キツネになりきって自分の状況を省みた。そして残念なことに、答えはすぐに見つかってしまった。

貴婦人の拳が肩に掠^{かす}る。伸ばした手は弾かれ、唐沢は背中から地面へと叩きつけられた。丁度島と二人で貴婦人を挟むように寝そべっている。

本体の危機を知ったサボテンたちが到着した。三体が三体とも無表情で貴婦人を囲むように立ち止まる。

——負け……か。

もう無理だと唐沢は悟った。流血していない以上治療されること

は無いはずだが、彼女に敵対したため攻撃を受けることは回避出来ない。

痛む首を回し、そつと顔を上げる。

白く濁った大きな瞳。鬼のように角の生えた頭部。長い、怨念の強さを感じさせる白髪。

生前とは全く違う彼女の顔を見上げ、自分の死という未来を認めた。なるべくしてなった状況なのだと。

これは彼女の復讐だ。

無理やり連れてこられ、無理やり改造され、無理やり人生を捨てさせられた彼女の、呪い。

どれだけ相手のためだと思い、行動しようとも、彼女から見れば自分もその他大勢の研究者の一人でしかない。その罪は、咎は決してなくなりはない。

貴婦人という研究が発展しようとも、再生細胞という技術が完成しようとも、それは彼女には全く関係がないこと。どうでもいいことなのだ。全てはこちらの主観でしかないのだから。

——仕方が無いのかもな。

唐沢は本心からそう思った。もてあそ

これも運命だ。人の命を弄び、神の領分へと進行してしまった人間の末路。どうせ殺されるのなら、見も知らない鬼やテロリストより、彼女の手には掛かるだけましというものだ。少なくとも、復讐と捉えることで納得することが出来る。

もういつでも死ぬ用意は出来ていた。

殺され、元同僚たちと共に彼女の手足となりこの常世国の中を徘徊し、そしていつかイミューニティーの隊員たちに殺される。

そんな未来が既に現実に起きているかのように、幻として見えた。

一階から階下の戦闘を見ていた亜紀は、截の様子が変化したことに気がついた。重大な選択をしたような彼の瞳がこちらに向き目が合う。

一瞬だけその瞳の奥に悲しそうな光が宿ったが、気のせいだったと錯覚出来るほどの短さですぐにそれは消えた。

「おい、あいつこっちに向ってねえか？」

ずっと壁にへばり付き震えていた麻生が、截がサボテンたちの間を突っ切り走り出したことで、不安そうな声を漏らす。

その意を否定するように千秋が口を出した。

「まさか。何でそんなことを——」

だが彼女の予想とは裏腹に、確かに截はこちらへと向っていた。

迷いは一切ないというような動きで真っ直ぐに自分たちから見て右側の階段へと走っている。

「いや、マジでここへ向ってるって！ お、おい逃げた方がいいんじゃないねえのか！？」

「え、嘘でしょ……？」

さすがに疑問を抱かざる終えなくなったようだ。千秋の表情にも恐怖の色が浮かんだ。

——まさか、私たちを……？

下では唐沢と長島がやられ、こちらの勝利はかなり厳しい状況となっている。今彼がサボテン人間の注意を自分たちへ向ける理由はそれしか考えられない。

元々彼の目的は六角行成の保護だった。自分たちと行動を共にしているのは詰め所まで辿り着きたかっただけ。唐沢が殺されそうな状況を見て、もしかしたら彼は自分たちを見限ったのかもしれない。自分たちを囿にすれば一人で逃げる事が出来る。貴婦人から離れることが出来る。唐沢の命が助からないと判断したのなら、十分にあ

りえる話だ。三年前のあの男に似ている彼ならなのさ……。

激しい物音を立てて截が階段を駆け上る。まだ迷いのあった亜紀たちが逃げるよりも早く、彼は一階へと戻ってきた。

「あなた一体――!?」

「悪いな」

千秋の言葉を遮り、截はそのまま手すりを飛び越え下へと降りる。慌てて亜紀が下を覗くと、フリーランニングの要領で前転し、無傷で立ち上がっていた。

――え？ 本当に罔に……

彼は確かにキツネに似ていたが、自分や千秋を助けるなど人道的な面もあつたはずだ。まさか本当に截が自分たちを罔として利用するなどとは思つてもいなかった。信頼していた友人に裏切られたような痛みが心に走る。

「ひっ!? 来たぞー!」

麻生の叫びに合わせ、六体ものサボテン人間がこちらへと突撃した。

無防備だった自分たちに抗う術は無い。千秋も必死に抵抗したが、最初に夏、次に麻生と、あつと言う間に皆拘束されていく。

結局自分は生きてここを出ることが出来ないのか、ただ怯えることしか出来ないのかと、亜紀は悔しさで一杯になった。

「……耐えてくれ」

上に居る四人を心配そうにながら小さく截は呟いた。

キツネになりきった結果浮かんだ、現状を打破するための唯一の方法。

サボテン人間単品に感染能力はない。貴婦人本体と接触しない限り、彼女たちの命は無事だ。だからこそ逆にそれを利用した。

彼女たちを使いサボテン人間の数を減らし、その間に貴婦人を殺す。今あの怪物を倒せる手段といえば、それ以外に道はない。

これは戦闘が始まった当初、截が唐沢に持った疑いそのままの作戦であり、生存者たちが感染する確率も高い諸刃の選択だった。

自分が貴婦人の注意を引くことが出来なければ、一度でも貴婦人に抜かれれば、簡単に亜紀たちは感染してしまう。それほどの危険が伴うにも拘わらず、実行出来たことに、截は自分でも驚いていた。戦う前はあれほど亜紀の身を危険にさらしたくなかったというのに、いつの間にか今ではその感情を実に客観的に認識している。

キツネに毒されていると自分でも分かっていたが、他に貴婦人を倒す手段は無い。截は心を鬼にして戦いへ意識を集中させた。今は唐沢だけじゃない。自分と長島も居るんだと誰かが詰問しているわけでもないのに、心の中で言い訳の言を浮かべる。

「唐沢！」

倒れている元イミューニティー戦闘員の名を呼ぶ。

——貴婦人の最大の武器はサボテン人間。今はその殆どが離れた場所にいる。三人でかかれば……

そこまで考えた時、長島のおかしいことに気がついた。右膝を押さえ痛みをかみ殺すかのように丸まっている。どうやら足をやられたようだ。これでは折角の優位性を無駄にすることになる。

目の前にいるたった三体のサボテン人間を退かせばあとは貴婦人だけ。冷静に、かつ冷酷に、截はもっとも勝率の高い手段を取った。長島が役に立たないのなら役に立つようにすればいい。疾走しながら肩に収納していた小型ナイフを抜き、そのままの流れで斜め下に投入する。一直線に空を切った刃は長島の腕を浅く切り裂き、一筋の赤い傷を作った。

元々貴婦人は長島に止めを刺そうとしていたため、すぐにその怪我に反応し治癒を試みようとして初動に入る。三体の哀れなサボテン人

間も本体の意のままに長島に向って腕を伸ばした。

截は余計な策など一切講じず真っ直ぐに目の前の怪物を目指し、さらに足の速度を速めた。サボテンたちは長島に気を取られたことで一瞬反応が遅れ、截の突破を許してしまう。

何の武器——感染者も居ないこの状況で貴婦人に勝ち目は無い。

前屈みになり力を溜め、それを一気に吐き出すように前へと低く飛翔する。

「ポオオオオオオオッ！」

白柄ナイフの刃が肉を抉り込むと、初めて彼女は苦悶の声を漏らした。だが、まだ死んではない。

——ギリギリで体の向きを逸らしたのか。

唐沢の渾身の一撃が逸れたときのことを思い出し、截はそれが偶然ではなく彼女が意図して行っている行動だと知った。決して知能が高くはない貴婦人だが、それくらいの真似は本能的に行えるようだ。

湧き出る黒い血を胸に浴びながら続けて左手に持った黒柄ナイフを押し出す。振りかぶりの一切無い腰の回転を利用した押し出すような一突きは、恐ろしい速さで彼女の胸へと迫る。今度こそ命中すると思われたが、白柄ナイフの痛みで体勢を崩してしまっただけで彼女の急な動きで、それも心臓には届かなかった。

大きく拳を振りかぶる貴婦人。ナイフは深く肉に食い込み、抜こうにも抜けず、避けようにも全力で前へと飛んでいたため前傾姿勢となり、かわせる余裕もない。碎かれるほどはいかなくとも、頭蓋骨にヒビが入るくらいの結果は覚悟した。チラリと背後を見ると、自分を拘束しようとしている六本もの茶色い腕が視界に入る。

あと少しというところで、截は勝機を逃した。

「彼女に仇を打たせてやろうと思ったのにな」

死を覚悟していた唐沢は心の底から残念そうに呟いた。

死にたかったわけではない。

自虐趣味があるわけでもない。

しかし自分の行ってきた行動を罪と定め、その犠牲者である彼女に止めを刺されるのならば、それもまた仕方がないことだとは認めていた。

だが、だけど、こうして彼女の苦痛を終わらせることが出来るチャンスを、怪物としての彼女を消し去る機会を、一歩進めば手に入る事が出来る状態で見過ごすことは不可能だった。

たった一歩。

たった一歩。自分が動けば彼女は助かる。

人間に戻すことは敵わなくとも楽にする事は出来る。

だから唐沢は立ち上がった。

イミユニティーから支給された大きなナイフを握りしめ、必死に筋肉に力を込める。

今更彼女に謝る資格は自分にはない。それでも、それでも少しでも早く、その苦痛を終わらせる事が出来るのならば、やることは——ひとつだけだ。

再び空中へと撒き散らされる漆黒の血液。

詰め込まれていた音が開放されたかのように響き渡る悲鳴。

唐沢の握ったナイフは、確かに彼女の心臓を貫いた。

<第九章>暗闇の会合

自分の予想した通りに唐沢が貴婦人の心臓を貫いた。いや、そうならなければワザワザ隙を作って彼女の注意を一心に引きつけた甲斐がないというものだ。

体中の刺し傷から血を流し倒れ込む怪物。その姿を興味なさそうに見つめると、截は振動に合わせ転がるように彼女の横から離れた。

「どしん」という音とともに土煙が立ち上る。

「ポオオアアアア……！」

胸の傷が激しく痛むらしい。貴婦人は今までとは打って変って心細そうな声で鳴いた。

「唐沢さん。すぐにこの場を離れましょう。貴婦人が完全に息の根を止めれば鬼たちが侵入してくる。今のうちに案内を」

「——ああ。分かつてる」

どこか悲しそうに唐沢は頷いた。床の上でもがき、徐々に弱っていく怪物を眺めながら、物思いにふけるように立ちすくんでいる。

貴婦人を倒したことでサボテン人間たちも完全にその行動を停止した。截が背後を振り返ると、生存者たちを拘束していた手は離され、本物のサボテンのごとく棒立ちしている。

視線に気がついたのか亜紀がこちらを向いた。截が無事を確認めるようにその姿を確認していると、まるで親の仇を見るような目で睨まれた。ズキリと自分の中で何かが痛み声を漏らす。

截は彼女から視線を逸らすと、未だぼうつとしている唐沢に向って再度声をかけた。

「早く行きましょう。サボテン人間たちが少しは防波堤になってくれる。今立てば何とか逃げられるはずです」

その言葉でようやく唐沢は貴婦人の前から離れた。倒れている長島を引き起こし、彼の肩を担ぐ。截は一瞬長島をここに置いて行くべきだと思ったが、その意図の非情さに気がつき、すぐに考えを振

り払った。自分がキツネになったような不快感を抱く。

先ほどの亜紀の目が無意識の内に頭の中に浮かんた。

——…生き残るには必要なことだ。この地獄を抜けるためには甘いことなんか言っていられない。今だって冷静に対処したからこそ、犠牲者を出さずに乗り越えられたじゃないか。

三年前の自分だったのなら、きっと亜紀たちを囚になどせずには手段を講じたことだろう。だがその結果、必ず誰かが大きな傷を受けることになっていたはずだ。成長しただけなんだと己に言い聞かせる。

昔とは違い、大型感染生物を相手にしても一撃も攻撃を受けてはいない。今の戦いだって、ほとんど自分のシュミレーション通りに事が進んだ。何を後悔する必要があるというのだろうか。所詮亜紀は戦いの中に身を置いていないただの一般人。気にする事は無いとそう納得する。

これが強引な考えだということは分かっていたが、そうしなければ截は前に進む事が出来なかった。

悩んでいては生き残れない。亜紀を、彼女の命を守れないのだから。

抱きつくように体を拘束していたサボテン人間の腕を振り解くと、肌に薄く刺さっていた針の傷みを感じた。出血するほどではないが、微妙に痒みを覚える。

「勝ったみたいね……」

ほっとしたように息をつきながら千秋がこちらを向き微笑んだ。

一歩間違えば死んでいたかもしれないこの状況でそんな笑顔を作ることが出来るのは、さすが特殊部隊の隊員というところだろう。自分とは大違いだと亜紀は思った。

「さつきはどうなるかと思ったけど、まあ結果オーライかな。こっちに死人は居ないし、最高の状態ね」

そう言つて彼女は截の方へ顔を向ける。さすが黒服の隊員だとか何とか聞こえたが、自分にはまったくそんなことは思えなかった。ただ、こんな狂った状況の中でも最善手を打ち続けることの出来る彼が怖かった。まるで人間ではないような、この異常な世界でしか生きられない生き物のような、そんな恐怖を感じた。

恐々眺めていると目が合った。鋭い刃を突きつけられているかのような威圧感を感じ思わず身構える。彼はそんなこちらの様子を見て視線を逸らしたが、何となくその包帯に包まれた横顔が寂しそうに見えた。

「ほら、あなたたちもしっかりして。大丈夫？」

泡を吹き出さんばかりに口と瞳孔を開いて固まっている麻生と、小さく縮こまっている夏に苦笑いを浮かべながら千秋が呼びかける二人とも青い顔をしていたが、何処にも怪我などは受けていないようだ。極度の恐怖で血の気が抜けただけなのだろうと亜紀は同情した。

「も、もう嫌だ。早くここから出たい……!!」

千秋に肩を叩かれ魂を肉体へと戻した麻生は、半目に涙を浮かべてそう呟いた。

「男のくせに弱音を吐かないですよ。上にいるのはあなた以外みんな女なのよ。恥ずかしくないの？　まだ女子高生の夏ちゃんだってこんなに頑張ってるっていうのに」

「うるさい！　怖いものは怖いんだから仕方がないだろ。大体お前は元々そっちの世界の人間じゃねえか。俺の気持ちの何が分かるっていうんだ」

血走った目で怒鳴る麻生。千秋は一瞬頭に血が上ったようだった

が、彼の気持ちを考慮したのかそれ以上何も言わなかった。

「おい、あまり騒ぐな。鬼を呼び寄せたいのか？」

麻生の声が聞こえたらしく、地下一階から唐沢が唸る。何故か分からないが、その表情はどこか満足げに見えた。もしかしたら貴婦人を倒せたからかもしれない。

「行くぞ。彼女の息が続いている間にここを離れる。早くしないと鬼が侵入してくるからな。横のパーティー会場の状態を忘れるなよ」
「そうね。……行きましょう」

すぐに、千秋が返事をした。

”大丈夫なんですか？”

亜紀は唐沢の抱えている長島を見て心配になり、そう聞こうとしたが、喉は接着剤で塞がれたかのように音の放出を許さなかった。自分がただ生きているだけの付属品のように感じる。何も出来ず、助けられ、利用される。一体いつになったらそんな状態から抜け出すことが出来るのか。三年前から全く成長していない己の状態に、亜紀は心底嫌悪感を抱いた。

どす黒い水が大量に残留している。

本来は緩やかな速度で絶えず流れ続けているはずの水は、今は時間を停止させられたかのように定位置に留まっていた。

「六角はどうしている？」

長い癖毛を掻き混ぜながら東郷は楽しそうな笑みを浮かべた。地下水路全体にその低く渋い声が木霊する。

問いを受けたタヌキは明るい声で答えた。

「まだ詰め所へ閉じこもっているみたいですよ。そこから中鬼だらけですからね。助けが来ない限りはしばらくはあのままでしょう」

「外へのルートは全て完全に潰したのか？ ヘリはどうだ」

「勿論手は打ちましたよ。感染体と化した同士たちが何人も徘徊しています。あれならば例え私でも突破するのは不可能でしょう。鬼が居ることはイコール行き止まりですからね。通り抜けられる人間が居るのならば是非見てみたいですよ」

この常世国で異常事態が起きれば、まず最初に考えられる重役の逃走手段はヘリしかない。商業エリアでバイオハザードを起こすと同時に、当然そのことを考慮してヘリポートへと繋がる階段にもタヌキは部下を送り込んでいた。実際、それが幸を帰して六角行成は脱出することが敵わなくなったのだ。

「そうか。予定通りだな。ならば奴らは必ず地下を目指すはず。下の研究所とヘリポートは物資の運搬を行うために高速エレベーターが直通している。いくら我々といえどもファーストブラックドメインへの侵入は難易度が高い。水路から外へ出る道は全て封鎖されているし、『こいつ』をここへ置いている以上、それ以外にどう頑張っても逃げ道は無いだろう」

僅かに盛り上がり気泡を浮かべている水面を見つめ、東郷は口元を歪めた。

「では計画通りですね」

東郷の笑みに合わせるようにタヌキもにんまりと笑顔を浮かべる。この地下水路はかなり古いもので、もう何年も前から使われてはいない。動いているものといえば空調くらいなものだ。地上へ出るための扉は万が一感染生物が流失した場合に備えて固く閉じられているし、こちらの兵器を置いておけば超感覚を持つ六角が気づかないはずは無いだろう。彼がここを通る可能性は殆ど無い。

だからこそ、こうして自分たちディエス・イレが地下への侵入ルートとして利用出来るのだ。上へ行く道は無くとも下へ行く道がこ

こにはある。制御不能な鬼とは違い、水路へ配備した兵器はある程度操ることが可能なもの。六角らにとつては死の道でも、自分たちにとつては安全地帯でしかなかった。

「ああ。これで六角は必ずファーストブラックドメインへと入る。最初の『成功例』にしてイミュニティーの支配を拡大させた諸悪の根源。あの場所へな」

東郷の言葉を聞きタヌキは静かに頷く。

六角行成を殺すただけなら、ワザワザこんなバイオハザードを引き起こさなくとも、それを成し遂げるための手段はいくつかあった。毒殺、待ち伏せ、狙撃、E T C E T E R A……

だが彼が死んだところでイミュニティーには新しい代表が生まれるだけだし、結局のところ何も変わりはいらない。東郷が、ディエス・イレが今回のテロを起こした理由は他にある。

イミュニティーの壊滅。

そのために多くの人員を犠牲にして、こうして六角を泳がせているのだ。

イミュニティーにとつてもっとも不味い事態はイグマ細胞の存在が世間に知られ、国内で組織を維持出来なくなること。東郷はバイオハザードを起こすことでその事態を実現しようと考えていた。

悪魔以上の性能を持った鬼が溢れている今、イミュニティーはその対処で手一杯なはずだ。これ以上さらにファーストブラックドメインの生物までもが流出すれば、その被害を抑えることはほぼ不可能になるに違いない。

最悪の場合は水憐島のように大規模爆破を行い事態を收拾しようとするかもしれないが、六角が内部に居る事でそれはある程度遅らせることが可能だ。どの組織も最高司令官の命が重要なのは変わらない。そしてだからこそ、東郷の思い通りに計画は進んでいた。

ただイグマ細胞を撒くだけならばディエス・イレでも簡単に出来る。イミュニティーが、国が引き起こしたという事実が重要なのだ。国が運営していると正式に表明しているこの常世国でそんな事態が

起されば、どんなに頑張っても政府の関わりは否定できない。限界まで内部で感染者を増やし、後で一気にそれらを開放すれば、もはや事態を收拾することは完全に無理だろう。感染者たちは瞬く間にマスコミの前へと出現し、その存在を世間に知らしめるはずだ。

『嚴重管理下にあった政府の商業施設から、謎の化物が溢れ出る。国家の極秘研究か？』

そんな新聞の見出しが頭に浮かび、タヌキは下品に小さく笑った。『ブラックドメインの化物どもを開放次第、『こいつ』に外との壁を粉碎させる。爆発物を使ってもよかったが、やはり演出は派手に越したことはないからな』

『ではもう行きますか？ スパイが持ち込んだ『こいつ』も既に十分な大きさに成長したことが確認出来ましたし、ここでの用事は終了しました。イミユニティーの調査隊も来ないようですし、私たちもブラックドメインへと向いましょう』

早く計画を成功させたかったタヌキは、はやる気持ちを抑えきれないようにそう言った。

『いや、もう少し待とう。下への侵入は六角が中へ入ってからの方が都合がいい。今感染生物を開放すれば、それを恐れて奴が地下へ向わない可能性がある。それにそもそも奴らが行かなければ俺たちがブラックドメインへ入ることは不可能だ』

事前に送り込んでいたスパイでも地下研究所までしか紛れ込むことは出来なかった。ブラックドメインの管理対策は万全であり、例えこうしてバイオハザードという異常事態が起きた今ですら、全く影響が無いかのようにそのセキュリティは機能している。六角が下へと進みセキュリティを突破するまで東郷たちが地下へ降りることは叶わない。

貴婦人を解放したスパイが流したコンピューターウイルスには、六角らがセキュリティ解除のために使用するIDや指紋、声門、網膜、手相などのデータを全てコピーし、擬似的に同様のものを作り出す機能が入っている。しかしその機能を利用するには六角が

自分たちよりも前にブラックドメインへと入ることが必要不可欠であるため、現状としては東郷たちはここへ留まざるしかないのだった。

「それに、別働いている同士が合流するためにここへ来る可能性もあるしな。今は下手に動かない方がいいだろう」

「そうですね。それでは……しばらくは引き続き六角の監視と同士の活躍を見ることに期待いたしましょう。じっとしているのが苦手な私としては非常に退屈かつつまらないことです」

心の底からそう思っているかのように、タヌキは肩を落とした。それを見て、東郷は同情するようにワイルドに笑った。

倉庫街から職員用通路へと入った截たちは、すぐに足を止めざる負えなかった。

電灯が消えていることは分かっていたが、実際に中へと踏み込むとあまりの暗さに反射的に尻込みしてしまう。

「何しているんだ。進まないと鬼に追いつかれるぞ」

パツと懐中電灯の光をつけ、面倒くさそうに唐沢が呟いた。足元すら見えない暗闇の中で輝くその僅かな光が、逆に恐怖心を引き立てる。遠くの方から僅かに聞こえる鬼の声が、恐ろしく不気味だった。

このままではまともに進むことが出来ないと判断した截は、何とか皆を安心させようとした。超感覚者であると亜紀に悟られないよ

うに、言葉を選びながら口を開く。

「僕は長年の経験から鬼の気配を察知出来ます。それに唐沢さんの知識があれば迷わず宿泊エリアまで進むことが出来る。何も心配することは無いですよ」

だがその言葉を聞いた麻生がすぐさま怒鳴り声をあげた。

「何が心配することはないだあ？ 人様を囚として利用するような奴の言葉なんか信用できるか！ どうせピンチになればまた俺たちを使って逃げるんだろ」

「ちよつと麻生さん！」

千秋が迷惑そうに顔をしかめる。声量が大きかったからか、それともここで争いたくなかったからか、截にはそのどちらにも見えた。「そんなことを言っても他に道がないんだぞ。だったらお前一人でここに残るのか？」

唐沢が飛ばした鋭い野次に、麻生は「うつ」と声を漏らして黙る。「生き残りたかったら黙って従え。少なくとも俺とこの截くんにお前を守る義務なんか無いんだ。一緒に行動させてるだけでも儲けもんだと考えることだな」

正論であるため言葉を返すことが出来ないようだ。唇をギリギリと塞ぎ、麻生はぷいつと視線を逸らした。

話が纏まったところで唐沢はすぐに歩き出す。現状を考えれば当然の行動だ。截も自然にそれに続いた。

「ちよつといいか？」

横に並んだところで唐沢が耳元へ顔を寄せる。何か話したいことでもあるらしい。大体の内容は予測がついているが。

「……彼女を倒す事に強力してくれたことには感謝している。だから深く詮索するつもりはないんだが……」

一旦唐沢は言葉を切った。

「お前、本当はイミユニティーの依頼で来たわけじゃないんだろ」それを聞いた截は表情を全く崩さずに前を向く。

「何故、そう思っんですか」

「お前が黒服の人間なのは疑っていない。実際にその実力を目にしたからな。だけど、六角代表の身を守ろうとしているわりには焦っている様子が毛ほどもない。まるで代表の命なんてどうでもいいよ。うだ。しかもあの女の子たちに対する行動、どう考えてもおかしい。お前の本当の目的はなんだ？」

「……六角行成の暗殺だとしたら？」

氷のように冷たい声で截はそう言った。一瞬唐沢は目元を動かしたが、すぐにそれを否定した。

「ありえないな。だったらデイス・イレに敵対するような行動を取るはずがない。貴婦人は生かしておく方がお前にとっては都合がいいはずだ。もし本当に暗殺目的ならばこの地理を理解しているのは当たり前だし、俺の補助は全く必要ない。お前の行動は全くこの内情を知らない観光客のそれと同じだ」

深く詮索するつもりはないと言っておきながら、唐沢はずいずいと踏み込んでくる。截は軽い溜息を吐いた。

「僕の目的を知って、あなたはどうするつもりなんですか？」

「返答によってはお前を拘束する——って言いたい所だが、戦っても勝てそうにないしな。実際のところは何も出来ないさ。ただ興味本位で聞いているだけだよ。もしお前と争うにしても詰め所へ辿り着いてからの方が楽しな」

「……ただここから出たいだけです。常世国へは個人的に興味があつて訪れていただけです。別にあなた方に害を与えるつもりはない」

截は正直に答えたのだったが、唐沢はそれを嘘だと思ったようだ。片目を吊り上げながら截から顔を離れた。

「どうあつても本当のことは言いたくないようだ。ま、別に構わないが。俺には何の関係もないことだし」

「イミュニティーに在籍しておきながら関係ないはないでしょう」

「関係ないさ。どうせ貴婦人の責任を取らされて俺はもう解任だ。研究自体は残るだろうが、別の人間が引き継ぐことになるだろう。」

お前に聞いたのは本当にただの興味本位だよ」

唐沢は首にぶら下がっていたネクタイをさらに緩める。いつそう取ればいいんじゃないのかと截は疑問に思った。

「それに……— 気になることもあるしな」

「気になること？」

何か重要な話が始まるような予感がして、截は耳に意識を集中させた。だが唐沢ははつとしたように顔を上げると、それ以上何も口に出すことは無かった。

追求しようとする、截の第六感——絶対危機回避感が警報を発する。どうやら近くに鬼が接近しているようだ。右斜め前へ神経を集中させつつ、その胸を手の動きで唐沢へと知らせる。黒服独自のコミュニケーション法だったが、イミューニティーでも意味は伝わるらしい。唐沢は軽く頷くと最後尾を守っている千秋へ截と同様の連絡を送った。

「ついでな。敵が右ににいるのならこのまま進んでも大丈夫だ。お前が感じ取った奴の場所からではここまで来るのに大きく迂回する必要がある。物音さえ立てなければ問題はないさ」

どうやら感じた鬼は壁の向こう側に居たということのようだ。唐沢の囁きを聞き、截は緊張を幾分紐解いた。

やはり唐沢を同行させて正解だ。自分の感覚だけでは鬼の居場所とは分かって、正確にそこを避けて目的地まで皆を誘導することが出来ない。最悪の場合は鬼を避けるあまりどんどん奥地へ進み、奴らに挟まれにっちもさっちも行かなくなるような危機を呼んでいたかもしれない。自分が判断を誤っていた場合のことを考えると少しだけ寒気がした。

唐沢の知識と截の感覚。この二つが揃って初めてこの暗闇の中を進むことが可能となる。どちらかひとつが欠けていては決して生き延びればしない。少なくとも截には他にこの道を進む手段は想像出来なかった。

ある程度進み、間もなく反対側の宿泊エリアへと到達するかどう

かという頃。截は再び死の危険を感じた。

——不味いな。唐沢さんの話だここは一方通行だ。他に宿泊エリアへ出るルートは無い。戦うしかないのか？

音の反響や空気の流れから察するに、今まで歩いてきた場所とは違い、ここは多少開けた場所となっているようだ。食べ物の臭いがあることから、小さな椅子や机を隅に配置した休憩所があるのかと予測した。

こちらの指示を受け取った唐沢が皆を下がらせる。截としては唐沢や千秋と協力してベイト・トラップを使いたかったのだが、この暗闇では二人ともまとまな戦闘を行えるとは思えない。仕方が無く一人で前へと進んだ。

強力な鬼だろうと五感に頼っているところは人間と同じ。身体能力に差異はあるものの、自分には特殊な感覚がある。ある程度の苦労はするだろうが、今の状況ならば一対一で勝てないことも無いと感じた。

転がっている空き缶などを踏まないようにするためと、足音を立てないようにすり足で進み、暗殺者のように相手へと近づく。接近したことで截は相手が鬼とは全く違う存在だと知った。

——なっ、この感覚……これは……——

刹那、足が何か糸のようなものに引っ掛かる。と同時にカランカランと鈴を鳴らすような音が真上から聞こえた。

瞬時にそれが何かを理解する。

鳴子だ。

一直線に張ったワイヤーやら糸状の物に鈴や音の出る道具を括り付け、何者かがその糸へ触れることで警告音を鳴らすという、元々は畑を守るために農民が考えた手法。これがあるということは相手は鬼ではない。——人間。

勿論イミューニティーの隊員が仕掛けたものが残っていたただけだという可能性もあったが、截はたった今相手が人間であることを感覚で理解していたため、その考えはすぐに頭の秘境へと消え去った。

——気づかれた！　デイエス・イレの一員か！？

慌てて鳴子から離れて後方へと飛びさがる。するとすぐ目の前の空気を何かが過ぎった。ヒュンという高い音が耳に届く。恐らくは小型ナイフに類するものだろう。

相手が人間である場合は截の感覚の効果は減少する。人間ならば純粹に命を狙うのではなく、捕獲や様子見など余計な動作が入るからだ。向こうもこちらの正体が分かってはいないため、現状はその典型的な例だと言えた。

相手の所属を確かめようと声を出そうとするが、直前で思いなおし口を閉じる。

相手がイミユニティーの隊員だった場合はそのまま和解出来るだろうが、もしデイエス・イレだった場合はただこちらの居場所を知らせるだけになってしまう。向こうが自分のことを人間か感染者か判断仕切れていないうちに、制圧してしまうのがベストだろう。多少強引すぎる気もしないではないけど。

謎の敵はこちらが後方へ逃げたことを推測したのか、別の飛翔物を飛ばしてきた。感覚で予知した截はあっさりとおれをかわし身を屈める。が、横に動いたことで今度は別の鳴子に腰が当たり、再び鈴のような音が背後から響いた。

——おいっ、一体何個これを仕掛けてるんだよ！

舌打ちしすぐにそこから離れようとする。しかしいきなり背後から危険を感知した。敵が潜んでいたわけではなく突然生まれた危機の感覚。わけが分からないまま截は黒柄ナイフでそれを弾く。散った火花の光で確認すると、どうやらヒモで引っ張られたらしいポールのようだった。

火花で場所がばれたため再びそこから離れようとする。暗闇の中だというのに、先ほどからいいように相手に翻弄されている。普段は冷静な截も、この初めて味わう、手の平で踊らされるような感覚に多少の怒りと焦りを覚えた。冷たい汗が背筋を伝わる。

相手は相当な実力者のようだ。間違いないただの使い捨てのテロ

リストでも、三流隊員でもないだろう。もしかしたら黒服なのかと疑問を持つ。

このままではすぐに追い詰められると思い、截は逆に相手の罠を利用することにした。

左へ飛ぶと同時に小型ナイフを先ほど腰で押した鳴子へ向けて投げつける。足の着地と合わせてそれが激しく響く。これで相手は自分の居場所を見失うはずだ。

再び右手の鳴子付近へ向けての攻撃音がなったが、それには構わず截は一気に前へと詰めた。この相手と時間をかけて戦うべきではない。どんな仕掛けを用意しているか分からない以上、瞬時に制圧しその策を防ぐべきだ。

左手から感覚をたよりに相手に接近したとき、今度は何故か突然足元に段差が出現した。全力で移動していた截は見事にそれに足を取られ、前のりにつんのめる。

思わず「またか！」という感想が浮かんだ。

体と地面で強烈なハグを行う音が鳴り響き、相手の攻撃をさけるために急いでゴロゴロと横へ転がる。感触から足元にあったのはダンボールだと気づいたが、今更遅い。

転がり始めた直後、そのダンボールの目の前へと巨大な何かが落下したようなくしゃりという鈍い音が聞こえた。一步遅ければあれが自分の頭に直撃していたかもしれない。

戦慄し、截は唾を飲み込んだ。

だが、幸いなことに相手へは近づけたようだ。今まで自分が引つ掛かった罠の位置は全て確認しているし、もうそれに気を取られるようなこともないだろう。立ち上がり真正面にいるであろう相手へ向って突撃する。また何かしらの罠が仕掛けられている可能性も踏まえ、自分と相手の中間地点に小型ナイフを投げつけた。案の定、変な金属音になる。

截はその得体の知れない罠を飛び越えると、ようやく相手の眼前へと辿り着いた。足を地面に着きながら右手のナイフを振り下ろす。

敵が見方が分からないため勿論刃は裏返している。

こちらの接近を知ったのか、相手は後方へとさがったようだ。截のナイフが空を切り、その一步分奥で物音が聞こえた。

——逃がすか——！

距離を開ければ何をされるか分からない。これ以上ホラー映画さながらの霊的な攻撃を受けるのは是非拒否したい。すぐに截は踏み込み、右腕を引く力で左腕のナイフを繰り出した。

それが届くか届かないかという所でいきなり目の前に強烈な閃光が走る。懐中電灯の光だ。

相手はこちらが完全に虚を疲れたと思ったらしい。隙をつくようにその手にもったナイフを動かす。

しかし、目の前の人間にはそんな光など無意味だった。

不意打ちも、姿を隠す事も、その動きすらも全てを否定する感覚。絶対危機回避感という圧倒的な有利性。

その力によって、截は光の嵐など構いもせずに相手のナイフを防ぎきる。

「何！？」

初めて驚いたような相手の声が聞こえた。

——悪いな。俺は普通じゃないんだ。

接近戦に持ち込めばこっちのもの。截は防いだ左手のナイフを円を描く様に回し相手のナイフを封じると、右手に持ったナイフでその首元へと刃を当てた。

「俺の勝ちだ。武器を捨てろ」

そう力強く鋭い声を放つ。かなりギリギリの勝利であり、一歩間違えば拘束されていたのは自分の方だっただろう。超感覚が無ければほぼ九十九パーセントそうになっていたに違いない。

相手は諦めたのか、苦々しげにナイフと懐中電灯を捨てると両手を上に上げたようだった。

ころころと転がっていた懐中電灯が二人の姿を壁に映し出すが、闇の中で放たれる光が強すぎるためお互い相手の正体を確認出来

ない。すると、相手の背後から足音が聞こえ向かい合っている二人の方向へとそれが近付いてきた。

新手かと截は用心したが、その人物はこちらの様子を理解していないのかばたばたと物音をたてながら何か動き回っている。

「誰か知らないが止まれ。この男を斬るぞ」

まるで悪役のような低い声で截が怒鳴ると、その足音の主はひゃあ！？などと奇声をあげながらどこかにぶつかった。壁のようだ。

偶然か狙つてのもののか、突然周囲が明るくなる。

唐沢は職員用通路の全ての電灯が破壊されたとは言っていない。

相手は電気を消す事で自分たちの畏を隠し、有利に動こうとしたようだ。まさに敬服に値する手腕だった。だが今はそんなことはどうでもいい。まったくもってどうでもいい。

截は相手の顔を見た瞬間、思わず呟いてしまった。

言つてはいけない一言を。

今この場でそれを口に出すことがどんな結果を生み出すのか、考えもせずに。

自然に。

無意識に。

流暢に。

かつてもつとも信頼した男の名前を呼んだ。

「——友——……！」

<第十章>黒猫と青い鳥

六角行成救助の命を受け、国鳥友が常世国へと入ったのは今から僅か十数分前のこと。

離れた場所で待機しているマスコミの目に止まらないように、警察関係者を偽りヘリで直接北部の屋上へと降り立った。

感染拡大阻止とイグマ細胞の存在隠滅。この二つの理由を満たすため、常世国はありとあらゆる道が塞がれている。

そこで友たち五名の救助部隊は事前に提示されていたこの施設の情報元を元に、廃煙ダクトを侵入経路に定めた。

火災などが起きた場合に対する、煙を屋外へ放出するためのこの設備は、垂直に一階のガレージへと続いていた。

降り立つ前まで友はここを使って六角を逃がせないのかと考えていたのだが、あまりのダクトの垂直さにあっさりとその思考を投げ捨てた。例えロープを使ってもこの高さを昇ることは至難の技だ。体格も大きく訓練を受けていない六角ならばなおのことだろう。

脱出ルートを当初の予定通りブラックドメインから直通している高速エレベータに決定し、詰め所を目指して行動を開始する。現在地は常世国北部の中央付近だったため、このまま職員用通路を南下すればすぐに東西連結路へと合流出来るはずだった。

しかしそう上手くことが進むわけもなく、歩き出してすぐに二体の鬼と遭遇し、その圧倒的な戦闘力の前に二人の隊員を失ってしまった。常世国在留の隊員が十人近い犠牲を作ってなお一体の鬼も倒せなかったことを考えると、彼らはやはり凄腕の兵士だといえたが、死んでしまったことには代わりがない。潜入してすぐに三人へと数を減らされた友たち救助部隊は、改めて現状の恐ろしさを認識し、緊張感を高めた。

中央付近へ着いた彼らは、詰め所がある東側エリアを目指し右側へと方向を変える。無事に鬼と遭遇することもなく進んでいると、

前方から何か引きずられたような血の後を発見した。もしかしたらこの先に感染者が居るのかもと思い至った彼らは、その有無を確かめよと前衛と後衛の二人で調査を行うことにした。

本来は前衛の男一人だけでよかったのだが、後衛の人間が一人では危ないと勝手に着いていったのだ。敵の姿を確認次第この場へ戻り罠を張ることになるのだろうか。

通路の狭さや中衛という役割の関係で一人残った友は、その場にあった瓦礫と空き缶で鳴子を組み立てるなど、感染者に備え、暇つぶしの意味もありいくつかの罠を作った。

ある程度その作業を終えた頃、なにやら話し声や小さな足音のようなものを感知し、友は誰かがこの場へ近付いていることを知った。自分の仲間が進んだ方向とは間逆なため、それが生存者のものであると予測する。しかし、こちらの気配を感じ取ったのか、急に話し声や足音が消える。その事実、友は相手が一般人ではないと悟り、入口付近の自動販売機や掲示板、机などを利用して咄嗟に鳴子を掛け、同時に後方へと下がりながら足でダンボールやパイプ椅子などを自分の前へ動かした。正直に言えばもっとしつかりとした罠を張りたかったのだが、そんな時間も無い。仲間が戻って来るまでの時間稼ぎとこの安易な罠を隠すために電気を消し、相手の出方を伺った。

どうせ姿が見えても敵か見方かは分からない。話し声がしていたことから、一人でもないだろう。イミユニティーの制服を着ていようが、既に隊員に死人も出ているため簡単にその服を奪える状況にある。報告を信じるのならば隊員の多くは詰め所へ待機しているらしい。相手はテロリストか生存者の可能性が高い。上手くことが進むのなら拘束してしまおうと判断した。

物音は一切しない。距離から考えると既にこの場所へ相手が入っている可能性は高いが、これほど静かならばまだ踏み込んでいないということだろうか。

そう思った直後、鳴子が大きく揺れ音を奏でた。慌てて左の枠上

にあつた瓦礫を投げつけるが、それは命中せずに壁に当たる。

敵を見失つた友は焦りを感じたが、すぐにもうひとつの鳴子が反応した。あそこには確か予備の大きなポールが数本、ヒモで結ばれ壁に立てかけられていたはずだと瞬時に思い出し、もうひとつの小型ナイフを放つ。それは相手に当たることなく友の狙い通り、ポールを結んでいた紐を切り裂いた。突然大きな音が鳴りポールがバラける。あの数ならば一本くらいは相手に当たってくれるかもしれない。

カキンという金属音と共に視線の先で火花が散った。一瞬だけその姿が見えたが正体は分からなかった。男なのか、女なのか、一般人なのか、テロリストなのか。どちらにしても人間であることだけは確実なようだ。様子見なのか敵の数は一人だった。

再び鳴子になる。パニックを起こしてまた同じ場所へ飛び込んでくれたのかもしれない。

友は再び小型ナイフを投げつけたが、それは命中することなく壁に刺さる音がした。しまったと相手の意向に思い至る。どこから攻められるか分からないため、身を低くして襲撃に備えた。

しばらくして右方向から人が転んだような物音が聞こえた。先ほど足で移動させたダンボールに引っ掛かってくれたのだろう。そこの上にあつたはずの電灯に最後の小型ナイフを投入し、ダンボールの上へガラスの塊を落とす。しかしそれもまた回避されたようだ。信じられないような身軽さだった。

もう相手との距離は僅かだ。左手に懐中電灯を握り、右手のナイフを視線の先へ据える。こうなれば光を利用して隙を作るしかない。どんな達人だろうと、いきなり視界を塞がれば完全な対応をすることは敵わないはず。

「キンッ」という音が真正面から鳴る。こちらの罠の有無を確かめたらしい。「来る」と友は直感した。

地面から飛び上がる音が聞こえ、目の前の空気が動く。友は一步だけ後ろにさがると懐中電灯のスイッチを入れた。雷が走ったかの

ように、突然眩しい光が前方を照らす。自分の目も眩んだが、相手が動揺していることは分かった。微かにその目が閉じられている。

「もらった」と右手のナイフを突き出す。首元に添えるつもりだったが、予想外なことにそれは相手の左手によって止められた。目をつぶったままだというのにどういふ手段を使ったのだろうか。驚いた瞬間、自分のナイフが巻き取られるように回される。まずいと思った時にはもう遅く、首元に冷たい金属の温もりを感じた。

負けたことにショックを感じていると、背後から仲間の足音が聞こえた。自分がここにいると知っているからとはいえ、無用心すぎるこの感じは恐らくは後衛を務めている彼女だろう。ドジだが白兵戦の能力と生存力の高さから今回の部隊へ抜擢された年下の少女だ。電気が消えていることに驚いているのか、なにやらドタバタと暴れている。

「誰か知らないが止まれ。この男を斬るぞ」

目の前の男がぞつとするような声を轟かせた。それを聞いた少女はびくつとしたように悲鳴を上げて壁にぶち当たる。偶然それが電灯のスイッチのある位置だったようで、ぱつと周囲が明るくなった。

男と視線が合う。

緩やかなカーブを描いたショートヘアーの黒髪。獲物を狙う猛獣のように鋭い漆黒の視線。服装は黒いレインコートと一般人のようだったが、その雰囲気は完全に強者のそれだった。全身が刃になっているかのような鋭さを感じる。

何故か包帯塗れのその顔を見ると、どこかで見たことがあるような不思議な錯覚がする。もしかしたら彼はイミューニティーの隊員で、自分とすれ違ったことでもあるのかもしれない。

疑問に思った直後、彼は呟いた。

まるで悪戯を先生に叱られた子供のような表情で。

零点のテストを親に見つけたような表情で。

小さく、呟くように。

しかし、それははつきりと友の耳に届いた。

スポンジに水が染み込むがごとく。実に自然に。

「——友——……！」

「——何？」

いきなり見も知らない男から自分の名前を呼ばれ、友はたじろいだ。自分は確かに水憐島事件によって実力を評価されたが、別に本部直属の隊員になったわけでも、高い地位についたわけでもない。こんな見も知らないテロリストか仲間かも分からない男に、名前をしかもファーストネームを呟かれるような覚えは無かった。

ふと視線に先に彼が握っているナイフが止まる。自分のナイフを押さえつけるように固定されている黒い刃。すぐにそれが黒柄ナイフだと理解出来た。

黒服のナイフがオーダーメイドであることは周知の事実だ。あのナイフは黒服の一員である証明であり、そのプライドそのものだった。

ゆえに、同じ形状、同じ形式のナイフなど存在しない。

友はこれまでの任務で二回ほど黒服の隊員と遭遇したことはあるが、彼が握っているナイフはそのどれもと形状が異なっていた。

で、あるからなのに、何故かそのナイフには見覚えがあった。一目で普通のナイフとは違うと分かる殺傷能力に特化した禍々しい形ハスの実を意味するLOTUS^{ロトス}という文字が柄の隙間から覗いている。

——このナイフは……！？

記憶が、思い出が、おぞましい過去の映像がフラッシュバックする。

蛇のような腕を振るう怪物や、三本腕の化物を切り裂いた、あの

黒い刃。

そして遠ざかる小さな屋上の上で、かつて親友と認めた相手を穿ち、闇の中へと沈み込んでいった彼の最後の武器。

一緒にいた時間は三日にも満たない。しかし、短かったからこそ、鮮明に、重々しく、その姿は焼きついていた。

「何で……お前が……」

事件後の富山樹海はイミュニティーによって管理されている。曲まな直悟せさとの遺体も当然回収されているはずだ。このナイフが再び人の手に渡る可能性など十二分にあった。あくまで事件当初ならば。

黒服は死亡した隊員のナイフを全て引き取っている。

しかもその刃はオーダーメイドであるため、回収こそされるものの、他の隊員へ支給されることは殆どありえない。

これを堂々と所持し、しかも戦闘に利用出来る人間が存在するのなら、それは元々このナイフを所持していた人間だけということになる。

悟は黒服の男から貰ったといっていた。ならば、この男がその当人なのだろうか。事件後の調査で、友はあのとき関与していた黒服の人間が「キツネ」と呼ばれる人物だと特定していた。

つまり、もしこの目の前の男がそのキツネならば、イミュニティーと協力して自分たちを巻き込んだ張本人だということになる。

激しい憎悪が湧き上がりそうになった瞬間、男の瞳が誰かと重なった。

心臓が早鐘を打つ。

体の隅々まで電気が走ったかのような痺れを感じる。

——…そうだ。このナイフを持っている可能性がある人物は、もう一人いるじゃないか。

キツネなどよりも、もつとも可能性が高く、もつともそれを所持していて当然の人間。

それは、あの事件で死んだとされる少年——その人。

異常なほど早く、冷たく、恐々と思考が回転する。

まるで自分がその事実の予測がついていたにも関わらず、理解すること、考えることをこれまで拒否していたかのように。

簡単に。

あっさりと。

何の隔たりも無く。

友の中で眼前の男の顔は、曲直悟と結びついた。

「——まさか——」

富山樹海。

屋上。

黒服。

死者の船。

ナグルファル。

社会的な死人。

曲直悟。

見知ったナイフ。

悪魔LV.3。

一時間の生命。

「——悟……なのか？」

気がつくと、友はそう呟いていた。

瞬間、眼前の男が息を飲んだのが分かる。

それを見て、友はこの男が悟であると知ってしまった。

嫌でも、確信してしまった。

「……生きていたのか……？」

安堵したように、ショックを受けたように、放心したように、複雑過ぎる溜息が口から漏れる。

男はそつとナイフをこちらの首元から退けると、苦笑いのようなものを浮かべた。

今更この状況では否定出来ないと思ったのだろっ。既にこちらの名前を呼んでしまっているのだ。

観念したように彼は体の力を抜いた。

「久しぶり……だな。——友」
それは冷たくもない、恐ろしくも無い、正真正銘、三年前と同じ
悟の声だった。

とうとうバレてしまった。
自分が生きていたことが。
黒服に入ったことが。
恐る恐る友の顔を見る。

久しぶりに見た彼は、見事にイミューニティーの隊員としての威厳
を纏っていた。
三年前とは別人のように気配が鋭くなり、その表情に深みが増し
た。

彼がどのような人生を送ってきたか、その顔からありありと読み
取れる。

「お前、何で……！」
突然友が胸倉を強く掴んできた。急に喉が服で締め付けられ截は
思わず咳き込んだ。

「何でって……何がだよ？」
「分かっているくせに聞くな！ 生きていたことは素直に嬉しいさ。
だけど、何で黒服なんかに入っているんだ！？ 俺は、亜紀は、本
気でお前の身を心配した。彼女はその責に耐え切れず声まで失った
んだぞ！」

「……知ってるよ。向こうの方で待たせてるから」
顎で背後の廊下を示し、截は無表情でそう言った。
それを聞いた友は僅かに驚いたように目を大きくしたが、すぐに

腕の力を強める。

「答える。一体どういつつもりでずっと息を潜めていた。生きていたのなら連絡の一つくらい入れることはいつでも可能だっただろ」「らしくない質問だな。黒服に在籍するってことは前の人生を捨てることと同じだ。お前たちに連絡を入れれば、曲直悟という男の生存がイミューニティーに伝わる」

「本気で言っているのか？」

友が奥歯を噛み締めた音が聞こえる。

その気持ちがよく分かるからこそ、敢て截は冷静に勤めた。

「じゃあもし俺がそうしてたらどうなっていたと思うんだ？ 生存が明るみになり、黒服からは除籍され、情報漏洩阻止のために俺や事実を知ったお前と亜紀も処分される。そんな結末が良かったのかお前は家族や亜紀の身を守るために政府の飼い犬になったんだろ。俺にも守りたいものがあつた。失いたくないものがあつた。全部お前と同じだ。ただ所属している組織が違っただけさ」

論理的な返答に友は言葉を詰まらせる。これほど感情的になつている友を截は初めて見た。普段は誰よりも冷静で、周りのことを把握していた彼だというのに。

相手の生存を知っていたか、死んだと思いついていたかの違い。それがもろに二人の態度に差を作っていた。

「……変わったな」

しばらくの沈黙の後に、ぼそりと友が呟いた。どうでもいいが、彼の同僚らしき少女が先ほどから困惑したような顔で、自分と友の顔を交互にきよるきよると見ている。

「こんな世界に踏み込んで変わらない方がおかしいよ。毎日、毎日、人の死や大量の血を見る生活を送っているんだ。まともな精神じゃやってられない」

截としては当然の返答をしたのだが、友はいきなり声を荒げた。「違う、そんなことを言っているんじゃない」

まるで悲しむかのように、自分の宝物が壊された直後のように。

「昔のお前はもつと……人間味があつた。今のお前はまるで——」
言葉が吐き捨てられる。

「本当の死人みたいだ」

周りの空気が一気に冷たくなった。二人の間に重い苦しい空気が流れる。

友の目を見つめたまま、截は放たれた言葉にただ淡々と答えた。

「……否定はしないさ」

それは自分が一番、分かっていることだったから。

唐沢の指示で後方の廊下へとさがっていた亜紀は、数メートル先を覆っていた暗闇が突如払われた瞬間を目にした。

——明るくなった？ 電気……かな？

首をかしげていると、音量を極限まで落とした声で唐沢が囁いた。
「どうやら相手は人間だったらしいな。感染者の唸^{うな}り声が聞こえないし、戦闘音も複雑過ぎる」

「人間？ じゃあ、デイエス・イレってこと？」

割り込むように千秋が声を出す。唐沢は勉強を教える先輩のような感じで答えた。

「見方がテロリストかは分からない。この状況ではお互いに相手の正体をどちらともとれる。けど、明かりがついたってことは、勝負は決したんだろう」

立ち上がり耳を傾けるような動作をする。

それを見て、亜紀たちも屈めていた膝を伸ばした。

「何か、もめてるみたいだけど……」

怒鳴りあうような声を聞き、夏が心配そうに言った。大量の汗を

流し唐沢に担がれている長島も、麻生も怪訝そうな顔をしている。

「私が見て来る。ちよつと待ってて」

今の状態で一番楽に動けるのは千秋だ。彼女は軽やかな足取りで截の元へと急いだ。

耳に届くかすかな声に聞き覚えを感じた亜紀は、その声の主が友であると感じた。千秋を追い越すように走り出す。

「あ、亜紀ちゃん！」

叫ぶ彼女を無視して光が溢れる前方へ飛び出すと、そこには確かに友が立っていた。茶色の髪と細い目が妙に懐かしく感じられる。

何故か彼は截の胸倉を掴んでいた。

きつと截を敵の仲間だと勘違いしているのだろつと思ひ、亜紀は二人の争いを止めるため友に声をかけようとした。

その瞬間、まだこちらに気づいていない友が截に向つて何かを言う。

亜紀はそれをはつきりと聞いた。

「そうか。曲直悟は、もう……本当に居ないんだな」

——え？

突然場に出た知人の名前に我が耳を疑う。

一体何故、どういつ脈絡で今この場で彼の名前が出たのだろつか。截と友はお互いを敵と勘違いして戦つていたはずなのに。

彼の名を截が知っているはずがないのに。

何でそんなに悲しそつに、まるで目の前の人物が悟のことを知っているかのように呟くのだろつか。

亜紀が混乱していると、気配に気がついた二人が同時にこちらを向いた。

これまたどういつわけか、二人ともシンクロしたように、気まずそうな驚きの表情を浮かべる。

何だか嫌な気分になつたが、取り合えず自分の助けを願う声を友が聞き届けてくれたことは確かだ。極限状態のこの常世国の中で彼の存在は大きい。嬉しさから、亜紀は友の胸に飛び込んだ。

「――あ……」

その瞬間截が間抜けそうな声を出した。きっと自分と目の前の男が知り合いだったことにでも驚いたのだろう。

友は多少躊躇いを見せたのちに、そつと亜紀の体を離れた。その顔が何故か酷く申し訳なさそうだ。

「良かった。無事だったみたいだな。亜紀ちゃん」

友の口から安堵の息らしきものが漏れる。

彼の實力は良く知っている。亜紀は九死に一生を得たとばかりに嬉しそくに友の顔を見上げた。言葉が出ないのだから意思疎通を行うにはそうするしかない。きっと今の二人を傍から見れば、恋人が再開の喜びを分かち合うようにでも見えるのだろうかと、何となくそんなことを思った。

心の底から安心したように、自分の体を友へ預ける亜紀を見て、截は心臓を何者かに切りつけられたような錯覚を感じた。

社会的に死んでいる自分が亜紀とどうなる事も、彼ら二人の間を邪魔する権利が無い事も、とつくの昔から分かっていたはずなのに人間である以上、彼女が誰かに好意を持って寄り添うのは当然なことだ。それが、その相手がただ友だっただけ。

三年前の状況を考えると、彼女が友へ好意を持つことは別にかしくはないだろう。

悲しむ資格なんかない。

残念がる資格なんかない。

ショックを受ける必要などない。

そう言い聞かせているのに、どうしても、体が冷たくなっていく

感触は拭えなかった。

これ以上二人の様子を見ることが耐えられず、不気味なほど感情の籠らない声で友に話しかける。

「……よかった。どうやらあなたはイミユニティの増援のようですね。これでやっと僕の役目を終えられる」

「何？ 言っていることがよく分からないんだが」

急に敬語になった截を不思議がるように見ながら、友は眉に皺を寄せた。

千秋や唐沢たちが危険はないと察知したらしく、そろそろ廊下から出てくる。友の背後からも少女の横に並ぶように、細長い、メガネを掛けた男が現われた。

「僕は元々六角代表の指示を受けており、彼女たちを護衛していたのはただのついでです。こうして正規の増援部隊と合流出たことですし、もう一緒に行動する必要はないでしょう」

「な、ちよつと待て——」

亜紀から離れると、友は拘束するように截の左腕を掴んだ。

截は掴まれた腕を引きながら、小声で話します。

「友、俺がここに着たのはイミユニティをつぶす手がかりを掴むためだ。亜紀たちと一緒にいたらそれが敵わない。生存者の中に紛れ込もうにも、唐沢に真意を気づかれるくらいじゃ、六角にも見破られるだろう。行かせてくれ。……お前だって、心まではイミユニティにつくしてなんかいないはずだろ？」

「でも、お前……」

「これは……俺が、俺と安形さんがずっと待っていた最大のチャンスなんだ。無駄にするわけにはいかない。頼むよ」

友の言葉を遮り、截は声を少しだけ荒げた。

「安形？ 安形って……あの安形か？ あの人も生きているのか！？」

「ああ、俺と一緒に黒服に回収された。相変わらず元気に動き回っているよ」

「そうか。……良かった」

友は本当に嬉しそうに頬を歪める。よほど自責の念に駆られていたのだろう。あとき庄平が死んだのも、安形が傷を負ったのも、別に彼の所為ではないというのに。

三年前と全く変わっていない友のあり方に、截は安心した。自分とは違い、彼は昔のままだ。冷静で、正義感に溢れ、常に正しい選択をする。彼ならば亜紀の身を預けても大丈夫だろう。きっと無事に常世国から出してくれるはずだ。

改めて別れる決心を高めると、截はそつと友の手を解いた。

「何も今すぐ別行動を取るとは言いません。僕にも一応ここまで連れてきた責任がありますからね。詰め所までは護りを続けますよ」

「だが――」

再び友が截の行動を食い止めようとすると、千秋がそれを制した。「どうしたの友？　あなたらしくもない。私たちに彼の行動を制限する理由はないわ。確かに黒服である彼の實力は貴重だし強力だけど、彼には彼の任務も役目もある。無理強いはするべきじゃないよ」

二人が顔見知りであり、なおかつ三年前の事件を共に生き延びた仲間であるという事実を知らない彼女は、実に論理的にそう言った。友にしても恐らくそれは分かっているのだろうが、感情が許さないのだろう。

何せずつと死んだと思っていた相手と、やっと再開出来たのだから。

正直に言えば、截だつてもつと友と話をしたい。亜紀を守りたい。だけど、それは無理なのだ。物理的ではなく、組織的にでもなく、ただ辛いから。

これほど間近で二人の仲を見続けることが。

だから截はもう、その苦しみから逃れるためには、彼らから離れるしか道がなかった。

<第十一章>別れと同伴

職員用通路をばく進し、常世国東側の倉庫街を抜けた一行は、パ
ーティー会場と酷似した場所に出ていた。

右側の壁中央にある扉を指し、唐沢が振り返る。

「あそこが詰め所の入口だ」

「バリケードがあるけど工夫すれば通れそうだな。俺が先行する。

イミュニティーの隊員は間に生存者を挟んで様子を見ながら続いて
くれ。さと——……截さんは——」

危うく悟といいかけ、友はどもった。

その不自然さを隠すように、すぐに截が続きを言う。

「僕は扉を潜る必要がありますからここで皆さんを見守ってます
よ。何かあればすぐにお知らせします」

「……よし、じゃあ行くぞ。事前報告によれば、この辺りにも鬼の
姿がちらほら見られたらしい。気をつけるに越した事はない」

截のことを考えてか、どこか不機嫌そうに友はそう言った。

あとに続くように、亜紀、麻生、細長い隊員に抱えられた長島、
そして僅かに間を開けて千秋、イミュニティーの少女が歩き出した。
彼らの姿がバリケードの中へと消え、唐沢もすぐに歩き出そうと
する。だがそこで、截は鬼の気配を感じた。唐沢の腕を引き、背後
に縮こまっていた夏を巻き込み廊下の壁際へとさがる。

すると向かいの瓦礫が崩れる音と共に、一体の赤い塊が広場へ飛
び出した。

その鬼の出現音は勿論友たちの耳にも届いた。

「ここまで来て……！」

閉じられた扉の前で千秋が息を飲んだ。凜々（りり）しく美しい顔が悔しさに歪んでいる。

「まだ間に合う。すぐに下へ避難するぞ」

友は両手を円形の取っ手に当て勢い良く回した。車のハンドルのごとく二、三回転させると、空気の漏れる音が聞こえ、二つの領域を隔離していた壁が大きく割れた。

「向こうの三人はどうしますか？」

短髪の上にある白い髪留めが特徴的な前衛の少女、真田雫が背後を振り返る。先ほど二人の同僚を殺されたばかりなのだ。いくら悟が黒服だろうと彼の身が心配なのだろう。しかも彼女は自分たちの口論を聞いている。こちらのことを気遣つての言葉なのかもしれない。

「あつちは心配するだけ損だ。気にする必要はない。今はここに居る生存者を逃がすことだけを考えろ。鬼が下まで着いてくれば大問題になるぞ」

「でも……」

「いいからこつちに集中しろ。あいつは単独で大型感染体を殺せる人間だ。たかが鬼一匹くらい、どうでもない。——早く」

前を向くと同僚の古矢が亜紀たちを奥へと誘導していた。自分と真田の会話を一切気にしていない。相変わらず物凄くマイペースな男だと友は思った。

全員が扉を潜り抜けると、友は悟たちを待つために広場へ顔を向けた。しかし、時を合わせるかのようにさらに二体の鬼が右側の廊下から現われる。

——これは流石に不味いな。

「悟——！」

友が声を張り上げると、悟はすぐに応じた。

「ここからじゃ間に合わない。扉を封鎖しろ。俺たちは別の道を探す」

唐沢が居れば、確かに安全な場所を確保することは可能だろう。詰め所へ来ることは出来ずとも地下エリアへなら降りる方法は無数にある。夏の存在が気になったものの、友は彼らを信じることにした。

「分かった。俺たちは高速エレベータからの脱出を考えている。今地上へ出る道はそれだけだ」

そう言つて扉を閉めにかかる。声に引かれたのか一体の鬼がこちらへ向つて着たからだ。閉まる直前に前を向くと、既に彼らの姿は消えていた。

「もう、限界だ。いつまでこんな所に閉じこもっていればいい？
いずれここも奴らに侵入されるぞ」

裏声交じりの野太い声が部屋いっぱいに響いた。どうやら待機させられていた隊員の一人が叫んだらしい。

「落ち着いて下さい。先ほど救助部隊が到着したという報告を受けました。順調に進めば間もなくここへ到達するはずです」

六角の秘書である女性が、男とは裏腹に実に冷静な態度でそう言つた。

「救助部隊？ 何を言ってるんだ。あの鬼相手にたかが数人の隊員が敵うわけないだろ！ 実際既に二人も殺されたって話じゃないか。奴らは異常過ぎる。人間が敵う相手じゃねえよ。さっさと逃げよう。今ブラックドメインに入ればまだ鬼は居ないはずだ」

訓練を受けた兵士であるはずなのに、男はまるで素人のように喚き散らしている。他の隊員たちも声さえ出さないものの、殆ど彼と同じように疲労しきった様子だった。

ソファアーに腰を下ろしていた六角は誰にも見られないよう顔を下げ、静かに冷笑した。

イミユニティーの隊員と銘打とうと、六角行成のお膝元である常世国の直下隊員と自慢しようと、所詮彼らは実践経験の乏しいエリート組みだ。知識や技術さえあってもそれを生かすサンプルデータが殆ど無い。いざ災害に遭うとこの程度の人間でしかないのだと実感する。

——まあ、そういう風に僕が誘導したのだから。

ある意味望み通りの現状を見て、顔を醜く曲げる。自分の目的を達成するには、周りに優秀な人間がいることは障害にしかない。だから敢てこのように身分や建前だけが低い「でくの坊」たちを配属しているのだから。

「六角代表。ブラックドメインのシステムは完全に常世国と分離しています。普段人が出入することも無いですし、ここに居るよりはずっと安全なはずだ。行きましょう」

顔を青くして、先ほど叫んだその隊員が立ち上がった。

彼は下にさえ行けば助かると思い込んでいるようだったが、ブラックドメインは「観察」という目的上、原生の生物を自由に解き放っているサファリパークのようなものだ。万が一敷居が破壊されてしまえば、この面子では確実に全滅するはめになる。

さて、どう丸め込もうかと六角が思考を巡らせていると、タイミングよく右側の両面扉が開いた。

茶色の今風の髪型に細い目をした精悍な顔つきの男が、後ろに一般人らしき者たちを引き連れて立っている。

すぐに、それが救助隊の人間だと理解できた。

「だ、誰だ！？ お前らは」

立ち上がっていた臆病な隊員が怒鳴り声を上げる。仲間の姿すら

判別出来ないのかと呆れつつ、六角はその現われた男に声をかけた。
「――救助隊の者か？　どうやら無事に辿り着けたようだな」

「イミユニティー関東地区第十一実戦部隊所属隊員、国鳥友と申します。後ろの二人は同じく、実戦部隊の真田雫、古矢照明ふるやてるあきです。ご無事なお姿を拝見でき、安心しました」

何故か敬語に慣れていないようで、彼はぎこちなく答えた。

「ああ、良く来てくれた。どうもここに居る隊員たちは箱入り息子、箱入り娘のようだね。戦力に心許なかったんだ。これでやっと動くことが出来る。こちらの状況は全て把握しているか？」

「はい。事前に秘書の方から情報提供は受けております。脱出可能ルートは地下、ファーストブラックドメインにある高速エレベータ。脱出手段は屋上にあるヘリコプターでよろしいでしょうか」

「ああ、そうだ。ちゃんと理解しているようだな。ただヘリについてだけはすぐにここへ送れるものを別に用意して欲しい。上に置いているものがダイエス・イレいじに弄られているという可能性もある」というより、ほぼ確実にそうなっているだろう。

「勿論我々もその線は予想しております。ただいまアエロスパシアルAS332L1を付近の野営地に配備させていますので、連絡を送ればすぐに駆けつけてくれるかと」

「ほう、それは助かる。君たちになら安心してこの身を任せられそうだ。僕としてはすぐに移動を開始したいところだが、どうだね。少し休憩は必要か？　装備を整えたいのなら用意させるが」

「そうですね……ここへ来るまでに多少道具を使用しましたので、出来れば補充させて貰えると嬉しいですよ」

友は遠慮気に答えた。

「分かった。僕も命を預けるんだ。備えは多いに越した事はない。準備が出来たら教えてくれ。すぐにここを立とう」

「了解しました」

奥歯を噛み締めるような音が聞こえたが、気のせいだろう。この男が自分に敵意を持つ理由は何も想像出来ない。

満足げに頷くと、六角は自分の待機室へと足を向けた。

全ては順調に進んでいる。このディエス・イレの暴走は予想外だったが、結果的にはプラスに働いた。

あとは、キツネが来ればそれでここでの仕事は終了だ。

誰にも見られないように口の両端を横へ広げると、六角行成は己の室内へ入り、携帯電話を取り出した。

「そろそろ、彼らにも指示を出す時間か。予定通り動いてくれればいいんだが」

その表情は楽しげで、まるで誕生日を迎える直前の子供のようだった。

鬼の登場により詰め所に入ることを諦めた截たちは、取り合えず安全な場所を探し逃走を続けていた。先ほどの体育館のような場所から離れ、現在は洋服店などが並ぶ廊下の前を移動している。

「どうだ？ 着いて来ている個体は居るか」

「大丈夫です。どうやら詰め所の方に注意を引かれたみたいですね。僕が感覚が反応する範囲には居ません」

緊張の糸を緩めるように截は大きく息を吐き出した。

「取り合えず一息つける場所を探そう。こう走り回っていたらろくに頭を働かせることも出来ない」

「そうですね。下へ降りる策を練る必要もありますし、この子も体力的に辛そうだ。どこかに身を隠しましょう」

斜め後ろを追従している夏は、全身からびっしょりと汗を流し、

息も荒くなっていた。これ以上走り続ければまともに動くことが出来なくなりそうだ。

彼女が自分たちの側へ残ってしまったことは不幸としかいいようがなかったが、既に終わってしまったことにはどうしようもない。全員が無事に地下へ辿り着くために、截は唐沢の提案に賛同した。

「まだ……走るの？」

夏は疲れきった顔でこちらを上目使いに見上げる。

「頑張つて。今隠れられるところを探している。それまでの辛抱だ」
そう言つと、彼女は小さく頷いた。もう声を出すのも辛いらしい。なるべく鬼に荒らされた形跡が無い店を選ぶと、三人はその中へ入り扉を閉めた。

唐沢がどかつと地面に座り込む。

「ようやく休めるな」

夏を座らせている間に彼はタバコを取り出し、火をつけた。

「あまり吸わないで下さいよ。臭いで鬼に気づかれ易くなります」
「タバコくらいは平気だ。野生の動物とは違うからな。元々人間だったものは、人間の生活臭には疎い。付近に潜んでいる時ならともかく、こうして休憩している間くらいは何の問題もないさ」

一服したいための言い訳にも聞こえたが、彼はイミュニティーの研究員であり、戦闘経験もある人間だ。おそらく、それは真実なのだろう。

血の臭いの強いレインコートを脱ぎ捨てると、截は神妙な顔を作った。灰色のシャツが光の下に晒される。

「それで、ここから地下へ降りれるルートは他にあるんですか？」

「そうだな。現在地から考えるといくつか道はある。——この常世国はG・Cを隠すために作られた施設だ。表向きはショッピングモールでも、下には無数の実験場やそれを機能させるための水道、発電施設がある。詰め所に入れなくとも、そこを利用すれば研究所へ降りることは不可能じゃない」

「G・C？」

何かの略語かと思い、截は彼の言葉を繰り返した。

「GENESIS ジェネシス CRADLE クレイドル。直訳すると『創世のゆりかご』

ってところだな。イグマ細胞に関する全ての原点、一番最初のブラックドメインのことだ。他のブラックドメインとは違い、発見当時の状態をそのまま保っていることからそういう呼び名がついたらしい。もっとも、俺たち研究員の間ではそれはただの建前で、実際は同名の呼称を隠すための当て字みたいなものだと言われていたが」

「イミューニティーのやり方なら、それも十分ありえますね」

いんべい 隠蔽することに関してイミューニティーは他のどの組織よりも上に行く。わざわざブラックドメインとは異なった名称を生み出したということは、きっと裏に何かあるだろう。ここが超感覚者の研究を率先的に行っていたという事実も関係しているのかもしれない。

「さて……話を戻すが、降りるには勿論弊害もある。セキユリティの問題もあるし、研究所の中でも鬼の感染者が出ていたそうだ。安全が確保された詰め所からのルートとは違い、必ずどこかで奴らとぶち当たることになる。この面子では一度でも見つければ終わりだと思っただが」

「大丈夫ですよ。今なら行動を共にしている人数も少ないし、これまでとは違ってまとな戦闘行動を行えるはずですよ。夏さんを下がらせて僕と唐沢さんで戦法を行えば、ある程度は戦える」

見積もりでは、いくら知能が高かろうとあの鬼単体の戦闘能力は悪魔の第二形態程度のものでしかない。冷静ささえ失わなければ、間違ってもやられることは無いはずだ。

「そうか。お前が言うとは心強いな」

タバコの灰を綺麗にコーティングされた床に落とし、唐沢は短く笑った。

「あまり時間を空ければ屋上にあるヘリが飛んでいってしまう。詰め所の奴らと合流することを考えれば、旧地下水路を経由することがベストだな。あそこは警備員の巡回も少ないから感染者もいないはずだ。セキユリティも俺が居ればパス出来る」

「じゃあ、脱出ルートはそこでもいいですね。あなたが居て助かった。超感覚者だろうが、黒服だろうが、セキュリティだけはどうにもなりませんから」

截が肩を落として見せると、唐沢は表情を改めた。

「ただ合流してからは俺はもう協力出来ないぞ。お前が正規の仕事で来ていないのなら、六角にとっては疑いを持つ対象でしかない。当然、ディエス・イレのスパイとして殺される可能性もある」

「分かってます。だけど、ディエス・イレは最近黒服の手によって壊滅させられたばかりだ。そこを利用して上手く取り入れば……」

「無駄だ」

唐沢は断言した。迷いも疑いもないという、はっきりした口調で。「表向きには明らかにされていないが、六角と黒服には芯の方でかなり深いつながりがある。お前の言っていることが真実か嘘かは、あの男なら簡単に見破れるに違いない。そもそも、お前が『^{せつ}截』なんてあからさまな偽名を名乗っている以上、それは当然分かってるだろ？」

「……どういことですか？」

截は僅かに眉を寄せた。黒服の名前が偽名であることは、別に秘密事項でも何でもないが、何故『^{せつ}截』という名前が障害になるのか。黙っていると、唐沢は遠慮がちに聞いた。

「まさか……知らないでその名前を？——いや、イミユニティーの上部に関係する人間でないんだから当然か。しかし、偶然にしては出来すぎているんだが……」

「何を言っているんですか？」

「その名前は……」

説明を仕掛け、唐沢は口を閉じた。

「いや、これは俺の口からはいえないな。一応まだイミユニティーの人間なんだ。お前が本当にそれを知らないのなら、教えるべきじゃないだろう」

自分から話を始めたにもかかわらず、唐沢はそう言って話を切っ

た。何だかすつきりしない截は不思議に思いながらも彼の顔を見つめる。

この巳名截^{しいなせつ}という名前はキツネから貰ったものだ。もし本当に何かしらの意味があるというのなら、一体あの男はどんな目的で、どんな意図を持って、自分にこの名前を与えたというのだろう。「巳」は蛇、「截」は切断を意味する。名前そのものの意味を強引に解釈すると、「蛇の名を断ち切る」ということだ。蛇は聖書では諸悪の根源にして、アダムとイブを墮落させた存在。そしてイミユニティーに關係する截という名前。つまり、巳名截とは、「截という名前を断ち切れ」と命令されているようにも思える。

しばらく思考を巡らせたが、答えは見つからなかった。

——…まあ、いくら考えても分かるわけではないか。あの馬鹿野郎の考えていることなんて、俺に悟れるわけがない。……聞いても教えてくれそうにないしな。今度陽介さんに尋ねてみよう。

今成さなければならぬことは、この常世国を脱出すること。截は何を考えているのか全く予想出来ない自分の上司の顔を思い浮かべ、そつと溜息を吐いた。

話し込んでいる二人を他所に、夏はぐったりとしたまま今後のことについて考えていた。

イミユニティーとかいう政府の特殊部隊が集まっている詰め所に降りられなくなったことは、素直に残念だった。だが、今になつて思うとそれで正解だったのかもしれない。

あの紺色の服を着た連中は口先や態度こそ立派だが、やっていることと言えば、ただ自分たちの身を守るために集団で隠れているだけだ。生存者を助けようともせず、戦いからも逃げ、彼らが存在し

ている意味はあるのだろうか。

夏は截の方を見た。

理由は知らないが、あの男は生存者の脱出に協力してくれるらしい。最初は彼も政府の人間なのかと思ったが、それも違うようだ。これまでのことから想像すると、あの亜紀とかいう女性と何らかの関わりがあるのかもしれない。自分たちの身を守るといいつつ、截は彼女ばかり優先的に救おうとしていた。多分、自分や麻生たちがこれまで無事だったのは、そのおこぼれを貰っただけだろう。

戦闘能力でいえば、彼の力はずば抜けている。助かる可能性はミニユニティーなどよりも、彼と行動を共にする方が何倍も高い。

亜紀が居ない今なら、上手く取り入れれば自分は彼の最優先保護対象へなれる。フェミニストと言わないまでも、あの男はどこか女性に甘い。この面子ではきつと自分のことを守ろうとしてくれるはずだ。

この異常極まる世界の中で、夏の中では截と居る事が己の保身に繋がるという方程式が成立していた。願望とも、信頼とも、恐怖心からの本能的な回避とも取れるその気持ちは、いつのまにか夏の中で狂ったように膨らんでいた。

あの男と居れば助かる。

あの男の傍に居れば自分は安全だと。

例えばどんな手を使っても、夏は彼の傍に居ようと心を決めていた。それは恋愛感情でも、尊敬感情でもなく、もはや所有欲に近いもの、まるで護身用の銃やナイフを所持するような、そんな気持ちに類する感情だった。

話がついたのか、截と唐沢がこちらを向く。

夏は出来るだけか弱そうな女子高生を演じ、潤んだ目でそちらを見上げた。

「夏さん。疲れているところ悪いけど、そろそろ出発しなきゃならない。動ける？」

心配するように截が聞く。

「はい、何とか……下に行く方法は見つかったんですか？」

普段行動を共にしている友人が見れば、あまりの違いに笑い出しそうなほど大人しい態度でそう聞いた。

「ああ、だけど鬼の中を通る必要がある。多少怖い思いをさせるかもしれない」

「これまでだつて、十分怖い思いをしてきました。今更そんなもの何でもないですよ。大丈夫です。それに、いざとなったら截さんが守ってくれるんですよ？」

離婚や浮気をもつとも確実に防ぐ方法は相手に絶大の信頼を与えることだ。「浮気しないですよ？」などと頻繁に聞くことは逆に浮気を誘発させるのだが、絶大な信頼を与える事で、相手に背徳感を与えそれを許さない。夏はそれと同じような効果を導き出すために、心のそこから截を信頼しているのだという意を示した。

「……出来る限りはね」

微笑んだ夏の顔を見て、截は困ったようにそう答えた。

<第十二章>屋内の森

旧下水道に降りる道はいくつかあったが、時間や場所の関係から截たちは野園フロアを通過することにした。

屋内庭園とでも言うのだろう。小学校の校庭並みの広さがある。こは屋内にもかかわらず無数の木や草が並び、深い森の中に居るかのように錯覚させられる。天井には晴れ渡る空の絵が描かれ、それが一層場の雰囲気盛り上げていた。

「うわぁ……何だか不思議な場所ね」

こういう部屋を目にするのは初めてなのか、夏がキョロキョロとツインテールの髪を左右に揺らす。休憩したことで多少元氣を取り戻したようだ。

「唐沢さん。やっぱり奥に何体か鬼がいますね。どこか隠れられるような場所はないですか」

「右端の方に掃除用具を仕舞うための物置がある。あそこなら分かりやすいし、それなりに頑丈だ。窓がないからちよつと怖いかもしれないが、俺たちと一緒に居るよりはマシさ」

すぐに夏を隠すためだと理解した唐沢は、冷静に答えた。

「……夏さん。これから俺と唐沢さんは鬼と戦わなければならない。一人でじつとしてられる？」

窓も何もない場所で自分たちの帰りを待つのはかなりの恐怖を伴うはずだ。まだ女子高生である彼女ならばその度合いも自分よりは遙かに大きいと予測できる。幾分の申し訳なさを覚えた截は、確かめるように聞いてみた。

「大丈夫。どっちみち私は逃げ惑うしかないし、隠れられるのなら喜んで隠れます。二人が命を賭けて戦うんだから、それくらい耐えなきゃ」

あなたを信じているとでもいうように、夏がじつとこちらの目を見る。

そこまで信頼を置かれるとなんだか本気で頑張らなければいけないような気になり、截はプレッシャーを感じた。

常世国へ着た当初こそ、亜紀を守るためならどんな犠牲を払ってもいいと考えていた截だったが、その彼女が安全地点へ到達した今ならやはり人間として他人に対する同情の念が浮かぶ。いつの間にか自然に夏を守らなければという考えが生まれていた。

それはもしかしたら亜紀が消えた喪失感を埋めるためだったのかもしれない。

かつて同じように自分を守ろうとした少女と夏の顔が重なり、截は真剣な表情を浮かべた。

「少しの辛抱だ。君は俺たちが必ず脱出させるから。もう少しだけ我慢してくれ」

誰かを守るために戦うのはいつ以来だろうか。紀行園ではほとんど朝奈の自己行動に任せ、夢遊町ではキツネを倒すことしか頭になかった。何となく、懐かしい感じがする。この擬似的な森の影響かも知れない。あのときの、三年前の景色に似ているから。

——今度こそ、守りきる。

今の自分には『力』が、『知識』がある。親友を失ったときのことを思い出し、截はナイフを握る腕に力を込めた。

木の影から顔を覗かせると、二体の髑髏鬼が目に入った。感覚で知った感染者の数は三体だったから、きつとどこかにもう一体隠

れているはずだ。

「ち、よりによって髑髏鬼の方が。厄介だな」

普通の鬼ならば唐沢でも頑張れば何とかなる。だが、進化した髑髏鬼となると話は別だ。あの怪物は恐らく悪魔の第三形態を凌駕する筋力と、猿並みの知能を備えている可能性がある。唐沢のそのときは絶望に満ちていた。

「……待ってください。何か、様子が変わですよ」

感じる危機の大きさが変化していく。截がじっと目を凝らしていると、二体の鬼は順に形態を変え始めた。

——さらに進化するのか？ ——……いや、この感じは——

膨らんだ赤い筋肉が、硬質化し露出した骨が、内部へ、内部へと収まっていく。明らかに進化とは逆の反応だ。

「鬼に戻っている？ ということだ」

感染者がその細胞変質を退化させるなど聞いたことがない。截は頭をかしげた。

同じようにじっと観察を続けていた唐沢が何かに気づいたように、声を漏らす。

「あれはまさか……欠乏症か？」

「欠乏症？」

「栄養失調のことだ。もしかしたら、髑髏鬼という強力な戦闘能力を維持するには莫大なエネルギーを消費するのかもしれない。食事によって手に入れていた栄養が無くなったことで元の姿に戻ったんじゃないか。普通の感染者である悪魔が持つ特性、細胞侵食による自滅を克服しようとして生じた『性能』の一部なのか、代謝に似た機能を加えることでデイエス・イレは長期的な感染維持を可能にしたんだろう」

まくし立てるように言われたためよく分からなかったが、こちらにとって優位な状況であることだけは理解出来た。

どうやらあの鬼と呼ばれる生物兵器は一定間隔で人間を襲い続けているなければ、髑髏鬼という凶悪な力を維持出来ないらしい。この

場にエサになるような一般人が居ない以上、これは奴らを倒すための絶好の機会だと言えた。

木の表面に頬を擦り付けるようにしながら、截は視線を唐沢へと移動させる。

「危険度を減らしてくれるなら僕たちにとってはラッキーだ。最後の一体の状態は分かりませんが、あそこに居る二体なら孤立させれば倒しがある。さっさと終わらせましょう」

囁き足を前に出す。呼応するように危機の感覚が大きくなった。

「大丈夫か？」

肩を叩かれたので後ろを見ると、友が心配そうにこちらを見ていた。待機室には他に人影がなく、今は二人っきりだ。

頷くと、友は僅かに微笑を見せた。

「亜紀ちゃん。出発の時間だ。もうみんな向こうに集まっている。行こう」

どうやらばうつとしている間に置いて行かれたらしい。他に人が居ないのはその所為だろう。慌てて立ち上がろうとすると、目の前に手が差し伸ばされた。勿論友のものだ。

それを掴みお尻をソファから離す。力強く引かれ腰を上げると、何やら複雑そうな表情を浮かべた友と目があつた。

——そんなに状況が悪いのかな？

これまでのことと彼の立場から脱出の危険性について考える。あ

の赤い鬼は確かに怖いが、友ならばそれ程の苦勞を伴わず倒すことも可能はずだ。ならば、彼のこの表情の原因は一体なんなのだろうか。思い当たることといえば、一つだけだった。

イミユニティー代表、六角行成。

自分たちをこんな悪夢のような世界へ巻き込んだ組織の最高権力者。長い間恨んでいたその相手を、あるうことが自らの手で守らなければならぬこととなった彼の心情は想像するに難しくない。

慰めようと彼の肩に手を伸ばしかけたとき、突然予想外の言葉が放たれた。

「亜紀ちゃん。君は大切な人が死んだままにいるのと、変わってしまった姿を見るのとどっちが辛いと思う？」

状況に合わない謎のセリフを吐いた友の顔は真剣そのものだった。どう返答したらいいか困っていると、彼は小さな溜息を吐いて体の向きを反転させた。

「……すまない。今の言葉は忘れてくれ」

どこか寂しそうにそう言う。

返答しようにも言葉を発することの出来ない亜紀には、その問いに答える術はなかったのだが、何故か本能的に、彼が自分の返答を恐れている。答えの予測がついているからこそ、それを聞かなかつたことにしたように見えた。

自分にとってその答えに値する該当者は、一人しか思い至らない。家族はまだこの国の中で生きているし、友人も健全と一般的な生活を謳歌している。大切だと思い、かつ既にこの世に居ない人間は彼のみ。

そう、命の恩人であり、かつて自分を守るために犠牲になった青年。曲直悟だ。

——もし彼が生きていたら？

心臓を強い電流が駆け巡る。きつと自分は間違いなく会いたいと願うだろう。例え、彼がどんなに変わってしまったとしても。

三年間の付き合いで多少なりとも友に引かれ始めていた亜紀だっ

たが、そのことを考えるとすぐに彼に対する気持ちは消えてしまう。それほど悟の存在は、記憶は大きなものとなっていた。

記憶の中を逆流したところ不意に截の顔が浮かんだ。何故かその顔は悟と重なりこちらを悲しそうに見つめる。

亜紀がいきなり思い浮かんだ截をどう解釈しようか考えた瞬間、友の声が意識を現実に取り戻した。

「亜紀ちゃん？」

不思議そうにこちらの顔を見ている。

何でもないというように微笑むと、亜紀は友を追い越し部屋から出た。

僅かに浮かんだ疑問を自分で否定する。

何を馬鹿な、截が悟のはずは無いのだからと。それは空想に対する呆れというよりは、恐怖にも似た感情だったのかもしれない。

「よし、これで全員だな」

剥げ頭に太った体格。何処にでもいる普通のおじさんそのものである六角行成が、詰め所の出口の前で満足そうに呟いた。

この出口は先ほど亜紀たちが降りて着たものとは反対の場所に位置し、職員たちが職務をまっとうするための管理区画へと繋がっている。

亜紀たち生存者四名と増援部隊三名を加え、合計二十七名にもなった大所帯がそこに居た。

「生存者と六角代表は先方部隊と後方部隊の間に居てください。前からも後ろからも、我々が命を賭けてお守りいたします」

友が古矢と呼んでいた男が丁寧に言う。亜紀は彼が黒服から声を掛けられる程の実力者だと聞いていた。細い体に似合わず、ありとあらゆる戦闘技術を習得した「万能人間」だと。

当然六角もそれは知っているらしい。笑顔で頷き、声を張り上げた。

「さあ、扉を開ける。降りようじゃないか。この地獄を引き起こした細胞の起源であり、僕たちの権力を作り出した財宝の宝庫へ」
扉の両側に陣取っていた二人の隊員がそれぞれノブを握り、鍵を解除すると同時に静かに両面扉を開く。

冷たい空気が激流のように部屋の中へ入り込み、亜紀はぶるっと身を震わせた。

截が飛び出すと、すぐに鬼は反応した。自分としては完全に気配を消せていたはずだったが、鋭いものだと感心する。

両手に持った二つのナイフを斜に構え、鬼の腕が伸びるのに合わせ、その懐へ左足を差し入れた。

——中に入った。俺の勝ちだ！

左のナイフで斜め上に置かれた鬼の腕を押さえ、右のナイフを心臓目掛けて突き出す。しかし、その刃は相手の皮と肉を切り裂くだけで終わった。鬼が腰を回し、身をよじる様にナイフを逸らしたのだ。

截は軽く舌打ちすると、突き出したナイフの勢いのまま、今度は左右の手の役割を逆転させ、左のナイフを振り下ろした。まるで鬼の腕の中で舞を踊っているかのように見える。

「ザアアアアアッ！」

胸を大きく横なぎに裂かれ、鬼は悲鳴を上げて後方へ飛びのいた。あまり大きな声で叫ばれれば別の鬼が来てしまう。截は息を止めたまま前に強く足を踏み出そうとしたが、鬼が反撃してきたため、仕方が無く横に転がった。

距離に余裕が生まれたことを知った鬼は殺気を振り撒きながら前屈みになる。不意打ちで忍び込まれたからこそ押されていたものの、ここまで離れればその身体機能の差は明らかだ。どうやって截を甚^い振^{たふ}ろつか考えているかのように、鬼は舌なめずりをした。

木の幹に背を預けている獲物に向って低く、水平に飛ぶ。

起き上がった截は、避ける間もなくナイフで相手の双手を防ぐしかなかった。

鉄と腐乱臭が混じった不快極まる臭いが鼻をつく。徐々に自分の顔の横へと押されていくナイフに意識を集中させていると、鬼の口内が偶然目に入った。何か白くて細いものが歯に引っ掛かっている。血に塗れたそれは、指だった。自分の前に殺された哀れな犠牲者のもののだろう。

腕がさらに押され、鬼の歯が首筋に添えられる。截が息を呑んだ瞬間、突然その鬼の口から鋼色の刃が突き出た。どばつと赤黒い血が截の横の幹にかかる。

何がなんだか分からないといった表情を浮かべている鬼を嘲げりの目で見つめると、截は何の躊躇いもなくその心臓に黒い柄の刃を差し込んだ。声にならない声を漏らし、鬼の体が大きく震える。

「まずは一匹」

そう截が呟くと同時に、鬼は崩れ落ちた。

小さな黒い血の池が足元へと広まっていく。

「危なかったな」

鬼の後頭部から自身のナイフを引き抜き、唐沢が唇の端を上げた。事実であるため、特に文句も言わず截は立ち上がる。

「もう少し早く来てもらえると嬉しいんですが」

「何言つてんだ。分かっているだろ。これほどの相手となると、確実に殺すには獲物を襲う瞬間しかない。今のはベスト オブ ベストのタイミングだ」

何故か少しだけ楽しそうに言いながら、唐沢はナイフの血をハンカチで拭った。

「……—あと二体です。さつさと始末しましょう」

「何か反応してくれないと辛いな」

截が無表情で己の言葉を無視したため、唐沢は少しだけ寂しそうに眉を寄せた。

ガタガタと物置の壁が揺れ、夏はビクツと体を震わせた。しばしの沈黙のあとに、その原因がただの風だと分かり安心する。この屋内庭園は完璧に外の環境を再現するために、天井のあちらこちらに送風機が設置され、絶えずランダムな空気の塊を放っているのだ。倉庫に入る前に確認したその巨大な扇風機を思い出し、紛らわしいと強い怒りを覚えた。

ここからでは外の様子が全く分からない。

截と唐沢が死んでいるのかも、生きているのかも、鬼を殺せたのかも、鬼が近くに居るのかも、何も、何一つ分からない。

この地獄のお尋ねに、人間の本質を明らかにする生と死の本能の確認に、一般人である夏は心の底から参っていた。

バイオハザードに慣れている截や唐沢は気づけなかったが、こんな状況の中狭い場所にたった一人で置き去りにされる人間の恐怖は半端ではない。むしろ、外に居るよりもその度合いは大きい。

自分が狂ってしまうんじゃないかと不安になりながら、夏は耳を

押さえて隅っこに体を縮こまらせた。

力チ、力チつと、倉庫内に転がっていた時計の音になる。

何時間にも感じられるような数分が過ぎた頃、とうとう夏のは悲鳴を上げ始めた。

——怖い……怖いよ！ あいつら何してんのよ。まだ化物たちを退治出来ていないの？ それとも殺されたの……？

押さえようとしても、押さえようとしても、体の震えは大きくなるばかり。目は忙しく動き回り、歯はがちがちと鳴った。

——もう嫌だ。誰か助けて……！ 私をここから出して……！
叫びたいという衝動が湧き上がる。

叫べば楽になるという得体の知れない考えが思考を惑わせる。
荒い息を吐き必死にその衝動を抑えつつ、夏はもう限界に近いことを知った。

あの強い截が、鬼や化物を平然と倒せる截が、傍に居ないと不安でしょうがない。彼の姿が見えないとまるで地獄に叩き落とされたかのような心地がする。

——あんた強いんでしょ？ こんな状況に慣れてんでしょ？ 私を守るんでしょ？ だったら今すぐに来てよ！

思考が悲鳴じみたものへと変わっていく。既に、感情のダムが決壊する直前だった。

「早く来て、戻って来てよ……お願いもう駄目。やだ、やだ、怖いよ……！」

気がつかないうちに心の声が口から漏れ出す。それはもはや小声ですらなく、段々と大きな響きへ変わって行った。

「助けて、助けて、助けて、怖い怖い怖い怖い——もうやだああ……！」

截たちが二匹目の鬼と戦闘している最中、最後の一体——まだ「髑髏鬼」としての形態を辛うじて維持していた個体は、何処からか獲物の泣き叫ぶ可愛らしい声を聞き取った。

それは最初こそ微かなものだだったが、時が経つごとに大きくなり、すぐにはつきりと聞き取れるものになる。

強化された鼻を鳴らし、耳を逆立てる。音源の方向にあわせて目を移動し、ひとつの物体を捕らえた。

硬い塊だ。

倉庫と呼ばれる物体なのだが、今の彼にはその名を理解出来ない。ただ分かる事と言えば、あの中に自分の大好きな、細胞が、意識が、本能が望んでいるご馳走が存在しているという事実だけだ。

この強い体を維持してられる時間は短くなっている。先ほどから同属の悲鳴らしきものを聞き取っていた彼は、迷わずその固い物体を目指すことにした。

飢えを満たすために。

強くあり続けるために。

欲望を成就させるために。

そして何より、この空間に潜んでいる外敵を排除するために。

<第十三章>予想外の感染（前書き）

お久しぶりです！

書いた章があまりにつまらなかったため、書き直しを続けつつ何とか展開が進むところまで待ったところ、結構溜まってしまいました。なので一気に三章分ほど投稿しますよ！。

<第十三章>予想外の感染

大きく倉庫全体が揺れた。金属の軋む耳障りな音が跳躍する。隅っこに縮こまっていた夏は、そこでようやく自分の身が危険な状態にあるのだと気がついた。

「え、嘘？ 鬼!？」

壁一面に広がるようにして存在している正面の扉。その全体がガチャガチャと激しく揺れた。明らかに人間によるものではない。

——ほら——……やっぱり……

夏は自分の考えが正しいのだと確信した。ちょっと截から離れただけでも自分の命の灯火^{ともしび}は揺らいでいる。やはり危険だろうが何だろうが、彼から遠のくべきではなかった。もしこれがホラーゲームだとすれば、自分はプレイヤー。そして截は高威力の銃だ。その唯一の武器を手放すなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある。ゲームにおいて武器は生き残るための要^{かなめ}。それを持たないプレイヤーなどすぐに死んでしまう。

「ザアアアアアアツ——」

豪雨のような独特な声が轟く。作りこそ頑丈な倉庫だったが所詮はただの物置でしかない。その扉の鍵はごく一般的な南京錠、しかも内側から閉めることは出来ないため、現在は扉のスライドを防ぐために中に置いてあった箒で溝を押さええているだけだ。側面の壁にぶち当たってくる分なら十分に耐えられるが、扉をピンポイントで攻撃されれば実に脆い。鬼の力ならば殆ど時間をかけることなく破壊する事が出来るだろう。

「ど、どうしよう」

夏は困った。ここは密閉された狭い倉庫。出口はひとつのみ。鬼が入ってくれば絶対に自分は殺される。

しかしかといって脱出することも不可能な状況である。打開策など浮かばなかった。

「うう……截さん……！」

涙目になって『武器』の名前を呼ぶが、恐怖で声が喉に詰まる。その響きが相手に届く事はない。

ボコツと扉の一部が窪んだ。鬼の力に強度が負けたらしい。そろそろこの扉も限界のようだ。

夏は扉のすぐ横に移動した。運がよければ鬼が飛び込んできた隙をついて逃げられるかもしれない。成功する確率はかなり低いが、やれることはやっておくべきだ。正面にうずくまっているだけでは確実に死ぬ。

ボコンツ、ボコンツと、次々に窪みは増え扉の軋みも大きくなった。扉の横に居た夏の目に広がった隙間から相手の姿が映り込む。

筋肉と骨を反転させたような異様な外見。肥大化した体。それは最悪なことに鬼の進化した感染体、どくろおに髑髏鬼だった。いよいよ自分の命は絶望的になる。

暴発しそうになる悲鳴を両手で必死に押さえ込み、夏は扉の横で息を殺した。怖い、怖いと、そのひとつの単語のみが何度も何度も頭の中を駆け巡る。

——あれが中に入ってくる？ 本当に逃げられるの？

どう考えても自分の死という結果しか想像出来なかった。無事にここから脱出するためにはただ扉が破壊された隙をつくだけでは足りない。夏は視線を下に移した。鬼はこの扉がスライド式だと分かっているのか、最初は横にガタガタと動かしていたが、今は諦めたようで体当たりしかしていない。その体当たりが扉へ直撃する直前に自ら筭を外し扉を開け放てば、あの髑髏鬼は勢いのまま倒れこんでくれる可能性がある。

重要なのはタイミングだ。早いと鬼の勢いが止まるし、遅いと意味がない。まさに鬼が体をぶつけるその瞬間に開け放つ必要がある。隙間から髑髏鬼の姿を確かめつつ、夏は静かに立ち上がり、短距離

走の選手のような姿勢を作った。ドクン、ドクンと鳴り響く心臓の音を聞きながら、その時に備える。

髑髏鬼が大きく後ろにさがった。そして膝を屈める。

——今だ！

震える手で箒をもぎ取り、素早く扉を自分の方へ引いた。ガラガラという音が響き、勢い良く倉庫と屋内庭園が繋がる。

「ザアアアア！？」

髑髏鬼は全くこちらの行動を予期していなかったらしい。運がいいことに、本当に運がいいことに、まんまと頭から中へ突っ込み、コースからはみ出たレースカーを連想させる動きで奥の壁に激突した。

「うああああああああっ！」

悲鳴に近い声で走り出す。鬼と扉の間にある本の僅かな空間を抜け、外へと飛び出した。大してダメージは無かったのか、その直後に髑髏鬼が立ち上がり怒りにも似た雄叫びを放つ。

「ザアアアアアッ！」

それは二体目の鬼を倒した直後だった。截は二つの声を同時に聞き取った。甲高い悲鳴と雄叫び。

すぐに声の主悟り顔を青くする。

「不味い！ あのお嬢さんのほうに最後の一体が居るぞ」

緊張感に満ちた表情で唐沢が唸った。ここからあの倉庫までは全力で走れば十数秒で辿り着く。しかし、声の調子から考えるに夏と鬼の距離はかなりの近さだ。彼は咄嗟に彼女の死を受け入れたようだった。

間に合わないことは勿論截も分かっている。だがそれでも何もしないよりはマシだ。もし彼女が生きていたとき、自分がその場に居るといえないでは辿り着く結末は大きく変化する。諦めずにすぐに体の向きを変えた。

人工的に作られた地面を蹴り、摩擦力と行進力によって前へ己の体を強く浮かせる。そして馬車馬のごとく走り出した。

――間に合え！

速く、速く、と何度も脳から信号を飛ばす。夏の死はあつてはならない。一度自分が守るときめたのだ。絶対に助けると決めたのだ。彼女が死ぬことは己の力の無さを証明するのと同じ事。『意地』から截はどうしても彼女を死なせるわけにはいかなかった。

きやあああああつ！ と、大きな声を周囲に振りまきながら走る夏。その小さな背中に狙いを定め、他のものは何一つ目に入らないというように鬼は圧倒的な速度で倉庫から躍り出た。

数秒間の時間が経過する間もなく二者の間の距離は一メートルを切る。

目前に迫った己の死という事実に対面し、夏は大粒の涙を流した。髑髏鬼の岩のような拳が背中をなぶり頭から地面に押し込まれる。それだけで、決死の逃避行は終了した。

背にかかる重さから自分が固定されたのだと気がついた。逃げられないようにするために。

乱れた服の隙間から覗く肌から髑髏鬼の熱い体温を感じる。

小刻みに震えたまま、その醜悪極まる相手の顔から全く目が離せ

ない。

殺されるという事実を十二分に理解した状態で、残酷にも鋭く尖った歯が喉元へと近づく。

血や腐敗、唾液、それらがごちゃ混ぜになった匂いが一気に鼻孔の中を満たした。

——誰か——

辛うじて動く左手を健気に伸ばそうとするも、髑髏鬼の体が邪魔で遮られる。

あれほど叫んでいたというのに、今は一切の声が喉から漏れない。強者と弱者。慣れ親しんだその構図が完全に出来上がっていた。

中学でも、高校でも、夏はいつもリーダー格につき多くの仲間とともに、好きなようにいいように振舞ってきた。

教師も知らない学生間のみでの権力。形無き「空気」という名の強制。

自分が振るう力に耐えるしかなかったクラスメイトと同様、今まさに自分自身が拒否することの叶わない運命に直面している。

この化物は力があるからこちらを蹂躪でき、自分は力が無いからこうしていいようにされる。力無き者が力ある者に単独で勝つことなど不可能。身をもって体験している事実だ。はつきりと己の運命を認識させられる。

弱者が強者にかつには、その弱者自身が強者になるか、新たな助けを得るしか方法がない。この現状では当然どちらも叶わない。

心のどこかで、夏は絶対に自分だけは助かると思っていた。

他の誰が死んでも自分は生き残ると。

己を主人公、己を中心に据える生き方が身にしみこんでいるからこそその根拠のない確信だった。

だがもうはつきりした。今までいいように扱ってきた人間と自分は同じ。この世に主人公も脇役も存在しない。あるのはただ完膚なきまでの平等、自由のみ。

努力すれば運をよび、しなければそれは来ない。

運がよければ幸運にありつけ、運が悪ければ不幸になるだけ。

今自分はその不幸に遭遇したただけなのだと理解した。

片目にこちらへと駆けている截の姿が映る。救出しようとしてくれているらしいが、あの距離では間に合わない。

これほど死に近付こうとも、別れを言いたい人間の顔も浮かばなかった。

殆ど家におらず、会話したことも数えることしかない父。

自分の意見を押し付けるだけで、こちらの主張など一切理解しようとはしない母。

そして、力に従がっていただけの友人たち。

一体誰に別れを言えというのだろうか。

涙を流したまま、夏はそっと目を閉じた。瞼の裏は、ただただ、真っ黒だった。

「殺させるかああああ——！」

截は腹の底から声を張り上げた。

ここで夏を死なせることは、自分の三年間を完全に否定することと同じ。誰も助けられないのなら、一体なんのために黒服に入っただのだ。

物理的な距離では到底間に合わない。ならばと、截は己の持つ二本のナイフを取り出した。

唯一の武器であり、失えば自分の戦闘能力は大幅に半減する。しかし彼女を助けるにはこれを投擲するしかないのだ。大きく振りかぶり、全体重を乗せるようにしてそれを髑髏鬼に向って放った。空中へと投げ出された白柄の刃はぶれることなく直線上を進み、ま

さに今夏の喉を切り裂こうとしていた髑髏鬼の首元に突き刺さった。
「ザアアアアアア！」

飛び散る黒い血。

跳ね起きる生者でも死体でもない赤き存在。

髑髏鬼は黒つぼく濁った眼球を憎憎しげに截へと向け、夏から離れた。
「逃げる！」

残った最後の黒柄ナイフを右手に沿え放心状態にあった夏に呼びかける。彼女はこちらを見ると、はっとしたように駆け出した。

——髑髏鬼——けど、一体だけなら……！

いくら強力な髑髏鬼といえども所詮は一般感染体。巨狼や赤鬼には及ばないはず。截はこれまで多くの大型感染体との戦闘を経験してきた。それによって培われた自信が、感覚が、相手を倒せると判断した。

ナイフ一本では心許ないが、あるだけマシというものだ。後方から走ってきた唐沢に彼女を避難させるように指示し、自分は戦闘に備えて腰を落とす。

己に降りかかる危機回避を優先したのか、髑髏鬼はこちらを最優先抹殺対象に決めたようだった。相手の攻撃に備え身構えた瞬間、截は突然真横から何者かに掴みかかられた。反射的に意識を囚われ横を向くと、泣きはらした顔の夏が縋るようにしがみ付いている。何故か彼女は唐沢の方へは行かなかったようだ。

「怖い、怖い、怖い、怖い、怖いよ！ 截さん助けてえ！」

「馬鹿っ——今は——！？」

目の前に髑髏鬼が迫っているのだ。この状況で自分に抱きつくなんて、正気の沙汰とは思えない。明らかに彼女の様子はおかしい。振りほどこうとしたが、よほど強く掴んでいるのか全く離れない。それどころか一層腕の力を強めている。

——くそ、これじゃあ——……！

「ザアアアアアアア——！」

眼前に髑髏鬼の顔が大きく映り込む。

受身を取る暇も無く截と夏はそれぞれ後ろに吹き飛んだ。

「ぐううつ！？」

辛うじて受身を取りダメージを和らげる。夏は衝撃で意識を失ったらしく、ぐったりと数メートル横に倒れていた。

截はすぐに起き上がろうとしたが、そこであることに気がついた。自分の持っていた黒柄ナイフが消えている。見ると、丁度自分の位置を中心に夏と反対方向に転がっていた。

流石に素手ではどうしようもない。苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちし、截は左方向にある黒柄ナイフを必死に掴み取ろうとした。だがその手が届く前に髑髏鬼の頭が腕に激突する。今度は受身を取る暇もなく、截はさらに後方へと押し出され、その真上に髑髏鬼が覆いかぶさった。

「く——っそ！」

「ザアアアア……」

唐沢が髑髏鬼の背後に突撃する。先ほど同じように截が襲われている隙をつこうとしたのだ。だが髑髏鬼は敏感にその気配を読み、振り返りざまに唐沢の胸を足で蹴り上げた。

あの剛力をもろに胸に受けた唐沢は、口から血を吐きながらボロ人形のように吹き飛ばされる。

「唐沢！」

どう見てもあの一撃は重い。截は唐沢の身を案じ、大声を出した。両手は髑髏鬼の腕を押さえるのに使用され、両足は相手の足によって固定されている。頼みの武器は既に遙か遠くにあり、自分が戦える手段はない。髑髏鬼の首元には白柄ナイフが突き刺さっていたが、腕を伸ばした途端に噛み付かれる恐れがあるため、それを実行するのは自殺行為と同じ。しかし何も出来なければ殺される事は確実だった。

「截……—！」

横に転がった体勢のまま、唐沢は首を動かすことで何とか截の姿をその目に捉えた。彼と髑髏鬼が接触してから約四秒。このままでは感染する。

ここで截を失う事は戦力的にも生存確率的にも極めてマイナスだ。何より、見方を一人減らして敵を一体増やす結果になってしまう。

唐沢は自分の体を確認した。痛みは強い。だが見た目ほどのダメージは受けていない。吐血したのは口の中を歯で切ったからであり、内臓出血を起こしたわけでも、肋骨が折れたわけでもない。今すぐに動くことは出来ないが、数分もあればパニック中の神経も落ち着くことだろう。

左足を伸ばし、截の落とした黒柄ナイフに伸ばした。血のこびり付いた靴先でそれを自身の体のほうへと近づけようとする。

「ぐうっ!？」

無理な動きで自然に声が漏れた。じゅんとその存在を主張してくる痛みを精神の力によって無視し、やっとの事でナイフを掴み取る。

このナイフを投げて、髑髏鬼と肉迫している截が受け取れるとは思えない。だが、チャンスを作ることくらいは出来るはずだ。その僅かな隙に彼が奇跡を起こすのを期待するしかない。

右肘で体を支え、上半身を傾ける。そして投げるといふ動作を行う事で発生する強烈な痛みに備え、歯を食いしばった。

流石は髑髏鬼といったところだ。截の腕はグイグイと押さえ込まれていく。

もしかすれば感染するよりも速く喉を食いちぎられることになるかもしれない。純粹な力で対抗する事に意味がないと判断した截は、息を吐きながら両腕の力を抜いた。それによって髑髏鬼の腕がガクンと下方向に加速する。本当ならば喜ばしいことであるはずだったが、髑髏鬼は自分の意図していない截の動作に反応しきれず、反射的に己の腕を体の内側へ引こうとした。

その引く勢いに合わせ、截は全力で腕を突き出す。するとすぐにお互いの手は最初の位置に移動し、押し合いは振り出しに戻った。安心するのも一瞬。これがただの時間稼ぎにしかないことは截にも分かっている。相手の筋力を考えれば、一秒もせず先ほどの位置に戻る事は明白だし、何よりこの赤い腕の下から逃れることが出来なければどちらにしる自分は負ける。

頭上から降り注ぐ死臭に満ちた唾液に嫌悪感を抱きながらも、己の死をリアルに感じ始めた。

感覚があっても、体が動けなければ意味はない。絶対危機回避感
は相手の攻撃を察知することに特化しているだけで、察知出来てもそれをかわせる状態になれば何の意味もないのだから。

独力だけでこの危機を脱することは不可能。截は神頼みにも似た気持ちで唐沢のほうを見た。一瞬。僅か一瞬でも鬼の意識が自分から離れれば、あの首元にある白柄ナイフを手に入れることが出来る。武器さえ得れば、戦うことが出来る。

何かが光った。鋼色の輝き。金属だけが持つ美しき冷たい伶俐な輝き。

それが唐沢の持つ黒柄ナイフから放出されている光だと知った截は、咄嗟に右手を髑髏鬼の手から離し、体の内側へ伸ばそうとした。つかえの取れた髑髏鬼は、口を大きく開けて截へと歯を突きたてる。裂かれる筋肉繊維。薄い皮。噴出す血液。

辛うじて首への直撃は回避出来たものの、髑髏鬼の歯はかなり深

く截の肉を穿^{うが}った。

再びその顔が持ち上がる。今度は間違いなく首を切り裂きに来るだろう。

だが、その前に唐沢の放った黒柄ナイフが鬼の腕に食い込む。僅かに切っ先を差し込む程度の損傷しか与えられない攻撃だったが、截にはそれで十分だった。髑髏鬼の頭が後方へと跳ね上がる。

先ほどの動きの延長線上で髑髏鬼の左側に刺さっている白柄ナイフを掴み、一気に下へ引き下げる。渾身の力を込められて切断されたその傷口からは、ドバドバと数多の黒液が漏れた。

「ザアアアアー!？」

車のクラクションのような、瞬間的な叫び声。白柄ナイフから逃げるように大きく体を後方へと逸らした髑髏鬼の隙を狙い、截はもう一方の手で床に落ちかけていた黒柄ナイフを掴み取り、差し込んだ。再び流れる漆黒の流体。浮き出た肋骨に遮られたせいであまり深く刺すことは出来なかったが、それでも鬼を引き剥がすには十分な反撃だった。

髑髏鬼が後方へと飛びのくと同時に、截も跳ね起きその後を追う。相手が動揺しているこのチャンスを逃せば、あれほど強力な髑髏鬼を倒せる機会など殆どない。噛まれた肩の痛みなど意に介さないように意識の外に追い出し、血まみれの体で膝を伸ばした。

振りぬく白い柄の刃。しかし届かない。

続けて伸ばされる黒い柄の刃。これは僅かに相手の腹を薄く切るだけで終わる。お互いの脚力のさが大きく影響したようだ。足歩分の距離が足りない。

四肢を大地につけた格好で、大きく唸る髑髏鬼。胸から流れる黒い自身の血を顧^{かえり}みてその表情を怒りに染めた。

——傷を負ったのはお互い様だ。ふりだしに戻っただけ、まだ負けたわけじゃない。

荒い息を吐き、出血の治まらない肩をチラリと見た後に、截はそう己を奮い立たせた。弱気になつては負ける。どんなときも死を覚

悟した瞬間、本当に死への行進が始まってしまふ。自分は死者も同然だが、それはあくまで立場としての話。今この肉体を失うわけにはいかない。キツネを、この異常な世界を終わらせなくてはならないのだから。

まだ勝負はこれから。

これからが本当の戦い。

そう決意を新たにした途端、奇妙な感覚が左腕に走る。

眉に小さな皺を作りその部位を眺めた。嫌な感覚が沸き起こる。

それはよく知っている感覚。

自分が倒し、殺してきた相手から感じる身に染みた敵の気配。

截の左腕、丁度鬼の腕と接触していた部位が、黒く染まり出していた。

<第十四章>地下へ

——感染——！

シンプルかつ大きな身の危険が全身の神経に飛来した。

赤く、黒く、染まっっていく左腕の皮膚を捕らえ息を呑む。瞬時に対処をしようとしたが、肩の傷が唸り意識を中断させられた。その焦りの間を縫うように髑髏鬼が距離を詰める。

イグマ細胞に感染したただの悪魔は、安定した細胞を求めて目の前の命を摘むだけの言わば単細胞生物のようなもの。鬼はそれをデイエス・イレが兵器として強化、改変した化物だ。

簡単な状況判断を行える知能。凶悪な感染効果。そして他に類を見ない異常なまでの殺人性能。普通の人間ならばどうあがいても、どれほど頑張っても、絶対に殺す事の出来ない存在。その最終形態が、髑髏鬼だった。

一歩反応が遅れた截は相手の攻撃を完全に避けることが出来ず、右の腰を爪によって切り裂かれた。灰色のシャツがうつすらと赤く染まる。衝撃によって截の体の崩れがさらに大きくなった。ガクツと膝が曲がり寄りかかるように髑髏鬼へと近付く。

「ザアアアアアア——」

眼前の獣が口をこれでもかと開き喉を震わせる。

次の瞬間、殺し合いは終幕へと加速した。

「同胞から連絡がありました。無事、内部に侵入出来たそうです」

緩やかに流れる地下水道の横。タヌキは満面の笑顔を背後へと向けた。

コンクリートの壁に手をつきながら、東郷はそうかと小さく頷く。「なんだがあまり嬉しそうには見えませんね」

その表情が妙に真剣だったため、気になることでもあるかとタヌキも表情を改めた。

「配置した駒が予定通りに動いただけだ。嬉しいも何もない。むしろ、あれほどの感染兵器をばら撒いているのにそうならないほうがおかしい」

「兵器……鬼のことですか。確かに、あれの最終形態には私でも勝てるかどうか自身がありませんからね。黒服の人間ならまだしも、ここの墮落しきった隊員には手も足も出ないでしょう」

常世国へ投入する前、タヌキは一度だけ性能調査として鬼の戦闘実験を目にしていた。捕虜として捕らえていたイミユニティーのメンバー五人を、あの怪物は僅か十秒で全滅させて見せたのだ。あれはまさに兵器としての技術に特化したディエス・イレの、最高傑作とも呼べる殺人人形だった。

「悪魔の最終段階が持っていた一時間の命という欠点も、アポトーシス（自己細胞死）と細胞増殖を繰り返すことで克服している。ただその影響で定期的に栄養を得らなければ欠乏症になってしまうのだがな」

「それは仕方のないことでしょう。鬼は『赤鬼』の技術を元としている。その開発者である高橋志郎が行方をくらましてしまったにしては、十分すぎるほどの成果ではありませんか？」

まるで自分が開発したかのように実に自信満々に自慢気にタヌキは声を張った。それを冷めた目で捕らえ、東郷は何かを思い出すように上を見た。

少しだけ伸びた顎鬚に片手の指を乗せる。

「またその表情ですか。さっきから何なんです？ 何か気になることでも？」

自分にはこの作戦が失敗する要素など何一つ見当たらない。心の底から不思議そうにタヌキは尋ねた。

「……紀行園のことを思い出してな」

不意に東郷が口を開く。そこから漏れた言葉は妙に静かだった。

「あのとき俺は意識を失い、体を満たすイグマ細胞の本能のままに暴れ回った。誰もが予想もしてなかった暴走だ。まあ、実際はとある老婆が起こしたのだから」

ライオンの鬣のような髪型をした厳つい女性の顔を思い出し、タヌキは苦笑いした。

「俺があのまま暴走を続けていれば、お前が行った救出作戦は無駄になっていただろう。あのとき自分の意思を取り戻せたのは本当にっていた」

「確か、高橋志郎の雇った黒服の連中によって止められたのでしたよね。人名の特定は出来ていませんが、まだ新人の者たちだとか」

「そうだ。奴らの攻撃を受けていくうちに俺は意識を取り戻した。一度前頭葉を穿たれた影響かもしれん。本来ならばそれ以上戦う必要は無かったのだから。つい楽しくなって相手をしてやったよ。その結果まんまと出し抜かれて麻酔を打ち込まれたのだから。油断していたとはいえ、あれは俺の敗北といって間違いないだろう」

タヌキは東郷が何を言いたいのか分からなくなった。気になることは鬼の暴走なのだろうか。

こちらの考えを読んでか、東郷は答えを述べた。

「今夜の初期、いやもう昨日か？ とにかく数時間前……まだ感染が広がる前に、俺はあのとき紀行園で遭遇した黒服の男の姿を見た。向こうは俺が赤鬼だとは知る筈も無いから、驚いていたようだったかな」

「黒服の男……？ ここは常世国ですから六角が依頼したメンバーが居ても何の不思議もないですが……まさか、気になることはその男のことですか？」

「——あの戦い方には覚えがある。キツネの手の者かもしれない。

奴の身の上はお前も知っているだろう。この時期にここにその関係者がいるということは、間違ってもディエス・イレ側ではない」

確信を持っているというように東郷は目を細めた。

キツネの関係者と聞き、確かにそれならば警戒するのも当然だとタヌキは納得する。何故ならばキツネは――……

「まあ、いくら黒服だろうがこの状況ではなにも出来ないだろうよ。ただ、万が一のこともある。一応意識の中にその存在を置いておけということだ」

「分かりました。計画の障害になりそうならば、すぐに抹殺しましょう。今を逃せば我々がイミュニティーを倒す機会など二度とありえないのですから。鬼が徘徊している今、そんなことはいくら頑張っても不可能でしょうけどね」

「そうだな。生身の人間が銃も無しにあの鬼を倒す事は不可能だ。もし殺せるのなら――」

東郷は無表情のまま前を向いた。

「そいつは人間じゃない」

膝の力が抜けかけ、髑髏鬼の顔をキスするほどの近さで見上げたとき、截はふいに強い衝動に駆られた。

嫌だと。

死にたくない。

生きたい。

そう、根源的な感情が湧き上がったのだ。

恐怖から生まれる感情の激流が頭の中を支配する。

正常な判断を狂わせる。

この地球上に生息する殆どの生物は、自分の死を来るべき死として自覚出来た。

己の命を奪おうとする相手との力の差を受け入れ、諦めることが出来た。

勝てないとわかれば、自分が死ぬとわかれば、そこで抵抗を止め大人しく殺される。

それが自然の摂理だから。

弱肉強食としてこの世界に定められたルールなのだから。

だが、人間は違う。

例え死のその刹那であつても、助からないとわかっていても。

醜く。

哀れに。

無駄に。

無意味に。

必死に足掻くのだ。

それが、動物と人との違い。

人は欲望によって己の目的を決める。欲望によって、己の人生に意味を成し、それに向って走る。化学反応の結果でしかない自分の存在を無意識に誇る。

人間にとって、生きるとは欲望を作り成し遂げることだ。

欲望の大きな者、それを得ろうと最大限の努力をするものが、新たな発展につながりまた成長することが可能となる。どんな業界でも、どんな環境でも、どんな世界でも、目的を指す決意とそれを成就せんとする意思の力が強い者のみが、本当にその目的に歩み寄る事が出来る。それが人間としての純粋な『強さ』。死を前にしても生にしがみ付こうとする人間だけが持つ強靱な力。

ありとあらゆる意味での本当の「生存力」なのだ。

そう、本来は――

落ちようとする臉をカツと開く。

誰もが、人間ならば、必ず生への執着に支配されるこの状況で、截は寒気がするほど『冷静』に行動した。それはもはや人間が持つ生存力とはまったくベクトルを異にした、得体の知れない心の在り様が成せるワザだった。

頭を砕こうと髑髏鬼の拳が真上から叩き落される。常人なら一撃で脳天を破壊されるそれを皮一枚でかわし、よろけていた後ろ足に力を込めた。

続けざまに暴風雨のごとくスウィングされる髑髏鬼の逆手の爪。頭を咄嗟に後方へ引く事でぎりぎりで避けた。喉仏の前に薄っすらと赤い線が光る。

———！

連撃が終わった隙をつき、腕に広がるうとしていた黒い領域を、黒柄ナイフによって皮ごと薄く吹き飛ばす。大量の血が飛び、赤い肉が体内から露出する。

髑髏鬼の膝が持ち上がりこちらの顎へと接近した。合わせるように自分の足をその上に置く。

跳躍。

空気を体で裂きながら一瞬だけ重力から開放される。赤い顔がこちらを向いた。迎撃しようと腕を構える。空中では回避が出来ない。髑髏鬼は感情を爆発させるがごとく拳を打ち出す。

截は相手の髪を掴んだ。鼻頭にぶつかる岩のような固い感触。腕を引きそこを支えに体を回転させる事で、ヤスリのように頬を削りながらその拳が真横を通り過ぎる。髪を掴んだ腕を振りぬき一気に髑髏鬼の背後へ抜けた。視界一杯に広い森の世界が映る。

迫る地面。

遠ざかる赤い魔物。

着地と同時に背後の動きが止まった。腕を伸ばしきった格好で固まる。

一瞬の間。

腰を落としたまま、截は黒柄ナイフについた血を振り払った。同時に、髑髏鬼の首から何かが噴出し、滝のように周囲に降り注ぐ。髑髏鬼はぐるぐると何が起こったのかわからないように目を回し、背後の黒い獲物を振り返る。

その瞬間、全ての神経接続を失い、ゆっくりと地に伏した。

「馬鹿な……」

唐沢は声を失った。

今、目の前で起きたことが信じられない。

あの男は、截は、全ての攻撃が即死級の髑髏鬼の攻撃を紙一重でかわし続けたあげく、その隙間を縫って相手の命すらも刈り取ってしまった。

自分が隙を作れば何とかしてくれるかもしれないと思ってはいたが、それはあくまで何とかする程度の期待だ。まさか、真正面から一対一であの化物に打ち勝つなどとは夢にも思わなかった。

一歩間違えば、一瞬でも判断を狂わせれば、恐怖という感情に支配されれば、きつと截は死んでいただろう。

まるで何メートルも離れている針に糸を通すがごとく、実に正確に的確に彼は淡々とことを成した。

先ほど貴婦人を殺したときのことも踏まえ確信する。

肉体的にではない。

技術的にでもない。

心のあり方として、奴は到底人間ではないと。

それを凌駕した、淘汰した「化物」だと。

——これが……黒服か……！

イミユニティーやディエス・イレが、情報漏えいの危険を冒してまで使用したい勢力。多額の資金を失ってまで依頼したい存在。その本当の実力を、価値を、唐沢は初めて理解出来た気がした。

「ぐっ……」

膝をついた格好で截が唸り声をあげる。

そこでやっと彼も多くの損傷を受けていたのだと思い出した。

「大丈夫か」

小走りで駆け寄ると、截の体はあちらこちらに血のにじみが見えた。肩と右の腰。そして自ら肉を切り離れた左腕の表面。肩以外はそれほど深い傷ではないが、早く対処しなければ多大なハンデを負う事になる。

科学者としての活動が多かったが、根本的には唐沢は医療のスペシャリストだ。慌てることなく冷静に截に近付き、その怪我の具合を確認した。

「……出血を止める必要があるな。腕と腰はともかく、その肩の傷は不味い。何か持っていないか？」

「生憎……そういう物は丁度切らしてましてね。どこかの店から……探すしかない」

痛むのか、截は辛そうに声を出した。

ここから医療道具がある場所まで戻るのは時間的にも実力的にも厳しい。どうせ地下に降りればいくらでも手に入れる事が出来る。今この場にあるのもので応急処置ができないかと周りを見渡すと、唐沢はピッタリな道具を見つけた。

「お前のその顔の包帯、ちょっと借りるぞ。別に大した怪我をしてるってわけじゃないんだろ？」

「え？ いや、これは――」

何だか截は抵抗しようとしたが、唐沢は強引にその包帯を巻き取った。すると、何の損傷もない綺麗な整った顔が現れる。

「何だ？ 怪我なんてしてないじゃないか。何で包帯を巻いていたんだ？ 顔も見知りでもイミユニティーの中に居たのか？」

黒服として行動していれば、ディエス・イレ側についた時にイミユニティーと交戦することはいくらでもありえる。そのときの相手がこの常世国にいるのかと唐沢は勝手に判断した。

「……よし、これでとりあえず血は止めた。量的な関係から肩の傷しか塞げなかったから、腕と腰はシャツを千切って塞ぐしかないな」

何だか気まずそうに自分の顔を弄っている截を片目に、唐沢は彼にその灰色のシャツを脱ぐように促した。血を垂れ流しでは截としても困るのだろう。彼は素直にそれを脱ぐと、上半身を白いＴシャツ一枚にして唐沢の成すがままになった。

「夏さんは大丈夫なんですか？」

遠くの方で伸びている少女を眺め心配そうに截が聞く。唐沢は確認もせずに答えた。

「あの娘なら心配ない。ぶつかっただのは肩だし、ただショックで意識を失っているだけだな。……どうする？ここに置いていくか」「どうという意味ですか？」

「先ほどの様子、あの娘はもう狂気に飲まれている。連れて行けば何をするかわからないぞ。邪魔なだけだ。鬼が入れないような安全な場所に閉じ込めておけば、数日後くらいには髑髏鬼の殲滅隊なんかが発見してくれる。別に無理に連れて行く必要はないんじゃないか？」

唐沢は極悪人ではないが、冷酷だった。正直に言えば彼女を殺すべきだとも思っていたが、これまでの截の行動からそれを言っても意味がないと判断し、こういう結論を抱いた。

天井にある送風機から生暖かい風が降り注ぐ。

処置を終えられた截は力ない動きで立ち上がると、迷わず今の唐沢の言葉を拒絶した。

「僕は彼女を守ると誓いました。彼女を守る事は僕のプライドにかかわることだ。あなたの言っていることはわかりますが、絶対にそれは出来ません」

「後悔することになるぞ」

夏は明らかに正常ではない。まともな精神状態を失っている。いつまた先ほどのように足を引っ張るのかわからないのだ。唐沢は最後の確認のつもりで、強い口調で聞いた。

だが截は躊躇わずに答えた。

「しませんよ」

二本のナイフを腰に仕舞い、自分に背を向ける。

「さあ、地下下水道へ向いましょう。入口はすぐそこだ。……彼女が意識を取り戻すまで、その体を運んでもらえますか？　僕はちょっと今の状態では厳しいので」

野園フロアの置くに光っている非常出入口の看板を見つめながら、どこか憂いを帯びた声で截はそう言った。

「おいおい、お前が守ると言っただから、運ぶのもお前がやるべきじゃないのか？」

冗談交じりに唐沢は不満を言ったが、答えは返ってこなかった。

ただ異様な雰囲気の漂う背中だけが、目の前にある。

その空気はまるで彼自身も狂気の中に足を踏み入れているかのような、そんな姿を連想させた。

<第十五章>急転する事態？

非常出入口と書かれた扉をくぐると、螺旋階段があった。白い手すりと金属製の足場がかなり急な角度で下に向かって伸びている。

——お嬢さんをつれてここを降りるのは結構重労働だな。

自らの背中に寝ている夏を省みて唐沢は大きな息を吐いた。

一段一段降りることに寒さが増した。まだ秋だというのかすかに息が白く染まる。

ところどころ截の手を借りてなんとか降りきったところには、唐沢の頬には無数の汗が張り付いていた。

そのまま古いコンクリートに囲まれた通路を進むこと数分。二人の耳に水音が聞こえてくる。

「ルートは完全に把握しているんですか？ 地下水道はめったに職員が訪れる場所じゃない。ちゃんと研究施設への入り口を見つけれれるんでしょうね」

「大丈夫だ。この地下水道は研究所の上に常世国という、擬態施設が作られる前からあった場所。本来はこここそが正式な研究所への入り口だった。もっとも利用されたのは最初の数年だけだな。」

「俺は研究所の主任になる前まではいち職員として通っていてね。

何度もここを歩いていた。迷うわけがないさ」

「でも——あなたは戦闘員としての経験もお持ちのはずだ。どうやって職員と戦闘員との仕事の両立を？」

截はふらつき、寄りかかるように壁に手をついた。

「簡単なことだ。俺はスパイ対策の一環として研究所に送られていたんだよ。当時は今よりもセキュリティーが甘くてな。簡単にスパイも入り込むことが出来た。戦闘能力を持ち、かつ医学分野にも精通している人間として、俺を含め多くの隊員が配属されたんだ。所

謂、警備員兼、職員つてところか。……本当は一年程度で任務は終わりだったんだがな。俺はそっち方面の才能があったらしくてね。そのまま研究員として昇格してここに残り、いつの間にか主任にまでなってしまったんだ」

「昇格……黒服では絶対にありえないことですね」

截はそれ以上なにも聞かず、前を向いた。傭兵のような役割を持つ黒服メンバーは、あらゆる分野における知識を広く浅く学んでいる。必要とあれば、すぐにでも自分に近い技術も手に入れるだろう。だが、所詮彼らはどこまでいっても借り物の兵士。役目が終われば黒服へとかえる。彼らが任務先の仕事場へ帰化するなどありえない話だった。

話題に起こされたかのように、懐かしい記憶が唐沢の頭に蘇る。

——そうだ。あのときここに残るなんて言わなければ、俺は今頃

……

何故自分は常世国に残ったのだろうか。無意識のうちに口から出た言葉。気がつけばここに残ると言っていた。

もしかしたら、自分は生と死にあふれた現場から離れたかったのかもしれない。今思えばあのとき、この残留職員として認定されたとき、自分は確実に喜んでいて。死の恐れのない研究員という肩書きに満足していた。

そう、ほんの数ヶ月前、彼女の助けを求める声を聞くまでは——
「唐沢さん」

截がこちらを向き前を指差した。

つられてそちらを見ると、横幅五メートルほどの大きな地下水道が自分たちが歩いてきた通路と交差するように、真一文に広がっていた。

「どっちに行けばいいんです？」

「左だ。右は常世国の西側へ戻ってしまう。左に進むと行き止まりがある。確か、その付近に研究所への入り口があったはず」

「……急ぎましょう」

截はうなずくと足を速めた。

流れの無い腐った水を横に進み続ける。臭いがかなりきつかったが、鬼の口臭よりはいくらかましだ。しばらくすると唐沢の説明通り奥のほうに行き止まりが見えた。コケの生えた汚い壁が小さく瞳に写る。

——あと少しだ。

僅かな距離まで迫った研究所への入り口を前に截は拳を握り締めた。

あそこを抜けた先に、進んだ先に、自分が探し求めていた答えがある。超感覚者計画の実態とその作られた理由が、きっとわかるはずだ。

一步一步進むたびに体中の傷が軋みをあげたが、痛みを感じれるということはまだ命に別状があるわけではない。もっと重い怪我など何度も経験している。

腕も動く、足も動く、首も回る、声も出る。なら、何も問題など無い。

先ほど急遽しばった傷口。そこからうつすらと血がにじみ出していたが、截はまったく気にせず体を動かし続けた。

もう行き止まりまで数メートル。あと少しで研究所へ入れる。だがそこで、不意に斜め前から声が聞こえた。

「忍び込ませていた同士から連絡が入りました。六角行成は無事に研究所内へ進入成功したもようです」

——っ誰だ!?

截はとつさに壁に張り付き、息を潜めた。数メートル送れて歩いてきた唐沢も足を止める。

行き止まりとなった場所。その横にある部屋一個分ほどの窪んだ空間に、二人の人間が立っていた。

強い癖毛を肩まで垂らした、背の高い目つきの悪い男と、小太りの達磨のような体格をした、二十台後半か三十台前半の背の低い男。小さいほうは知らないが、あの背の高い男には見覚えがある。いや、無いほうがおかしいだろう。全国に指名手配され、イミユニティー最大の脅威だといわれているディエス・イレの代表。紀行園をアジトに国家転覆を狙い、今回の事件を起こした全ての現況。つい数時間前にも自分自身の目で見た人物——東郷大儀。

「ならばそろそろ頃合か。六角が下へ到達したという情報はイミユニティーの本部にも伝わっているはず。今騒ぎを起こしても、しばらくの間は奴らも対処が出来ない。……よし、ティュフォンを動かす。この常世国の壁に穴を開けるぞ」

達磨体型の小男のセリフに頷き、東郷が目目の前の分厚い扉の前に手を伸ばす。そこには小さなキーボードのようなものがあり、それによってセキュリティーを確保しているらしかった。

東郷は懷から携帯電話ほどの機器を取り出すと、そのコードの先を扉に括り付けてある機械へと繋いだ。数回ボタンを押すとその機械の上側にあるランプが点滅し、カチツという音が扉から聞こえる。ロックが解除された証拠だ。

「ティフォンが感染者たちを外に放出するまで六角をこの常世国の中に留まらせる。予定通り、絶対に殺すなよ」

自分たちの仕事を確認するように一度振り返ると、東郷はそのまま扉の反対側へと踏み出そうとした。

たった今耳に入った言葉が截の頭の中で駆け巡る。

——ティフォン？ 放出？ 何を言っている……？

やり過ぎすべきか、ここで東郷を捉えるべきか。どちらの判断を下すのが正しいのか、截は迷った。

こちらには意識を失っている夏がいるし、自分も唐沢もそれなりのダメージを負っている。今東郷たちに挑めば勝てるかどうかはわからない。

だが――

昨日の夜に目の前で起きた惨状を思い出す。突然出現した感染者。瞬く間に広まったバイオハザード。

あの男たちをここで見逃すことがいかに危険であるか、^{つちか}培われた勘が警報を鳴らしていた。

「……唐沢さん。夏さんを下に。奴らはまだこっちに気づいていない。一瞬で制圧しましょう」

「大丈夫か？ 相手はあの東郷だぞ」

東郷大儀は長年イミューニティーの探索を続け、かつ先日 of 黒服による総攻撃を生き延びたほどの猛者だ。唐沢のその心配はもつともだった。

「ここで逃せば次にいつ会えるかわからない。感染者がいらない今のうちにけりをつけるべきです。勿論、リスクも大きいですけどね」

どっち道脱出するためには彼らとの戦闘はさけては通れない。東郷は六角行成を殺したいはずなのだから。

「……仕方が無い。ここまで一緒に行動したついでだ。付き合ってやるか」

半ばあきらめたように唐沢がそう言った。夏を下ろし、手の関節にある気泡をポキポキと鳴らす。

「三秒数えたら出ます。僕が東郷を。あなたはあつちの小さい男を」
截は両手にナイフを握ると、腰を屈め前傾姿勢をとった。

「一、二、――三！」

バツつという風を切る音と共に、截と唐沢が二人の背後に飛び出した。気配に気づき、東郷と小男が振り返る。

「っち——!？」

唐沢の突き出したナイフを片手で逸らし、小男が舌打ちした。まともに相対すればそれなりの実力を持つていそうな人間だったが、不意打ちにはどうしようもない。完全にその動きを予想していた唐沢に足を絡められ、転倒し背を奪われた。

一方東郷は何の抵抗もすることなく素直に截のナイフを己の首元へと許した。襲撃した二人を見て、楽しそうに笑みを浮かべている。「東郷大儀だな。武器を捨てて伏せろ」

相手の表情に不快感を抱きながらも、截は威嚇するような声でそう命令した。下水道の中にその凜々しい声が木霊する。

こちらの顔をじつくりと眺め、東郷は口を開いた。

「黒服の人間のようなだな。六角の手の者か？ わざわざ俺たちを捕まえるために奴と別行動しているとは、随分と主人の安全を度外視しているんだな」

「伏せろと言っているんだ。聞こえないのか？」

截がちよつとでも手を引けば頸動脈を切り裂かれるというのに、まったく恐怖することなく東郷は笑みを浮かべ続けた。

「……お前、紀行園にいた男だな。やはり見覚えがある」「なに？」

紀行園では東郷になど遭遇していない。もし彼があの場合にいれば、大西園長の暴走を放っておくわけがないはずだ。截は意味がわからず目を細めた。

「わからないか。まあ、無理も無い。あのとき俺は半ば意識を失っていたからな。だが——」

ゆつくりと東郷の右手があがる。截はとつさに黒柄ナイフを彼の首に押し付けた。少しだけ血が漏れる。しかし平然と、東郷は腕を上げきった。

「これで思い出すだろう」

ドンッ！ という衝撃が截を襲った。いきなり天と地が反転する。何を考えるまもなく、目の前に汚れた水面が映り、一瞬にして全身を冷たい液体が覆った。

「截！」

唐沢の注意が反れる。小男はその隙を逃さず、彼のナイフを素手で掴み取り寝技を仕掛けるようにその位置を逆転させた。

「くそっ——……！？」

下水道の中から水に濡れた顔をあげると、截の目に信じられない光景が飛び込んだ。

先ほどまで普通の人間だと思っていたはずの東郷の片腕が、赤く染まり肥大化している。まるで紀行園で散々自分たちを苦しめた「赤鬼」のように。

「その腕……まさか！」

截は歯をかみ締めながら東郷を睨んだ。

殴られた腹部の痛みなど気にする暇も無く、自分の判断が間違っていたと気がつく。

東郷大儀は、赤鬼だ。

あのどんな傷も瞬時に直し、悪魔を一撃で粉碎する最強の化け物。今になってようやく「感覚」が反応した。恐ろしいほどの寒気が体中にまわりつき、相手の脅威の度合いを知らせる。

どんな場面でも冷静さを維持していた截の精神が、初めて揺らいだ。

「どんな役目を受けてここに進入していたのかは知らないが、黒服の青年——諦める。もうこちらはつめに入った。六角は、イミュニティーは俺たちの反撃を止めることは出来ない」

「反撃？ バイオハザードを起こし関係ない人間を皆殺しにする。これのどこが反撃だ……！ お前のやっていることはただの無差別殺人だ。こんなことをしても、イミュニティーは痛くも痒くも無いぞ」

小男に押さえつけられたまま、唐沢が地面にくっつきそうな唇を

大きく振る寄せた。

思い出したように唐沢のほうを向きながら、東郷はほくそ笑む。

「わかっていないな。唐沢信久。からさわのぶひさここから、この六角が多額の資金を積み込み成立している常世国から、彼の在留中に無数の異形の化け物があふれ出たら、一体どうなると思う？ マスコミは？ 世間
は？ 誰もが『何か』がここで研究されていたと気づくだろう」

事前に主任としての唐沢の顔を記憶していたのか、東郷は赤い腕を上に掲げ、自慢するように声を張り上げた。

「バイオハザードを起こし、それによりイグマ細胞の存在を世界中に教えることが、お前の目的なのか？」

脛すねまで水に使ったまま、截が瞳孔の小さくなった冷たい瞳で東郷を捉える。話しながらも相手の隙を探すように、その体は緊張感で満ちていた。一度赤鬼に事実上敗北をしている身なのだ。少しも油断は出来ない。

「そうだ。普通にテロを起こすだけでは意味が無い。イミユニティの力は強大だ。奴らの力ならその事実を簡単に隠蔽することが出来る。情報業界、政界各研究所まで、その根は深い。絶対に収拾をつけることの出来ない凶悪な感染者、『鬼』がこの常世国からあふれ出ることで、初めてその鎖を断ち切ることが出来るのだ」

「——お前の言っていることは希望にすぎない。どうやってあの感染者たちを外に放出する？ 確かに外にさえ出れば、奴らは包囲網を抜け切り足止めを受けているマスコミのところまで到達できるだろう。だが、もし外に出せてもそのときはイミユニティだってなりふり構わず銃を使うし、そもそもここは強化シャッターで覆われている陸の孤島なんだぞ」

「上はな」

こちらの言葉を百も承知だと言わんばかりに、東郷はすぐに答えた。

「強化シャッターや防衛加工がされているのは、研究所内と常世国内だけだ。この下水道にそんなものなど存在しない」

「なっ……!？」

確かにいつさつき、唐沢はここそが本来の研究所へのルートだと言っていた。それが本当ならば、ここはイグマ細胞に関する施設の外に当たる場所。防護加工やその備えをする必要も意味もなかった場所である。

——まさか、本当に？ けど、確かに赤鬼の力なら……

あの巨大な怪物の脅威がどれほど危険であるか、思い出すまでもない。紀行園はほぼ彼一人で壊滅したようなものだ。ここで暴れられれば百パーセントの確立で自分も唐沢も夏も死ぬだろう。実証経験があるからこそ、それはためらい無く認識できた。

截が自分と戦闘したことがあると知っている東郷は、その考えを読んだのか、言葉が続けた。

「ふふ、心配するな。俺にはまだやることが残っている。下水道と外を繋げ、常世国の中の感染者たちを出しても、お前の言った通り優先問題の関係で銃を使われれば、鬼たちだろうが負ける可能性もある。だから——」

東郷は截に背を向け、先ほど開けた扉へと近づいた。歩きながらゆつくりとその腕を元の形に戻す。

「BLACK・DOMAブラックドメインINの感染体たちも解放するのさ」

「なに……!？」

「そのためのスパイであり、そのためのPCウイルスであり、そのための『テュフォン』だ」

途端、地響きが起きた。もう長い間流れていないはずの下水道の水が、大きく波打ち始める。

截は自分の足元が動いたような気がした。

——随分浅いと思っていたけど、まさかこれは……——

超感覚が危険を知らせる。舌打ちし、截は斜めに盛り上がった足元を蹴り東郷たちから見て左斜め前へと跳躍した。

まるで水で出来た山があるかのように錯覚させられるような、そんな大きな波が目の前で立ち上る。

「截——！」

唐沢が叫んだが既に遅く、截は暴れ狂う波に飲まれ、濁流とともに吹き飛び、姿を消した。

「この化け物が俺の変わりに穴を開けてくれる。俺たちがやることは、その間に六角の脱出を阻止することと、ブラックドメイン、G Eの開放を行う二つの仕事のみ。もはや、勝ちは確実だ」

東郷は扉のノブを掴み、投げ捨てるように後方へと一気に引いた。それを見た小男も唐沢の上から退き、扉へと向かう。

「ま、待て！」

あわてて立ち上がり小男に掴みかかろうとしたのだが、今度は簡単に腕を逸らされ、腹部に強い蹴りを受けた。

「がほっつ——……！？」

「いいんですか、お兄さん。あの黒服の青年、死んじゃいますよ？ま、私には何の関係もないですけどね」

ばっははと、小男が下品に笑った。

——くそっ！

この東郷の計画を知っている人間は自分と截の二人だけだ。単身じゃとても東郷たちに勝てるとは思えないし、それに六角に知らせている時間もない。今ここでこのテュフォンとかいう化け物を倒さなければ、確実に間に合わずに外との壁を破壊される。常世国だけではなく、この町全ての住民に危険が及ぶことになる。

全ての黒幕を前にして、自分の研究の集大成である彼女の命を無駄に仕掛けた相手を前にして、それでも何も出来ない悔しさに唐沢は地面を叩いた。

「急いだほうがいいですよ。テュフォンが壁を破壊するまでの所要時間は、約五分に設定しています。その間にあれを殺せなければ……イミュニティーと外の間人はお終いだ。わかりました？ わっか

たらウジウジしてねえでさっさといけよボケが」

急変したように眉間に皺をよせ、そう言っと、小男は東郷のあとを追って扉の奥へと消えた。同時に、再び扉にもロックが掛けられる。

もう自分の出来ることは、道はひとつしかない。

波打つ水面を一瞬だけ、睨むと、唐沢は唇をかみ締めながらその中へと飛び込んだ。

<第十五章>急転する事態？（後書き）

何か最近、どんどん截が人間離れしてしまっている気がします。

<第十六章>急転する事態？

「ふむ、やつぱり大分壊されているな。……これは全部再建するのに一体いくらの資金と時間がかかることやら」

研究所内、実験体格納庫。そこに足を踏み入れた六角は、自分の記憶と目の前の光景との違いに深いため息を漏らした。

「中央のポッドが開いています。あれは確か唐沢主任が研究を行っていた再生細胞増殖生物の水槽……代表、気をつけたほうがいいのでは？」

吹き抜けとなっているこの場所からは、どこからでも全階層全ての様子を目視することができる。最下層にある扉の吹き飛んだ水槽を見て、秘書の榊^{さかき}が不安がった。

「ん？ ああ、それは心配ない。あれの末路は既に夢で見ている。僕たちのもとへ来ることはないさ。それよりも危惧することは別にある」

背後に控える友、雫、亜紀その他の隊員たちを視認し、六角は残念そうに目を下げた。

「僕たちがブラックドメインから脱出することはディエス・イレ側にも予想がついているはず。それにもかかわらず、これまでに何の妨害もないのはおかしい。まるで誘導されているかのようだ。もしかしたら、奴らは僕をG・Eへと追い込みたいのかもしれない」

「G・Eへ？ 何故です？」

理由を推測することが出来なかったのだろう。榊^{さかき}が恐々とした表情で詰め寄った。

「あそこにはディエス・イレすら知らない未知の原生生物がウヨウヨしているからね。それを手に入れることが出来れば、生物兵器を作る上で飛躍的な技術向上に繋がる。暗殺などせずにわざわざこん

な事件を起こしたのも、普段は嚴重極まりない封印を施してあるG・Eへ進入するためだったと考えれば、納得がいかないか？」

秘書の女性が息を呑んだ。もし六角の言葉が本当ならば、彼女たちが逃走することによって、東郷たちに閉鎖中であるG・Eへの道を切り開くことになってしまう。それはイミューニティーのつてあまりに大きな損失だった。

「でも、現状ではそこ以外に脱出手段がありません。どうする気です？」

話を聞いていた友が背後から尋ねる。六角はすぐに答えた。

「……奴らがどんな脱出手段を講じているかは知らないが、今常世国の周囲は無数の隊員で囲まれている。僕たちが脱出し次第、高速エレベータを閉鎖すればいい。あの大量昇降機は内側からの感染体によるどんな攻撃にも耐えられるように設計されている。例えばダイナマイトやC4爆弾を利用して、すぐには壊れない。そもそも簡単に大破出来るのならデイエス・イレもそこから進入しているはずだしな。もともと人が踏み込むようには考えられていない場所だ。閉じ込められれば、ものの数分でテロリストたちもあの世へ旅立つさ」

——そう、G・Eはそれほど危険な場所。護衛が居るとはいえ、本来は自分たちが高速エレベータにたどり着けるかどうかすら怪しい危険区域。「感覚」を持たない東郷など、閉じ込められればひとたまりもないだろう。それに——

別に今更東郷たちにG・Eの情報をいくら与えようと、『自分』には何の問題もない。そのころには全てが終わっている。

密かに進行している計画を思い、六角はあっけらかんとした調子で言った。

「——ところで、この大人数で移動し続けるのはちよつと効率が悪いな。感染者に攻撃されても回避する隙間がない。いくら分散して行動しないか」

「……そうですね。人が集まればその分気配も大きくなる。最終的

にブラックドメインへの隔離扉で合流するのがいいかもしれない。数人程度のまとまりを作り、あとはそれぞれ別のルートで移動しましょう」

こちらの意図をすぐに理解し、友が周囲の人間に指示を出し始めた。さすが救出部隊に選ばただけであり、使えたと六角は感心する。――頼むぞ。国鳥友。君には最後まで僕を守ってもらう必要がある。無事に屋上まで出ることさえ出来れば、こちらの思惑は達成できるんだ。

デイエス・イレの襲撃というまったく予期していなかった事態だったが、自分の目的を達成するためにはかえってこの状況のほうが都合がいい。いくつもの思惑を腹にかかえ、六角構成は静かに動き回る面々を傍観した。

截は超感覚によりあの怪物の攻撃を避けていた。波に押されはしても、溺れたり怪我をするようなことはないはずだ。

「截、どこだ！」

肩まで浸かった水を掻き分け、唐沢は声を荒げた。

背後では盛り上がった水面が蠢き、徐々に何かの姿が浮き彫りになってきている。全体像はわからないが、相当な大きさであることは明らかだ。完全に動き出せば自分の力では絶対に止めることは出来ない。必ず截の協力がいると、唐沢は再び叫んだ。

「截！ 返事しろ」

すると、目の前の水が飛び跳ね、黒い塊が水面に表出する。タイミングよく截が顔を出したのだった。

「よし、無事か。すぐに通路に上がるぞ。水の中じゃ不利すぎる」

截は軽く咳き込みながら答えた。

「東郷たちは――？」

「G・Eを解放しに行った。そっちも早く何とかする必要はあるが、まずはあれを止めるのが先だ。外の連中がうまく放出した感染者たちを倒せるかなんて、五分五分なんだ。もしあれが壁を粉碎すれば最悪この町、浄泉橋中せんよきょうちゆうの人間が殺され感染する。バイオハザードどころかパンデミックになっちまうぞ！」

町ひとつが感染者で溢れかえるなどしやれにならない。しかも、今回の場合は夢遊町で起きた事件とは違い、根源の感染体を殺してもその拡大は止まらないのだ。何としても止める必要がある。

「――唐沢さん、下がれ！」

截が前を見て唐沢の腕を引っ張った。水中であるため大して位置は変わらなかったが、その影響で体の向きが変わる。

二人の前にテュフォンと呼ばれた怪物の全身が表出した。

まず目に入ったのは三つ葉のクローバのような頭。その尖った部分それぞれに大きな丸い目玉が光っている。

水を掻き分け浮かび上がった体は巨大な芋のようだった。背中のど真ん中にぱつくりと割れた大きな口があり、全身を覆いつくすように短く太い触手が生えている。そしてその二本の脚部はスキー板のごとく長く伸び、それぞれがひとつの指、爪のような形をしていた。

> i 1 4 7 7 6 — 2 2 4 <

> i 1 4 7 7 3 — 2 2 4 <

瞬く間に、唐沢は相手の移動手段を理解する。

「急げっ——！」

あれは高速移動用の体。「特攻」するために調整された生物。水中どころか、陸上においても逃げるのは容易ではない。このままではその進行を食い止めるどころか何も出来ずに自分たちが殺される。言わずとも感覚で理解していたのか、截もすぐに通路へ向かって泳ぎだした。激しい水飛沫が飛び散る。

「ブボオオオオオオオオオオオオオオオオオウウウー！」

汽笛のような轟音が怪物から発射される。同時に強烈な空気の塊が二人の体を押した。

「早く、このままだと死ぬぞ！」

截が通路の縁^{へり}に手を突き、膝を立てる。次に唐沢が腕をそこに伸ばしたとき、怪物は全身の触手を下水道中の側面に張り巡らし、パチンコ鉄砲のゴムを引くようにその体を後方へと下げた。

——来る！

間に合わない。唐沢は全身の毛を総毛立たせ、恐怖から目を見開いた。

六角行成と別ルートでブラックドメインを目指すことになった隊員たちは、約十五人にも上った。

これはほぼ常世国付きの隊員全員であり、六角行成の元には救助部隊の面々と一部の生存者だけが残った。

地位の高い者が安全を優先されるのは当然のこととはいえ、隊員の中にはそれを不満に思う者も居る。警備主任の中崎^{なかざき}一もその一人だった。

ガラス張りの部屋が並ぶ通路を歩きながら、自然とため息が漏れ

る。

「畜生……比較的安全だっていうから、俺はこの隊員に志望したんだ。それがまさか、こんな羽目になるとはな」

自分はもう随分と現場を経験した。仲間の死に目も何度も何度も見た。そろそろ現場を離れようと思って見つけた最高に条件のいい職場だったはずなのに、何でこうなるのだろうか。己の運のなさを心から嘆いた。

「鬼に遭遇したら俺たちは終わりだぜ。あの救助部隊のように優秀な人間なんかじゃないんだ。この面子だってみんなだらけだった隊員ばかりだし、ったく、六角代表は俺たちに死ねって言うてんのかね」

「しょうがないですよ。大勢で行動していたら本当に危険なんですから。それに、研究所の中は地上や上の職員施設より感染者の数が少ない。まだマシだと思っっていたほうが気が楽ですよ」

「お前は真面目だね。よくそんな風に考えられるわ」

微笑む女性隊員をちらりと一瞥し、中崎は額の汗を拭った。鬼と遭遇したときに勝ち目がないことは、六角行成の所為ではない。実力の無い自分たちが悪い。それは当然わかってる。しかし気持ちとして、一人の人間として、やはりどうしても愚痴を言ってしまうのだった。

ゴホゴホと女性隊員が咳き込む。風邪を引いているのか、結構辛そうだ。

「大丈夫か？」

「ええ、ちよつと疲れたみたいです。ずっと働きっぱなしですから。実は、もう二日も寝ていないんですよ」

口元に手を当てたまま、女性隊員は困ったように笑った。

「何でだ？ お前昨日は非番だったじゃないか」

「こんな仕事ですから……なかなか彼氏と会えなくて、つい夜通し遊んでしまつて」

「……ああ、なるほど。俺も経験があるよ。あのころの妻はかわい

かったからな。今じゃ家に帰っても『あら、居たの?』って感じだが。でも、寝ないのはよくないぞ。この仕事は一瞬一瞬の判断が大切だ。もしものときに頭が働かないなんてしゃれにならないからな」

「……………はい、気をつけます」
女性は再び咳き込んだあとにそう言った。

「中崎さん。あれを見てください」

二人の後ろを歩いていた若い隊員が前を指差す。中崎が指された場所に目を向けると、通路奥の角、ここからは死角になって見えない位置に、動く影があった。

——感染者か?

「二人とも静かに。逃げる用意をしとけ。もし鬼なら俺たちの实力じゃ絶対に勝てねえ」

当然二人ともそのことは分かっていた。中崎が声をかけると同時にそれぞれ身を引くする。

影は徐々に大きくなり、ついにその主が角から姿を見せた。

相手の正体に三人は驚く。

「千原じゃねえか! どうした!?!」

この常世国で働いている職員の一人、中崎もよく知っている仲間である千原が、全身を傷だらけにして立っていた。

「その傷、鬼にやられたのか? ついつさっきまで元気に行動してたのに……………」

千原も三人と同様に生存者組の中におり、自分たちと同様にバラけてブラックドメインを目指しているはずだった。もしかこの先に鬼が居るのかと思い、中崎は彼を問い詰めた。

「……………あ……………中崎さん。それが……………」

かなり小さな細い声で千原がつぶやく。相当出血していたらしく、既に虫の息だった。

彼の姿を見て女性隊員が息を呑む。ショックが体調に影響したのか、先ほどよりも激しく咳き込んだ。そんな彼女の姿を見て、何故か千原が目を見開く。

「や、やっぱりこっちにも……中崎さん、早く……逃げて……下さい」
「何？　どういうことだ？」

「俺たちの中に、あいつが……あの男が……」

千原の口から大量の血が漏れる。思わず中崎は目を逸らした。

「あの男？　誰です」

若い隊員が厳しい表情で千原に質問した。しかし、既に遅かったようだ。千原はそつれつきり動かなくなり、がっくりと中崎の腕の中で息を引き取った。

「……死んだ」

中崎は齒軋りし、目を伏せた。

「……よくわからないけど、ここから離れたほうがよさそうだ。中崎さん。別の道を行きましょう。何だか嫌な予感がする」

「そうだな。よし、二人ともとりあえず分散地点まで戻るぞ。他の班が移動した場所を通ることになるが、これだけ時間が経っていれば問題はないだろ」

そつと千原を下に下ろし、歩き出そうとする。若い隊員はすぐに続いたが、女性隊員は某立ちしたまま、まったく動かなかった。

「どうした？　行くぞ」

中崎が不審に思い彼女の肩に手を置く。すると――

突然女性が猛烈な力で彼の腕を掴んだ。

「なっ、痛てえっ！？　ちよっ、お前なにを――」

相手の行動の意味が分からず女性の顔を見上げる。すると、中崎の目に想像だにしない光景が写りこんだ。

「あっ……あああああ……あああああ……！」

口から泡を吐き、パクパクと動かしながらこちらを見上げる女性の顔は、猛烈な苦しみに耐えるかのように歪んでいた。

その肌には徐々に血管が浮き上がり、赤く、赤く、染まっていく。

「中崎さん！」

若い隊員が女性の腕を蹴り飛ばし中崎を開放した。直後、大きな悲鳴をあげ女性が転げまわる。

「何だ！？ 何なんだ！」

今さっきまで会話をしていた相手が、元気に行動していた人間が、何故突然こんな豹変したのだ。中崎にはさっぱり理解できない。鬼と接触したわけでもあるまいし、十秒感染する要因もないはずだ。

「彼女はもう駄目です！ 逃げましょう」

しかし中崎は動けない。フリーズしてしまったかのように口を開け変化を続ける彼女の姿をただ見つめた。

若い隊員は諦めたのか、それ以上声をかけずに走り出す。だが、数秒もせずに彼が向かった先から悲鳴が聞こえた。

「な、なん——ぎゃああああああっ！？」

「ああああああ……ああああああ……」

女性の声が濁る。それはついに鬼とまったく同じものとなった。

「ザアアアアア……アアアア……！」

「藤井……？」

名を呼ぶが、返ってくるのは豪雨のような唸り声だけだ。次の瞬間、中崎の視界は白く並んだ歯と、真つ赤な舌に多い尽くされた。

突如研究所のあちらこちらで悲鳴が上がり始めた。距離がそう離れていないからか、壁越しでもはつきりと聞こえる。

その事実、友は何かよくないことが起こったのだと確信した。

——鬼か？ それにしても——多いぞ！？

無言のまま片手を後ろに下げ、みなに止まるように伝える。

「六角代表、少し待ってください。他の班の隊員の状況確認を行います」

のほほんとしていたイミューニティー代表の男に声をかけ、雫が携

携帯電話を取り出した。

彼女の動作を亜紀と千秋、そして秘書の榊さかきが心配そうに見つめる。この六角を保護する最重要脱出班のメンバーは総勢六名。友、雫、六角行成、亜紀、千秋、榊といった面子だ。班を決める当初、多くの隊員は六角行成と救出部隊だけが行動を共にし、残りの生存者たちは全て一般隊員が誘導するだろうと思っていた。だが、どういうわけか六角が戦闘能力の低い女性たちは、一番安全な自分と一緒に行動したほうがいいと言い出したため、今の面子となった。彼いわく超感覚を持っているからこそ判断らしいが、友にはなんだか裏があるようにしか思えなかった。守るべき対象を増やすことで、自分に対する意識の集中を減らしたい。そんな思惑を感じる。

配管が無数に伸びている廊下の真っ只中、雫の声だけが周囲に響いた。

「――駄目です。同ルートを先に進んでいる古矢班以外、どこからも応答がありません後方に居たはずの班からも連絡が途絶えました。通信機器に細工をされているのか、出れるような状況にないのか、とにかく何らかの妨害にあったことは確実なようです」

「後方の班に連絡が取れないということは、同じことが僕たちにも起こりえるということだ。どうする？ 国鳥隊長」

六角が奇妙なほど落ち着いた態度で意見を求めた。

「……詰め所の監視カメラから得た情報により、私たちは一番安全なルートを進んでいました。ここより危険とはいえ、それは他の班も同じはず。古矢班を除くその全てに何かがあったということは、隊員の中にスパイがいたか、何らかの手段で監視カメラの映像を敵に把握されている可能性がある。とりあえずこの先の安全は古矢班のおかげで確証が取れています。まずは彼らと合流しましょう。違うルートを選択するにしても、どこかに避難するにしても、それからです」

「そうだな。ここで論議していればそれだけその何かに遭遇しやすくなる。こちらが向かう間に古矢たちも安全地帯を確保する余裕があ

るはずだ。今はとにかく早くこの場を離れるべきだろう。では国鳥くん、先導をお願いするよ」

普通組織の代表といえば、政治や交渉手腕に長けているだけで現場の判断基準や思考パターンには疎い人間が多い。だが六角行成はまるで本物の隊員のごとく簡単に答えを出した。幹部候補生としてエリートとしてのし上がってきた彼がここまで冷静な判断を下せるという事実には驚きつつも、友は命令の通りすぐに先頭へ出た。

正直に言えば雫には後衛として自分の背後に居て欲しかったが、それを行うと背後から感染者に急襲された場合の対処がおろそかになってしまったため、生存者たちを二人で挟むように進むことにした。

何かがふにおちない。何か奇妙な感じがする。

肌寒いものを感じ、友は小さく肩を震わせた。

――……截、お前のほうは大丈夫なんだろうな。

地上で別れた旧友の身を案じる。多数の仲間がいるイミユニティですらこの有様なのだ。自分や亜紀とは違い、彼は完全なる外敵要因。不法侵入者。もし六角に危険視されれば、その息の根はすぐに止められる。

イミユニティ、ディエス・イレ、そして数多の感染者。自分以外の全てが敵であるこの地獄の中で、彼は無事に脱出することが叶うのだろうか。何だか三年前のデジャヴウを見ているようで、不安な気持ちはずっと心をつらえて離さなかった。

「ここは、随分と陰惨な場所ですね。古矢さん」

常世国付きの若い隊員。浦部はその場所の持つ雰囲気（うづき）に耐え切ることが出来ず、青白い顔を古矢へと向けた。薄暗い部屋の左右には

無数の檻が並び、腐った死体やまだ原型を留めている人間が無数に転がっている。

「実験体用の材料格納庫だからな。幽閉された材料たちの怨念でも溜まっているんだろう。君がそういう霊的なものを信じるかどうかは知らないが」

「材料つて、つまり何らかの理由で実験対象になった『人間』たちのことですよ。デイエス・イレの捕虜とか、死刑囚だとか。……古矢さんは怖くないんですか？」

まるで人を人と思っていないような古矢に対し、浦部は思わずそう尋ねた。

「何故怖がる。感染者はみな動く半死体だぞ。常日頃から見慣れているだろ」

「か、感染者と人間の死体とじゃ、ぜんぜん違いますよ！ あつちは化け物、こっちは仏様じゃないですか」

「君の基準はよくわからないな。襲い掛かってこないぶん死体のほうがマシだと俺は思うのだが」

「……もういいです。あなたにまともな返答を求めた僕が馬鹿でした」

がつくりと肩を落とし、浦部はうな垂れた。

——やつと無言じゃなくなってくれたと思えば……駄目だこの人、根本的に俺たちと考え方が違う。何かイミューニティーの中でも数少ない黒服クラスの隊員っていう話だし……きつとそんな倫理観なんかとつくの昔に吹き飛ぶほどたくさんの実践経験をしてるんだろな。

自分は新人も新人、ペーパーも良いところ。古谷との温度差の原因にそんな理由を作り、浦部は何とか納得した。

「見ろ」

立ち止まった古谷が前を指差す。浦部がそこを見ると、左の端にある檻の中に動く影があった。こちらの気配を察知してか、激しく牢を掴み暴れ始める。

「お、鬼!？」

「生きている材料も居たんだろう。腕に激しく噛まれたあとがある。そこから十秒感染したんだ」

「はあ、危なかったですね。確かこの先は下の階に下りるための階段がある。もしこの檻の鍵が開いていれば面倒なことになってましたよ」

浦部は額の汗をじつくりと袖で拭った。

「ここは円柱をくり抜いたような構造だから、別に下階へ移動するための階段はその一本だけではないが、まあ迂回することによって時間を食うことは確かだな。他の階段が塞がっていない保障はない。先ほど真田雫から受けた不穏な連絡のこともある。とりあえず六角代表がたどり着くまでここを確保しよう」

仲間の大多数と連絡が取れない。その事実は一二人に大きな衝撃を与えていた。古矢の言葉に頷くと、浦部は通路の先、階段の方向を調べようとした。

「あ、ちよつと待て。念のためその鬼がいる牢の鍵を確かめてくれないか。もしかしたら損傷しているかもしれない」

「あつ、はい。わかりました」

指示された通り牢へ近づく。するとだんだんと周囲の空気がむわつとした湿気を帯び始めた。どうやらこの牢の中から発生しているものらしい。不快な臭いを感じたので鼻を押さえながら目を凝らすと、奥にいくつもの肉塊が転がっているのが確認できた。

——同室の『材料』か。この男が鬼になったことで、食われたんだな。かわいそうに。

形だけの追悼を捧げる。しばらくして目を開けた浦部は、視線を牢の扉中央、鬼を閉じ込める要である鍵へと向けた。

「……うーん、大丈夫そうですね。ところどころ引つかき傷みたかなのはありますが、これなら鬼が外へ出るようなことはなさそうです」

「そうか」

かなり近い場所から古矢の声が聞こえた。どうやらいつの間にか真後ろに立っていたようだ。気色悪いので離れようとしたとき――

「なら、やはり外に鬼を作るしかないな」

「え？」

ドンッ、と。浦部は背を強く押された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0240k/>

尋獄3（GENESIS CRADLE）

2010年12月1日22時10分発行